第十二章　怖ろしき苦惱

ちり〳〵と漸く三十分が過ぎた。第七中隊は餘り後方に離れ過ぎて居る、それに森の中には路といふ程の路がないとベルケルスブルグが考へた。彼はぢれつたさうに草の上を行きつ戻りつした。第八中隊の射撃は段々と弱くなつて、時には何分間も斷える事があつた。しかし相變らずアドルフの聲が聞えた。尤も餘り叫んだ爲めに嗄れては居たが。

『氣を付け、右方の敵の砲兵、照尺一千。任意射撃！』

終にベルケルスブルグは又た喇叭卒の所へ行つた。

『喇叭卒、第七中隊進撃の喇叭を今一度鳴らせ。』

又た信號喇叭が森の中に響き亘つて、又た第七中隊の喇叭手が答へた。但し今度は前よりも餘程近く聞えた。

ベルケルスブルグはほつと息を吐いて言つた。

『好い鹽梅だ、やつて來る。間に合ふぞ。』

『さうであります。』とシュロッセルが答へた。

機關銃の音が新たに起つた。その途端に榴霰彈がひゅうと鳴つて彼等の頭上を過ぎた。

『シガーをもう一本やらんか。煙草に限るよ。』

『はあ、ありがたう存じます。私はもう喫めません。』

『元氣がなくなつたか。』

『いゝえ大丈夫であります。』

シュロッセル　少尉は氣を取り直した。しかし少尉の體の慄えたのがベルケルスブルグの目にとまつた。彼は微笑を隱さなかつた。此大隊長は＝（ユロッセルが考へた）＝第八中隊の兵士を殘らず犧牲に供しながら微笑することが能きるのであらうか。大隊長は＝（彼が又た考へた）＝熱誠からではなく、自己の地位が戰死を命じるのだと言ふ理性的の信念から、やはり從容として自己を犧牲に供するであらう。

此樣な事を考へながら彼は少佐の顏を眺めた。すると少佐が突然彼に向つて言つた。

『僕が戰線へ行つて來るまで代つて指揮をして呉れ。』

シュロッセルは無意識に『はあ。』と答へた。

彼はベルケルスブルグが戰線へ行きたがる理由を解した。第八中隊の射擊が止んでアドルフの聲は最早聞えなかつた。死の沈默が之れに代つた。彼は大隊長を引留めやうかと思つた。何故なら丁度其時に又た一つ砲彈が破裂して、鮮黃色の光焰を發して四邊を照したからである。しかし、もう遲かつた。シュロツセルは少佐が森の木の間に濶步して姿を消すのを見た。その途端に第八中隊の他の卒が、ろくに口も利けないやうになつて丘を駈け登つて來た。

『何の用か。』

『アドルフ大尉殿の命令で援兵の請求に來ました。私の出掛けた時は十一人きり殘つて居りませんでした。』

元氣のよい『フラア！』の聲が起つて此兵士の聲がよく聞えなかつた。

步兵射擊が再び活潑になつた。シュロツセルはアドルフ大尉が部下の兵士に何か命令した聲を聞いた。第七中隊が戰線に到着したのだ。

『援兵は既う彼處へ行つたぞ。』シュロツセルは深い吐息をついて言つた。

使者に來た兵士は急いで歸つた。戰線に着くと、彼は草の上に身を投げ、銃に裝塡して、引金を探つた。しかし射擊を始めない中に彼は呼聲を洩らした。部下を勵まして居た大隊長の丈高い體がふら〳〵と倒れるを彼は見たのである。

『やあ大隊長殿が！』

『軍曹！』とアドルフが呼ばはつた。

草の中から頭が出た。

『代つて指揮をして呉れ。』

『はあッ。』

霰の如くに降り注ぐ銃丸を物ともせずに、アドルフは、つか〳〵とベルケルスブルグの側へ行つた。

『ベルケルスブルグ。負傷したか。』

答がない。

『何とか言つて呉れ。彈丸が中つたのか。』

アドルフは親友を引寄せながら、四邊を見廻した。彼の眼が部下の一兵士に止つた。

『カンム、手を貸して呉れ。大隊長が……』

カンムは二人の將校の方へ轉げるやうにして近付いた。

機關銃から間斷なく彈丸を送つて來るので、起ち上る譯には行かない。彼等は知覺を失つた少佐の體を抑えた。

『彈丸の來ない處まで運んで行かう。』とアドルフが言つた。

彼等は一心に草や藪の中を匐つて、漸く少佐を安全の場所に移す事に成功したが、血液が減じた爲めに負傷者は全く活力を失つたやうに見えた。聲も出す體も動かなかつた。

『カンム。迚も空地まで行く譯には行かないぞ。途中で死ぬだらう。うむ、此木の下ならば彈丸の來る心配もあるまい。』

彼等はとある灌木の下へ少佐を運び込んだ。

『何處をやられたのかな。』

アドルフは少佐の軍服の胸をはだけた。

『カンム、何うもなつてないぞ。一體創口は何處にあるのかなあ。』

アドルフの顏は眞赤にほてつて居たが、體は惡寒を感じたやうに慄えた。

『どうかして助けてやらなければならない。』

『さうであります。』

小銃のばり〳〵音や、機關銃のがた〳〵音や、擲彈の爆發する音や、榴霰彈の破裂する音が、彼等の言葉を句切つた。

少時してカンムが叫んだ。

『大尉殿。此處であります。』

『何處だ。』

『腕關節の動脈が切れたのであります。』

『カンム。其腕を高く擡げて居れ。』

『はあッ。』

カンムは片方の手で少佐の腕を擡げ、他方の手で負傷部を強く壓えた。アドルフは急いで上衣を脫いだ。

彼はワイシャツを引脫き、細長く裂いて、それで堅く負傷者の手頸を縛り、ナイフを挾んで間に合せの血止にした。出血は直ぐ減じて、遂には全く止つた。直接の危險だけは之で免れた。

『先つ可かつた！』

『さあ、そうつと空地まで連れて行かう。敵の射擊が幾らか弱くなつた。』

其處に到着して彼等は少佐を副官の足許に横へた。

『何うしたのであります。』とシュロッセルが叫んだ。

『なに直ぐ正氣が付くよ。』

『さうですか。』

『見て見給へ。』

少佐の蠟のやうな顔に心持ち紅味が現はれた。それから五分經つた。するとベルケルスブルグが眼を開いた。

『此處は何處だ。』

『ベルケルスブルグ。心配するな。』

『うむ、アドルフか。』

『さうだ。僕だよ。』

『今まで僕は何處に居たんだ。』

『戰線に居たんだ。』

『あゝさうか……』少佐は徐々に意識を回復した。『戰線で奈何したんだらう。』

『砲彈の破片で手頸に負傷したんだ。動脈が切れたよ。しかし幸に僕が側に居合せたから可かつた。』

『それで君が……君が……』

『さうさ。當然ぢやないか。』

『アドルフ！』

少佐の唇は辛うじて友の名を呼ぶ事が能きた。彼は再び正氣を失つた。間もなく彼は呟いた。

『水、水、體が燃える。』

母の如き優しみを以て、アドルフは冷い珈琲のフラスコを乾いた唇に當てがつた。

『あゝ好味い、好味い。』半ば意識を失つた少佐が低い聲で言つた。彼の頭腦は乾いた喉を通る冷い液體の外何物をも知覺しなかつた。

アドルフは跳び上つた。

『カンム、さあ出掛けやう。あとはシユロツセル少尉が看て呉れるから。』

大尉と兵士は急いで戰線に歸つた。再びシユロツセルの耳に聞き慣れた號令が聞えた。

『氣を付け！照尺六百……任意射擊！』

戰鬪は引續き行はれた。後方に控えた三個中隊は順々に進擊を命ぜられた。

日がすつかり暮れるまでにベルケルスブルグの大隊は殆ど全滅して了つた。しかし彼は少しも之を知らなかつた。丁度月がロージー教會堂の尖塔の上に昇つた。其冷やかな光線を浴びて山毛欅の老木の下に横はりながら、少佐の意識は徐々に回復して來た。第一に彼の頭腦はメラニーの事を考へた。露國境は何んな具合であらうか？ファルケンスタインでは如何なる出來事が起つて居るであらうか？

心身疲勞し切つたベルケルスブルグは何うしても考へを纏める事が能きなかつた。彼は再び眼を

閉ぢた。さうして血と涙と砲火と嫉妬と戀の混亂した夢の中に相變らず アドルフ の確乎とした朗らかな聲が響いた。

『氣を付け！……照尺六百……』

信號喇叭の音のやうに此聲が折々ベルケルスブルグの不安の夢を透して響いた。

第二編　地獄の旗顯はる

第一章　心痛

ピエール・ビュニヨンは八年前からロージーの村長であつた。彼の有名な伯林電報が巴里に着いて、その翌々日獨逸の白耳義侵入が世界を驚愕せしめて以來、數週間と言ふものは、村中が非常な騒きである。彼は在職八年の間に始めて今度のやうな騒ぎに出會した。

ピエール・ビュニヨンは彼是六十歳の男やもめで、小さな村の割には大資産家であつた。さうして彼はカフエー・デユ・レイゾンと呼ぶ旅人宿兼飲食店の主人であつた。村には同業者がないので彼の營業は中々繁昌した。

彼は鬱ぎながら店の入口に立つて、長い睡眠から覺めた猫のやうにまぼしさうに陽を見て居た。あまり綺麗でもないワイシヤツの上に紺の上衣を引掛け、赤と白と青の總を附けた無緣帽が其禿頭に載つて居た。

彼は一向元氣がなかつた。村の若者は軍隊に召集され、戰爭が段々とロージーの附近に押寄せて來たので、それ以來營業はすつかり不景氣になつた。さうして今は既う獨逸兵の一大隊が村に入り込んで、農家に宿營して居た。ロージーは忌々しい獨逸兵で一杯であつた。彼等は室も納屋も悉く侵略し、盛んに飲食物を徵發した。それで村民の多くはカフエー・デユ・レイゾンに近寄らなかつた。何故なら此處にも敵兵が宿營して居て、うつかり近寄れば何んな目に逢うか解らないからである。

時節が時節だ。何もかも辛抱しなけりやなるまいと、ビュニヨンは頭を搔きながら考へた。彼は天氣を觀て居るやうに見えたが、實際は他の事柄を氣に掛けて居た。何故なら三十分程前に大隊長が佛語の話せる傳令從卒をよこして、カフエーに來る旨を傳へさせたからであつた。ビュニヨンには大隊長の來訪の動機が何であるか解らなかつたが、獨逸人の天降りは何うせろくな話ではあるまい。徵發の外に用事はない筈だ。彼は大隊長が何を徵發する積りだらうと惟みながら、酒場へ引込んだ。

窓際の卓子に凭つて三人の農夫がトランプをやつて居た。

『やあ、皆の衆よく來なすつた。』

『ビュニヨンさん。今日は。』

連中はトランプに氣を取られて居てろくに顏もあげなかつた。ビュニヨン村長の姪のジヤンヌ・ロ

アジールが酒賣臺の後に控えて居た。彼女は叔父の方を見て、林檎酒の瓶が大方空になつた事を告げた。

『酒倉から出したら可からうぜ。』

ピエル・ビュニヨン は卓子に近寄り、農夫連中の札を見て、それから口にくわえて居た喫みさしの葉卷に火を點けた。

『マルトー。お前は運が向いたやうだ。』

マルトーは顏を上げなかつた。彼は鬚のぼう〳〵生えた顎を掌に支へたまゝ、何かぐづ〳〵言つた。それが呪詛の言葉のやうに聞えた。

『運が向いたつて、村にやあ鬼が來て居るだあ。』

『お前の處にや幾人押しかけて來た。』とビュニヨンが訊ねた。

『來たの來ねえのつて、うんと來やがつた。』とマルトーが答へた。

『マルトーどんはよく我慢してるだあよ。』ロッスと呼ぶ今一人の百姓が呟いた。

三番目の百姓は激しく點頭するばかりであつた。三人は之れ以上何も言はずに又たトランプを始めた。カフエー・チユ・レイゾン へ來る客は餘り談話をしなかつた。殊に今日は皆な氣が沈んで居た。

佛蘭西軍が優勢であつたにも拘はらず、獨逸軍はトロワイヨン の森の戰鬪に勝を占めたのであつた。彼等が今此の村を占領して居るところを見ると、それは少しも疑ふ餘地がなかつた。ロージー村の人民は悉く之を憤慨して居た。

ピエル・ビュニヨンは ジヤンヌ・ロアジール が酒倉から階段を昇つて來た途端に、酒賣臺の後へ行つた。

『ルイ坊は何處に居るだ？』と彼が訊ねた。

『知りましねえよ、叔父さん。』

『知らねえ？』

『えゝ、知らないだわよ。』と娘は言ひ張つた。だらしのない扮裝をして居なかつたら、非常な別嬪と言つて差支ない嫖致だ。しかしエプロンや上衣が汚なくつても、ジヤンヌは可愛い子であつた。ロージーの若者達が戰地へ出掛ない頃は、此の別嬪の居る爲めに、彼女の叔父のカフエーはいつも大入りであつた。

『そんならお前はルイが何處に居るか知らねえだか。』

『あい、叔父さん。あたい知らないだわよう。』

老人は戰爭の話でもしやうと思つて又た百姓連のところへ戻つた。マルトーとロッスは駄目だが、

今一人の男なら話相手になるかも知れない。

『どうだシエルブイヨン。お前ん處の鬼めらは？安心かの？』

シエルブイヨンは駝背であつた。彼は雀斑だらけの顔を歪めて妙な笑ひ方をしながら答へた。

『安心とも、安心とも、大安心だ。……鬼めらは俺らのやうな醜男を食やしめえ。俺らの顔を見りやあおつかねえ筈だア。』

ビユニヨンは笑つた。

『いや、鬼めらは何とかして第一にお前を味よく食へるやうにするだらう。彼奴等は腹がへると何でも食ふからのう。』

駝背のにや〳〵笑ひが凄い相を帶びた。

『彼奴等は眞實によく食ひやがる。ビユニヨンさん。此場限りの話だがの、嗅がまだ亞砒酸を有つてるだよ。ほらお前さんも知つてるだらう。去年の冬俺らんとこぢや鼠が出やがつて法がつかなかつたんだ。あにしろ川の傍だでな。あの川の埋立が出來てからてえもの鼠めみんな畑の方へ押掛けて來やがつたのさ。』

『うむ、うむ、さうだつけのう。』

ビユニヨンは酒賣臺の背後へ入り込んで、たつた今酒倉から出して來た瓶の林檎酒を一杯聞し召

した。

『ルイの奴一體何處へ行きやがつたゞ。』と彼は呟いた。

彼は一人子息のルイの事を心配して居た。二人の娘は何年か以前に他の村へ嫁いて、その連合ひは二人とも戰地へ行つて居た。しかしルイは未だ召集されなかつた。彼は漸く十七になつたばかりで親父の氣に入り子息であつた。母親は月足らずのルイを生み落すと間もなく死んだ。彼は未だ惡戯ざかりの腕白者であつた。

『ルイの奴何處へ行つたかの？』

『おい。ビユニオンさんや。ルイ坊の事が心配かも知んねえが、まあちよつくら靜かにして呉んなせえよ。』マルトーが不平さうに言つた。『お前さんが騒ぐんで勘定が間違ふぢやねえか……する と二十四、三十、三十五だな。ロツス。お前は三十五の負だぞ……だから七スー出しや可いんだ。七スー出せよ。』

ロツスはヅボンの隱しから革の袋を取出した。彼は此袋の中に有金殘らず入れて持つて歩く。町へ野菜を賣りに行く時も、必ず此袋が彼に隨いて行くのだ。ロツスの菠薐草と言へば近所近在で有名になつて居る。其理由と言ふのは、彼はロージー村の下水溜を賃借して居て、その下水を肥料に使ふから菠薐草の出來が好いのだ。

彼は大きな銅貨を大事さうに一々改めながら卓子の上へ並べた。戰爭の事などは少しも念頭にないやうであつた。ロッスは中々の愛國者であつたが、今は汗水たらして儲けた其等の銅貨の方へ心を奪はれて居た。之を手放す事が彼に取つて如何に困難であるかは、マルトーもよく承知して居た。

『もう一つ、もう一つ、』マルトーが言つた。『おいロッス、早く、早く。もう一つ……』

とう〳〵銅貨が七つ卓子の上に並べられた。するとマルトーはそれを攫つてポケットへ入れて了つた。

マルトーに勝たれたと言ふのでロッスは癪に障つてならなかつた。これが『駝背』に取られたのなら、左程にも苦にしなかつたであらうが、マルトーは村で一番の金持だから、こんな金を取らなくつても可いのだ。つい此頃彼は訴訟に勝つて上等の地面を手に入れた。ロッスに言はせると、此地面は波稜草には持つて來いである。さうして今彼はロッスの金を七スーもせしめた。尤も彼の家には獨逸兵が一番多く宿營して居る。彼は自分の家に『隱居所』と言ふ名を附けたが、其隱居所には獨逸の鬼が一杯だ。結構な隱居所もあつたものだ！ロッスは此樣な事を考へて獨りで竊み笑ひをした。

此時カフエー・デュ・レイゾンの戸を思ひ切つて叩く音がした。酒賣臺の背後で坐眠をして居た

ビュニヨンが音を聞いて跳び起きた。百姓連中も耳を聳てた。ジャンヌ・ロアジールは何うせ善い事ではないと思つて、こつそり臺所の方へ行つて了つた。唯だ子猫のミネットのみが泰然自若として、酒賣臺の後方の椅子の上で氣持好さうに喉をごろ〳〵言はせて居た。

『お入り。』ビュニヨンが唸るやうな聲で言つた。

『獨逸の豚だア。』とロッスが呟いた。

一人の大兵肥滿の獨逸兵がづか〳〵と入つて來た。此の兵士はベルケルスブルグの大隊に屬する第七中隊第一小隊の嚮導兵で、トロワイヨンの森の戰に運よく生殘つた一人であつた。

ビュニヨン村長は見上げるやうな大男の威風に怯ぢけて帽を脱いだ。兵士は佛語を二字記した覺書を彼に手渡した。

『武器、うむ、武器。』とビュニヨンは小聲で呟いた。

兵士は敬禮して出て行つた。

『おい、彼奴等來るだかね。』

『屹度來るに違えねえだ。』とビュニヨンが答へた。

農夫等はトランプ札を投げ出した、ジャンヌが出て來て勘定を受け取つた。

『ビュニヨンさんや。それぢや俺らは歸るべえ。』

『歸るかの。又た來なせえ。』

三人はそこ〳〵に歸つて行つた。

『ルイ坊は何處に居るかの?』ピユニヨンが又た訊ねた。

『知らないだわよ。』とジヤンヌがそつけなく答へた。しかし氣味の惡い微笑が彼女の口元に浮んで、その氣丈な眼の中には諦めたやうな表情が潜んで居た。

『屹度亂暴して來るだ。』とピユニヨンが娘に言つた。

『屹度さうだわよう。』

ピユニヨンは物足らなかつた。彼は無駄とは思ひながらも、今一度警告を繰返さうとした。その時丁度戸口が開いて、ベルケルスブルグがヨルフ軍曹と一緒に入つて來た。ベルケルスブルグは繃帶した左腕を肩から吊つて、蒼い顏をして居た。

簡單に『ボンジユール』と挨拶して、彼は卓子に近寄り、鋭い聲で吩咐けた。

『おい姐さん、卓子の上を片付けて呉れ。』

第二章　迷想の中に彷徨する人

ジャンヌ は默つて吩咐かつた通りに片付けた。ヲルフ軍曹は窓から庭を眺めた。其處には ビュニヨン の鷄が糞山の上で遊んで居た。軍曹が青い紙の書類を抱えて居るので、少佐の仕事の性質が略ぼ分る。ロージー へ侵入した時から、彼は此土地の支配者であつた。

『ペンとインキを持つて來い。』と彼が命じた。

ジャンヌは解らない顏をして彼を見た。

彼はいら〳〵した調子で繰返した。

『ユヌ、プリューム、エ、ド、ランクル。』

娘は一寸もぢ〳〵して、ペンとインキを出した。

『軍曹、椅子に掛けろ。』

『はあッ。』

ジャンヌは一脚の椅子を窓に脊を向けて卓子の側へ据えた。二人とも坐を構えた。彼女はインキ壺とペンを軍曹の前に置く途端に、對手が獨逸の軍人である事を一寸忘れて、無意識に訊ねた。

『旦那さま、葡萄酒は？』

『うむ、一杯貰はうか。』ベルケルスブルグが答へた。

『赤にしませうか、白にしませうか。』

『白。』

注文を聞いてビュニヨンが壜に注いだ。それをジャンヌが二人の處へ持つて來た。

『勝手に注いで飲め。』

『はあッ。お指圖に從ひます。』

『いや、俺の指圖に從はんでも可い。飲みたければ飲め。いやなら飲まずに置け。』

『はあッ。自由に致します。』

ベルケルスブルグは五十サンチーム銀貨を娘の前へ投り出した。

ジャンヌは釣錢を出さうとした。

『心附けだ。』とベルケルスブルグが言つた。

少佐に聞えない聲で『どうも濟みません。』と言つて、ジャンヌは靜かに引下つた。

『大隊長殿。お痛みですか？』軍曹は同情的に訊ねた。

『いや、痛まん、少しも痛まん。腕はちつとも痛んだ事がない。少くとも痛んだ覺えがない。唯だ幾分麻痺を感じるばかりだ。少し出血した丈だよ。これをやれば マリエンバード で三度温泉へつかる位の效果はある。實際だぞ。』

斯う言つて彼は一口分の葡萄酒を自分の酒杯に注いだ。

『お前の健康を祝す。今度は何うか斯うか方がついたな。』

『はあッ。さうであります。』

『時に聯隊長は奈何だ。』

『今朝軍醫長殿のお話では、まだ安心とは行かないさうであります。』

『ふむ。未だ可かんか。』

『肺部に彈丸が留つて居るさうであります。』

『中隊長の報告はみんな來たかな。』

『詳細の報告は未だ參りません。一般報告だけ參つて居ります。』

『それで?』

ヲルフは村長と其姪が獨逸語を解しない事を知つて居たけれども聲をひそめて答へた。

『うむ!』フブルヲルケルングは聞き違へたかと思つて又た訊ねた。

ヲルフは繰返した。

『八割方の損害であります。第八中隊では六人の兵士とアドルフ大尉殿が生殘つたばかりであります。』

ベルケルスブルグは煩悶を感じた。

ヲルフが殊に第八中隊とアドルフの事を言つたのは、何か思はくがあるのであらうか。

自分を助けて呉れたのはアドルフである――自分が態と死地に差向けたアドルフである、と言ふ考へがベルケルスブルグを苦しめた。アドルフが助けて呉れなかつたら、彼は出血の爲めに落命したに相違ない。

彼は軍醫の言葉に依つて、つい昨日此事實を確めたばかりである。

『側に人が居て出血を止めて呉れたのは誠に天祐であります。さうでなかつたら貴方は到底助からなかつたのです。』と軍醫が言つた。さうして自分は此人間を――しかし今夫れを考へて何になる?

此事柄を考慮から追拂ふ爲めに、彼は分り切つた事を訊ねた。

『お前はアドルフ大尉とシュロッセル副官に此のカフエーへ來て呉れるやうに頼んだか。占領した以上は萬事を整理し度いと思ふのだ。』

『はあッ。』

『それからクロッ志願兵にも來いと言つたか?』

『はあ、クロッ志願兵にも言ひました。あれは此家に宿營して居ります。』

『宜しい。クロッは佛蘭西語を中々善くやるな。』

『はあ、グレノーブルで一年半稽古をしたさうであります。上手に話します。』

『うむ。彼の男が生殘つたのは好都合だ。佛蘭西語をやる者が居らんと始末に行かんよ。』

『はあ、さうであります。』と軍曹が合槌を打つた。彼は陰鬱な想念に充ちて、又た庭に見入つた。其處では雄鷄が羽搏きしながら聲高くコケコッコーと鳴いた。

軍曹の考へて居る事を讀み得たかの如く、ベルケルスブルグが訊ねた。

『ヲルフ、吾々の聯隊の他の部隊は何うなつた。俺は宿舍に引籠つて居たので詳しい事を知らんのだ。』

『どの部隊も同じであります。損害は平均八割に當ります。私も之れ以上の事は知りません。未だ詳細の報告を作る時間がないのであります。』

『しかし要するに吾軍の左翼は要塞を包圍する事に成功したのだな。』

『はあ、さうであります、』

『假令吾が聯隊が殆ど全滅の運命に陷つたにもせよ。』

ヲルフは酒杯を乾した。ベルケルスブルグは默つて思案に耽つた。彼は大出血の爲めに甚だしく疲勞を感じて居たが、强いて元氣を回復しやうと努めた。彼は今や聯隊の殘部を指揮して居た。さうして軍司令官は彼を鐵十字章に推薦した。それを考へると彼はせゝら笑を禁じることが能きな

かつた。

自分の蔑視して居る事柄、又た蔑視しなければならぬ事柄に誇りを感じることが能きる彼は、何と言ふ複雜な性格であらう！生れ付き哲學家的で常に事物の奥底を洞察する彼が野心の爲めに何處へ驅られたのであらうか？獨逸國内の幾百萬人は此等の出來事を如何に考へるか？地球の表面を急過する颶風のやうに諦めねばならぬ天災と考へるか、さもなければ獨逸國民に課せられた る神聖な使命と考へるかである。

けれども彼は、殆ど役に立たなくなつたと自ら感じるやうな饅を有ちながら、丁度人が澄んだ水を透して湖底の小石を視るやうに、此等の出來事の奥底まで洞察することが能きた。さうして其處に潛水夫の勞に酬ゐるだけの寶がないといふことを明かに看取し得た。しかし意志の力によつて彼は何處までも進まうとするのであつた。如何なる僻見若しくは如何なる輕浮な幻想を通つても最後まで路を辿らうとするのであつた。相變らず彼は世間から羨むべき人、幸福な人と思はれたかつた。しかし旨目な幾多の人々の中に在つて、彼は湖水の底にある美しい介殼の無價値を認める事が能きた。綺麗な水の底に不毛の泥土を認める事が能きた。超然たる態度を持しながら、同時に愚にもつかぬ事を考へて居る、それが彼の運命であつた。

それからメラニーは？メラニーは一度も彼のものにはならなかつた。今後も決して彼のものに

はならない。そのメラニーの爲めに彼は精神上新しい罪を犯した――友人の殺害といふ罪を犯した。彼を信じ、且つ彼を助ける爲めに一身の危險をも顧みない程の友人を彼は殺さうとした。

此時アドルフがシュロツセルと一緒に入つて來たので彼の冥想が破れた。

『やあ、ベルケルスブルグ。』と大尉が快活に言つた。

『やあ、アドルフ。』

『軍曹、樂にしとれ。』

『軍曹、椅子に掛け給へ。ベルケルスブルグ、今日は體の具合は何うか。』

『有難う。大變好いが、まだ少しく氣力がない。』

『うむ。それは直き癒るよ。』

『癒るだらうと思ふんだ。』

『大隊長殿、お體は如何です。』

『うむ、有難う、シュロツセル君。さあ掛けないか。』

アドルフは窓際の椅子に掛けた。

第三章　信用の能きぬ證人

『それから クロッ志願兵に來るやうに言つて呉れ。志願兵が來たら直ぐ始めやう。』とベルケルスブルグが軍曹に言つた。

『はあ、承知しました。』

ヲルフは出て行つた。

『室の中が鬱陶しいな。』アドルフが言つた。『諸君さへ構はなければ、窓を開けるぞ。』

『うむ、空氣が籠つて居る。百姓共は室に空氣を入れた事がない。是非開けて呉れ。しかし君の脊中へ風が當ると可かんな。』

『いや一向差支ない。僕は新しい空氣が大好きだ。』

アドルフは窓を開けて又た椅子に腰を下した。ジヤンヲが猫のやうにそつと卓子の側へ來た。

『旦那方は？』彼女はアドルフとシユロツセルに向つて低い聲で言つた。

『葡萄酒の赤を呉れ。』

『畏まりました。』

ジヤンヲがビユニヨンに酒を注いで貰つて居る間に、アドルフは心配相にベルケルスブルグに向つて言つた。

『君は軍曹の忠告を聽いて、休暇を貰う事にしたら可からう。家に歸つて居るのが君の爲めに一

番可い。』

淋しい笑みを浮べながらベルケルスブルグは答へた。

『家へ歸る？……しかし僕は君も知つとる通り最早家を有つて居らんよ。彼女がフアルケンスタインに行つとるから。』

彼はぼんやり前方を見詰めて淋しげに思案して居たが、突然アドルフの手を堅く握つて、感情を洩した。

『アドルフ。僕は決して忘れん。決して。』

『しかし君、あれは當然の事だ。』吃驚したアドルフが答へた。

『大勢の負傷者があるのに、態々戰線を離れて一人の負傷者を救ふのが當然の事か。』

『僕に取つてはさうだ。何故と言へば其負傷者は大隊の指揮官だからな。』

『アドルフ、それが唯一の理由か？』

アドルフの答が彼の息を詰らせるやうに見えた。

『唯一の理由だ。』

『うむ、それなら勿論……』

ベルケルスブルグは微笑した。彼はアドルフが如何に彼を想像したかを知つて居た。

此會話の間シュロツセルは室の壁に貼つた版畫を熱心に視て居た。それは佛國陸軍の制式を示す圖であつた。彼は靜かに口笛を鳴らした。

『武勇上越すものもなき
戰士を友に持てる吾れ。』

彼は何故此唄を鳴らしたか自分ながら善く解らなかつた。

ヲルフ軍曹がクロツを連れて戻つて居た。一座の談話が一寸杜切れたので、クロツ志願兵は進み出でゝ自分を報告した。

『第八中隊のクロツ志願兵であります。通譯の爲めに來ました。』

『志願兵、お前は佛蘭西語を善く話すか。』

『はあ、話します。』

『さうか。』

『諸君椅子に就て臭れ給へ。ヲルフ軍曹は記錄を書け。』

『はあッ。』

『クロツ志願兵、その酒賣臺の背後に居る男に此處へ出て來いと言へ。』

クロツが佛語に通譯すると、ビユニヨンは澁面造つて出て來た。

『其男の姓名を訊ねろ、それからロージーの村長をして居るか何うかを訊いて見ろ。』

クロツの問に對してビユニヨンは答へた。

『マリー・ジヨセフ・ピエル・ビユニヨンでがす。千八百五十三年六月十八日生。ロージーの村長をして居るでがす。』

『家內はあるか。』

『やもめ暮しでがす。』

ビユニヨンはヅボンの隱しに兩手を突込んでもぢ〳〵した。彼は此作法が對手の獨逸將校に不快を與へると思つたので、殊の外之を面白がつた。しかしベルケルスブルグは我慢をして此振舞を見逃がし、ビユニヨン村長の身上に關する訊問を續けた。子があるか何うか、子息か娘か、幾人あるか、子は未婚であるか、年令は幾つか、ロージーに住んで居るか何うか。

自分に戶籍謄本などを幾らも書いた事のあるビユニヨンは、クロツが通譯する訊問に對して、役所風の簡潔と精確とを以て答へた。

『子供は三人でがす。娘二人、子息一人、年齡は二十八と二十三と十六でがす。娘は他の村へ嫁き

ましたが悴は此村に居るでがす。』

『此店で客あしらひをする若い娘は誰だな。』

『ジヤンヌ・ロアジールと申す私の姪でがす。』

『このロージー村には司祭は居るか。』

『居るでがす。ジヤン・ボンヴキサージユと申しやす。』

『住居は何處だ。』

『會堂の直ぐ近所の役宅でがす。』

『ロージー村で一番金持の地主は誰か。』

『アリスチード・マルトーでがす。』

『その住居は此處から餘程離れて居るか。』

『この店の向側でがす。』

『宜しい。』

ビユニヨンは少佐の不必要な質問を蔑むやうに微笑した。

ベルケルスブルグは何處までも冷靜であつた。彼はビユニヨンの微笑を意に介せずに、ヲルフ軍曹に向つて言つた。

『村に掲示する嚴達の文言をクロッ志願兵に見せて、村長に佛譯して聞かせるやうに言へ。』

クロッ志願兵は佛語で讀上げた。

『ロージー村民に嚴達す。

武器を所有する事。

日沒後街路に徘徊する事。

窓の鎧戸を鎖す事。

普魯西國王陛下の軍隊に敵對する事。

右の行爲を嚴禁す。之に違反する者は死刑に處すべし。』

『村長、解つたか?』

『よく解りやした。』

『それから先刻命じて置いた事を其通り履行したか。』

クロッが此問を通譯すると村長が訊ねた。

『何の達しで御座りやす。』

『兵器に就ての達しだ。』

『武器は納屋に納つてありやす。』

『どの納屋だ。』

『村役場の納屋でがす。』

『兵器は一切納つてあるな。』

ベルケルスブルグは『一切』といふ語に殊に力を入れて訊ねた。

村長は嚴そかに答へた。

『はい。一切納つてありやす。』

『一切の兵器を取纒めて其納屋に入れて置くのだぞ。これはロージー村の村長たるお前の責任だ。責任を果さなければ死刑だぞ。』

『承知致しやした。』

『よろしい。クロツ志願兵、村長に言ひ聞かせろ。本職は必要上村長と司祭と夫れから——何とか言つたつけな。』

『アリスチード・マルトーであります。』

『さうか。そのアリスチード・マルトーの三名を人質として會堂に留置しなければならん。村民が

本職の命令に違背すると可かんから。此事を村長に言ひ聞かせろ。』

クロツ志願兵が通譯した。

『人質』と言ふ言葉を聞くとビユニヨンは一寸苦い笑みを浮べた。

『且那が人質を取る……』彼は始めたが口をつぐんで肩を搖ぶつた。

『うむ、本職は人質の必要を認めるのだ。』

『ヲルフ軍曹！消防小屋の衞兵のところから卒を二人借りて、司祭とアリスチード・マルトーを此處へ連れて來い。』

『はあッ、承知しました。』

ヲルフ軍曹とクロツ志願兵はカフエーを出て行つた。

『シユロツセル少尉、御苦勞だが今一度納屋の兵器を點檢して呉れんか。』

『はあ。』

『村長、お前は鍵を持つてるか。』

『何と言はつしやるですか。』

『クレフだ。グランジユのクレフだ。』

『はい、かしこまりやした。』

ビユニヨンはぐずつかく足を引ずつて酒賣臺の後に行き、其處の壁の釘に掛けてあつた鍵を持つて來た。

『それぢや一緒に來い。』

シユロツセルは戸口を指して斯う言つた。

ビユニヨンは侮蔑の顏付を以て少尉を眺め、默つて後から跟いて行つた。從弟のルイと同じやうにジヤンヌも何時の間にか姿を隱して了つた。

あとはベルケルスブルグとアドルフと二人きりになつた。

第四章　亂雲に包まるゝ霧

三十分以上經つてからヲルフ軍曹とクロツ志願兵が司祭とマルトーを伴つて歸つて來たが、彼等を待つて居る間ベルケルスブルグとアドルフは日常の話題に就て言葉を換すのみであつた。例の件を切り出すには好い折であつたのだが、ベルケルスブルグが感謝の意を仄めかさうとすると、アドルフがうまく話を逸して了つた。で、ベルケルスブルグはアドルフが彼の殺意を疑つた事を感じない譯には行かなかつた。二人の間には大きな隔てが出來て了つた。此隔てを取り去らうとして彼等は色々と談話を試みたけれども、それは何の役にも立たなかつた。他の人々が入つて來たので二人ともほつとした。

『第八中隊のヲルツ軍曹とクロフ志願兵が、ポンヴキサージユ司祭と農マルトーを連れて戻りました。』と軍曹が報告した。

彼の『ポンヴキサージユ』の發音はロージジーの村中で笑草になつて居たが、此處では別段の事

もなかつた。

『シュロッセル 副官とロージーの村長が歸つて來るまで待つとしやう。』と少佐が言つた、

『はあッ。』

ベルケルスブルグとアドルフは又た卓子の前に坐を構えた。他の者は其儘戸口に居た。

『お前達も腰を掛けて差支ない。』ベルケルスブルグが司祭と農夫に向つて言つた。

答がない。

『アッセイエー、ヴー。』

澁面つくつた農夫はカフエーの壁側のベンチに腰を下した。嫌惡の樣子があり〳〵と見える。

ベルケルスブルグは此機を捉えて兩人の面相を少しく綿密に吟味した。彼は人性の立派な批判者を以て自任する將校の眼を以て兩人を眺めた。

『此處では何うせ滿足な結果は得られまい。』と彼は斷定した。

農夫マルトーは唯片意地の强い男といふ印象を與へたに過ぎない。獨逸の少佐は此種の人間を直ぐ處分して了ふ。これが兵卒なら斯う言ふ場合には營倉がある。此男もロージー村の何處かの地下室へ投り込めば可い……しかし司祭の方は……白髮頭の頂を剃つた丈の高い痩せこけた司祭は未だ一言半句も發しなかつた。それでもベルケルスブルグは彼を充分に理解した。

說教に慣れた彼の唇からは、平和と寬容の美しい言葉が流れ出るに違ひない。しかし其聖徒のやうな眼には、ベルケルスブルグがアルサス・ローレーヌに於ける經驗に依つて學んだ或ものが輝いて居た。普魯西の東北部に生れたベルケルスブルグは此種の目付をよく見定める事が能きた。

それは加特利克一流の熱狂的排外主義の徵候であつた。加特利克の慷慨悲憤家の眼から見れば、此等の獨逸人は自分の國土に侵入して來たばかりでなく、聖敎の神聖を冒瀆するものであつた。

ボンヴキサージュ司祭に言はせると、彼等は敎旨上恕し難い强盜殺人犯であるばかりでなく、異端者であつた。僞敎信者であつた。神も斯くの如き輩の地獄に墮つる事を喜び給ふのである。信條の保護の爲めに盛んに異敎徒を火刑に處したフヰリップ二世の陰暗な精神が此の純樸な司祭の心の中に潛んで居た。

優しい微笑を浮べた薄い唇、氣高い形をした白髮の頭。司祭の風采は農夫とは非常な相違であつた。しかし此人物には餘程氣を付けなければならない。之を取扱ふのは噴火山の上に立つて居るやうなものである。その穩かな靑綠の下に火の海が波立つて居ないとも限らない。

漸くシュロッセルが村長と一緒に戻つて來た。

『少尉、萬事命令通りになつて居るか。』とベルケルスブルグ少佐が訊ねた。

『はあ、兵器は總て村役場の納屋に收納してあると村長が誓言しました。』

『それで若し此の陳述に僞りがあれば、彼は一命を失はなければならん、君は改めて村長に言つて聞かせたか。』

『はあ、言ひ聞かせました。』

『それからボンヴキサージュ司祭と農マルトーへも?』

『はあ。』

『君は納屋を檢分して、ロージーの兵器――使用に堪へる兵器が全部其處に收納してあると思つたか。』

『兵器は極く古いものであります。大部分は使用に堪えません。尤も數は全部と言つても可い位に澤山ありました。』

少尉の語氣はあやふやであつた。

ベルケルスブルグは自身に村長に向つて訊ねた。

『村役場の納屋に入れてあるのは、實際ロージー村の兵器の全部であるか。』

村長は一寸躊躇して答へなかつた。

『クロッ志願兵、通譯しろ。』

クロッは之を佛語に譯して聞かせた。

朗かなはつきりした聲で村長が答へた。

『ロージー村の武器の全部でがす。』

『よろしい。』

少佐が手まねで知らせると、司祭とマルトーは席を起つて、村長と一緒に卓子に近く來た。

クロッの通譯でベルケルスブルグは司祭に言渡した。

『本職はロージー村長ピエル・ピュニヨン、農アリスチード・マルトー及び足下を人質として教會堂に留置しなければならん……』

斯う言はれて司祭は知らず識らず不服らしい素振りを示した。彼は獨逸人の瀆神罪に想到して、深甚な侮蔑の表情を其顏に浮べた。しかしベルケルスブルグは構はずに續けた。

『……これはロージー村民の安全を確保し、且つ普魯西王陛下の軍隊を保護する爲めに必要な處置である。足下外二名は如何なる反抗的行爲に對しても命に掛けて責任を負つて貰ひ度い。それから足下は鼓手一名を連れ、兩名の人質と一緒に村中を廻つて、足下自ら輕舉暴動をせぬやうに村民を戒めて貰ひ度い。普魯西國王陛下の軍隊は國際公法に從つてロージー村を占領したのであるから、此軍隊に聊かたりとも反抗する場合は、罰として容赦なく三名の人質を死刑に處し、尙ほ必要と認むる時は、ロージー村を破壞する決心である。』

『村長、解つたな。』クロッが通譯を了るとベルケルスブルグは再び鋭い語氣を以て訊ねた。

『解りやした。』

『それでは ヲルフ軍曹、三名の者と同伴して衞兵屯所に行き、鼓手を呼出して村中を一巡りして吳れ。』

『はあッ。』

軍曹は起ち上つた。彼は三人の人質に列を作らせやうとしたが、司祭も村長もマルトーも中々言ふ事を聽きさうにもないので、軍隊式に『進め！』の號令だけ掛けて、三名の後から跟いて行つた。彼等は一言も口を利かずにカフエーを出た。

ベルケルスブルグは志願兵に向つて、

『クロッ、お前はもう引取つても可い。』

『はあッ。』

『お前は此處に宿營して居るんだな。』

『さうであります。』

『もう三十分室に居れ。又た用事があるかも知れんから。』

『はあッ。』

クロッは軍隊式に廻れ右をして出て行つた。

シユロツセルが起ち上つた。

『大隊長殿、もう私に御用はありませんか。』

『午後までは用がない。御苦勞だつた。』

『それでは午後に參ります。』

又たベルケルスブルグとアドルフと二人きりになつた。

『どうも彼奴等の樣子が氣に食はぬ。俺は少しく心配だよ。』とベルケルスブルグが始めた。

『どうして心配だ。君は容易に物事を心配しない性質ぢやないか。』

『さう見えるのだ。成程僕はさう見えるだらう。』

『表面だけだと言ふのか。』

少佐はアドルフを熱心に見詰めながら、一々言葉に力を入れて訊ねた。

『すると君は、人は見掛け通りだと實際に思つて居るのか。』

アドルフは驚いて例の卒直な筆法で答へた。

『ベルケルスブルグ、僕は君に就てはさう思つて居る。』

『いや、いや。實際はさうぢやなからう。君は僕に就てさう思つた事はない筈だ。』

さうして**アドルフ**が言明を繰返さうとすると、**ベルケルスブルグ**は呵々と笑ひ出した。

『おい**アドルフ**、僕を見掛けの通りの人物と實際に思ふ人があつたら、僕はそれを侮辱と考へるよ。僕は斯う言ふ風を裝ふべく餘儀なくされてるのだ。若し僕がそんな人間であつたら、此戰爭の出來事によつて僕は別の教訓を學んだに違ひない、さうして、とつくに別人になつてるよ。』

『君の言ふ事は解らない。』

『解らなければ解らないで可い。いや解らない方が可い。不幸にして僕は君に解るやうに說明することが能きないが、僕は戰地へ來ても家に居て觀たと同じやうに物事を觀て居る。おい**アドルフ**。吾々は芝居を演じて居るのだ。此の芝居は世界史上の最大悲劇となるかも知れん。しかし――』

『しかし何だ？』

『哲學者ぶつた事を說かんでも可からう。皆な君の事を彈丸の透らない男と呼んで居るが、君と僕が此悲劇の大詰まで生きて居られるか何うか怪しいものだ。「生は錯誤のみ、死は知なり」か。』

『**ベルケルスブルグ**、すると君の說は**シルレル**だな？』

『正に然り……今日偶然に此新聞の一頁を讀んだのだ。』

ベルケルスブルグは隱しから伯林新聞の一頁を引出した……『そら……』

『それが何うしたんだ。』

『此芝居は人の眼に涙を浮ばせると同時に人をくすぐつて笑はせる。何うだ、皆なよく嘘をつくぢやないか。吾々は――戰地で死ぬまで血を流す吾々は、此芝居に就て少しも知る所がない。**アドルフ**、君は記憶しとるか？』

『何を。』

『故國に居た時分、倶樂部や食堂や喫煙室で話した事をさ。三四年前に一同で夜が更けるまで話した事があつた。その時吾々は今度の戰爭の到底避くべからざる事を論じ合つた、さうして一同戰爭を望んで居たつけな。あの事を君は覺えてるか。吾々は佛蘭西や露西亞に合葬墓地が出來るなぞと戲談を言ひ合つた。自分等の血ではなく、膀胱に入れた豚の血を撒き散らす道化芝居でもあるあるやうに、戲談を言ひ合つたものだ。君は覺えてるかな。あの時は戰爭の目的が**モロツコ**であらうと**スクタリ**であらうと何うでも可かつた。吾々は一同さう言ふ態度であつた。然るに今日は――』

『うむ、それで今日は？』

『今日獨逸の人間は其樣な事をすつかり忘れて了つた。何と言つたら可いかな。まあ此新聞を讀んで見ろ。さうすれば僕が說明するまでもない。眞相を知るものは吾々ばかりだ。さうだ吾々ばかりだ。吾々には解つて居る……おい**アドルフ**、誇大妄想狂だよ、誇大妄想狂だ。**ペリオン**山の上

に オツサ山を積み重ねやうとするのだ。』

アドルフは茫然としてベルケルスブルグを眺めた。彼は曾て此様な話をした事がなかつた。然るに今此様な話をするのは何故であらう。アドルフは新聞紙を取つて、ベルケルスブルグが青鉛筆で印を附けて置いた記事を讀み始めた。その標題は『協商國の表裏反覆、吾人の敵は虛言を連發す。』としてあつた。

ベルケルスブルグはアドルフの肩越しにそれを眺めて腹の底から笑つた。

『どうしたんだ。ベルケルスブルグ。』

『何でもない、何でもない……「嗚呼、玩具の馬は忘れ去られたり！」斯うハムレットが言つた。さうして此眞理の使徒は「信義を知らぬ英國」から吾々に來たのだ……天使も之れほどまでに潔白ではあるまいよ……はゝゝは……』

鼓手の打鳴らす太鼓の音が往來から響いて來てベルケルスブルグの長文句を遮つた。人質が村中を引張り廻されて居た。司祭はお說教のやうな聲で、不穩な擧動をしないやうに、輕擧して人質の命を危くしないやうに、頻りと村民に哀願して居た。その聲を彼等は聞くことが能きた。しかし村民は獨逸軍に復讐することが能きさへすれば、人質が何うならうと構ひはしまい。わあ〳〵と言ふ騷ぎの中に男の罵る聲や、女の金切り聲や、老人のぶつ〴〵呟く聲が際立つて聞えた。まる

で今日が四旬齋の中日でゞもあるやうに、人質の行列がロージー村の爲めに催された假裝行列でゞもあるやうに、村民は騷ぎ廻つて居た。

村役場の前を通つて彼等は村の本街道に入つた。行列は又た止つた。すると又た司祭が猫撫聲で村民に何か言ひ聞かせた。この樣な荒海を瓶一杯の油で靜めることが何うして能きやう、とベルケルスブルグは憐愍の表情を以てアドルフを眺めながら考へた。

第五章　大動亂

此時ロージーの運命を定める出來事が起つた。蔦の紅葉に半ば隠された窓のところで一挺の銃身が光つた。その後にルイ・ビュニヨンの蒼ざめた凄い顔が見えた。しかしアドルフとベルケルスブルグは窓に背中を向けて居たから何事も知らなかつた。突然、一發の銃聲が室の中に響いて彼等の耳を聾した。それを合圖に村の家々から一齊射撃が起つた。村役場の納屋に納つてあつたのは役に立たない古い兵器ばかりで、使へるものは激怒した村民の手にあつた。

ベルケルスブルグは眩暈を感じて、冷い汗が其顔を流れた。彼は闇黒の底へ落ちつゝあるやうに感じた。何故ならば負傷部の出血によつて生じた衰弱が未だ充分に回復して居なかつたからである。彼はよろ〳〵と卓子に攫まつて氣を取直した。彼の頭腦がはつきりとなつた。怖ろしい實感が彼の心意を捉えた。彼は再び視る事が能きた。彼は視た。

彼の足許に、血に塗れて、默つて身動きもせずに、何か言はうとしたやうに口を少しく開いて、

しかし永久に口が利けなくなつて、アドルフ大尉が横はつて居た。

ロージー村長の忰は彼の家と村に侵入した敵を唯だ一發で撃ち止めたのであつた。戸外には小銃の音が引續き起つた。それに交つて狂へる村民の凱歌と呪詛の叫びが聞えた。ロージーの街々では衝突が益々激しくなつて行つた。

ベルケルスブルグは突如床に跪いた。

『アドルフ・アドルフ、』彼は唇を顫はせて歎願するやうに言つた。『一言口を利いて呉れ、アドルフ、そんなに甚くやられたのか。』

しかしアドルフのどんよりした眼の中に、ベルケルスブルグは冷い死の外何物をも視なかつた。彼の親友は逝つて了つた、一瞬間に逝つて了つた。彼が卑怯な賤劣な方法で殺害しやうと試みた友人は彼の謝意をも受けずに、彼に贖罪の機會をも與へずに逝つて了つた。

ベルケルスブルグは激怒を以て顫えた。

『復讐だ！復讐だ！復讐だ！』彼は野獣のやうに唸つた……

カフエーの内には死の沈默があつたが、外では騒ぎが益々大きくなつた。村民の一齊射撃に對して終に歩兵が應戰を始めた。ベルケルスブルグは無駄とは知りながらも、狂亂の餘り友の死骸を搖ぶつた。

『起きろ！アドルフ、起きろ！一言口を利いて呉れ、一言で可い。お前はそんなに甚くやられたのか。』

『どうしたら可いかな。』彼は思はず叫んだ。

『どうしたら可いかな。』と彼の荒れ狂ふ心が答へた。

『復讐だ！復讐だ！復讐だ！』

カフエーの戸を押し開けてシユロツセル少尉の蒼ざめた顔が現はれた。

『シユロツセル少尉か？』

『此處へも彈丸が來ませんでしたか。』

『此通りだ、來たよ。』

顫える手でベルケルスブルグはアドルフの死骸を指さした。

『もう駄目ですか？』

『駄目だ。』

『えいッ！何とかなりませんか。』

『何うしやうもない、窓から來て脊中を貫通したのだ。えいッ！村の畜生ども！』

ベルケルスブルグは拳を握りしめた。

『少佐殿、軍醫を呼んで……何うでせう？』

『君が見ても解るだらう。心臟と肺を射貫いて脊中へ出たのだ。手のつけやうがない。雷に撃たれたやうに、大木の倒れるやうに倒れたんだ。えいッ！畜生ども！』

『野郎は捕まりましたか。』

『いや未だゞ、しかし何うしても捕まえる！』

街々の喧騒は益々甚しくなつた。射撃の音に混つて女子供の悲鳴が聞えた。激怒に驅られた兵士が彼等の髪を引攫んで泥溝の中を引ずつて居たのだ。すると急にけたたましい苦悶の叫聲が起つた。それは一兵士の銃劍に田樂刺となつた女の叫聲であつた。

『奴等は窓から熱湯を掛けて居ます、燃えた石蠟を注いで居ます。』

シユロツセルは口に泡を出して言つた。

『下手人を見付け出さなけりやならん！どうしても捜させなけりやならん！』怒りに我を忘れてベルケルスブルグが怒號した。『下手人を生きたまゝ此處へ引張つて來なけりや可かん。宜しいか。』

『はあッ。』

街上では一齊射撃が續いて起つた。歩兵は終に一團に合することが能きたやうであつた。さうして軍曹達が指揮して居るやうであつた。何故なら戸外から『覘へ！撃て！覘へ！撃て！』の號

令が聞えた。續いて小銃の音、怒罵の聲、耳を貫く號叫、侮蔑の嘲笑、木靴の舗道に躓く音。さうして又た『覘へ！撃て！』

『人質どもを閉ぢ込めて逃がさんやうにしろ、お前の責任だぞ。』ベルケルスブルグが雷の如くに命じた。

『はあッ。』

シュロッセルは命令を執行する爲めに出て行つた。友の死骸の前に茫然として突立つたベルケルスブルグを後に殘して。

『アドルフ、アドルフ、アドルフ。』

彼は窒息しつゝあるやうに見えた。今まで出なかつた涙が彼の兩眼に湧いて、彼は最早室の中の物體を視分ける事が能きなかつた。少時の間彼は痲痺の狀態に陷つた。彼は噴火口の緣に立つて、どちらへも體を動かすことが能きずに周圍一面に漲る烈火の潮を眺めて居るやうに感じた。

アドルフ、敵兵の猛射を受けながら九死に一生を得たアドルフは背後から暗殺された。さうだ、これは暗殺だ――卑怯な賤劣な殺人犯だ。極刑の必要がある殺人犯だ。誓言を破つたのだ。食言だ。一切の兵器を……

再び怖ろしい笑みがベルケルスブルグの面相を歪めた。虚僞の誓ひを立てる、名譽の誓約を破棄

する、條約を反古同樣に無視する、これは今度の戰爭に於て寧ろ常例になつて居るではないか？何人を咎むる譯にも行かぬ。ロージーの村民に罪はない。獨逸兵に尙更罪はない。武力が正邪を決するのだ。法律も道德も正義も必要の爲めに無視せられて居るのだ。渾沌が渾沌と戰ひつゝあるのだ。アドルフの爲めに復讐せよ、友の爲めの復讐せよ、左右を顧みずして復讐せよ。これが刻下の彼の任務であつた。彼の唯一の使命であつた。それは彼の最後の使命であるかも知れない。彼は少し前に無意識にはづした劍を再び帶び、ピストルを取出して其雞頭を上げた。

『おゝ、ベルケルスブルグよ、復讐の仕事に掛れ。』

此言葉を彼の耳に囁いたのは神であるか、惡魔であるか、それとも彼自身の激昂した心意であるか。彼は知らなかつた。

『進め、ベルケルスブルグ！進んで死者の仇を打て！』

彼は惡魔に取付かれた人のやうに往來へ走り出た。部下の步兵の一齊射撃の響が彼の耳に入つた。

『進め！ベルケルスブルグ、進め！』

村中には死體が累々として横はつて居た。彼は殆ど此等の死體に氣が付かなかつた。味方の彈丸が身邊に飛來するのをも意とせずに、彼は拔刀とピストルを左右に持ち、百姓と兵士の死骸を

見境なく乘越えて走つて行つた。

一人の女が澄んだ液體を入れた甕を携えて近寄つて來た。硫酸であらうか？彼はピストルを擧げて發射した。其女は直ちに倒れた。甕からこぼれた液體が彼女の血に混つて流れた。彼は女の死體を跨いで進んだ。どの家の窓からも銃身が光つた。

『ヲルフ！』ベルケルスブルグが叫んだ。『ヲルフ　軍曹！』

獅子の吼聲の如くに『ヲルフ！』の一語がロージーの街々に鳴り渡つた。宛ら一匹の猛獸が他の一匹を食ひ殺さうとして追ひかけて行くやうだ。

不思議に彼は彈丸の雨下する家々の窓を無難に通り越した。味方の一齊射擊を免れた。村の男女の振り廻す連枷や棍棒をくぐり拔けた。

『ヲルフ、ヲルフ、ヲルフ！』

漸く遠方から軍曹の聲が答へた。

『大隊長！』

ベルケルスブルグは聲の方へ走つた。彼は軍曹を塀の背後に見出した。軍曹は塀の煉瓦を一枚取り除けて臨時の銃眼を拵え、その孔から農民に彈丸を浴せかけて居た。彼の射擊は百發百中であつた。ベルケルスブルグは喘ぎながら彼に近づいた。

『ヲルフ、放火擲彈はあるか。』

『はあッ。あります。』

『三十人の兵士を率ひて、此の村の人家に片端から火を附けろ。一軒殘らず破壞しなければ承知せんぞ。』

『はあッ。』

眼を輝かせて躍り上つた軍曹は、遮蔽を利用する事も忘れて、耳の周圍に霰の如く鳴る彈丸を物ともせずに、急いで出掛けた。

軍曹は大分遠くへ行つた。其時突然ベルケルスブルグの口から奇妙な不明瞭な音響が洩れた。それは怖ろしい劇痛が焰のやうに彼の脊中を突いた刹那であつた。彼も亦た背後からやられた。殘つて居た體力を以て彼はピストルを發つた。糞掻きで彼を突刺した百姓は血に塗れて倒れた。之は彼が正氣を失はない内に目擊した最後の光景であつた。百姓の糞掻きがベルケルスブルグの背中に重い創を拵えた。さうして其鋼の尖頭が一本彼の脊髓に埋つた。彼は麻痺して、しかし幸に知覺を失つて、其處に幾時間も横はつた。

第六章　悲慘なる行列

激怒した農民と第二大隊の殘兵は三時間以上もロージーの街々で戰鬪を續けた。獨逸側は第三大隊を最寄りの村から呼び寄せて後始めて農民を鎭壓する事が能きた。

連枷だの棍棒だの糞掻だの轅桿だのを振廻して、彼等は兵士を薙ぎ倒し、味方の鳥銃や騎兵短銃の射擊に有効な應援を與へた。此等の兵器は村役場の納屋には入れないで農民が他へ隱して置いたのである。

ベルケルスブルグの姿が見えなくなつてからシュロッセルが指揮をした。未來の詩人兼史學者を以て任ずるシュロッセルは心ならずも自分を認めなければならない場合となつた。僅々數時間の裡に彼も亦た狂激せる野獸となつて了つた。激情の儘に動く一個の動物となつて了つた。彼は他の總ての人々と同樣に、なまぐさい血とぎら〳〵する焰の外、何物を視ることも聽くことも嗅ぐことも能きなかつた。

ぎら〳〵と光る焰！焰の塊りが出來秋の收穫を了へたばかりのロージーの小舍や納屋の中へ雷電の如くに落ちた。到る處に放火擲彈が落下して、火焰が暮れ行く空に立ち昇つた。すると、突如小さな尖塔からロージーの鐘が鳴り出した。

司祭の侍僧が先刻から高い祭壇の背後の、聖母マリヤの畫像の下に隱れて居た。鐘の綱を引いて居たのは此の男であつた。悲しい音調が遠く河を渡つて、木靈が山々の峽から訴へるが如くに靜かな天空に響いた。

教會の狹い境内にシュロッセルが居た。詩人を以て自ら任じた彼は、眼前の怖ろしい畫の壯美を充分に感得した。

ロージーに對する復讐！イリオンの墮落が人口僅かに數百の此小村で繰返された。十六才の少年がカフエーの窓から一大尉を狙擊して總攻擊の合圖を與へたばかりに。

しかし――彼の森の中の空地で始めて胸中を打開けた時に、ベルケルスブルグが何とか言つた。死を覺悟しながら『ドン・カルロス』を論じた時に彼は何とか言つた。

ロージーに對する復讐！『イリアッド』の詩句がシュロッセルの心に浮んだ。ネロも羅馬の炎上を眼下に眺めながらパラチンの丘で之を朗吟したであらう。

幾多の炎塊が母屋からも納屋からも吹出した。梁が壞れてがたん〳〵と落ちた。轟々といふ凄

じい物音が自己の意志に反して破壊の鬼となつたシュロッセルの周圍に起つた。壞滅の嵐に耳を傾けながら彼は寺院の小さな庭に立つて居た。其處には色々の秋の草花が安らかに眠る人々の墓を飾つてゐた。此等の人々が神の慈悲の表象たる十字架の下に寺院の境内に葬られたのは、此村――明日はなくなつて了ふ此村が――曾て彼等の故郷であつたからだ。今シュロッセルは彼等の葬られた聖地に立つて居た。彼等は人生の長い不幸な行脚を了へて安身所に眠を向けたのである。彼等の中に貧困を免れたものがあつたとすれば、それは勞働と勤勉とに依つてゞある。

シュロッセルは足許の一つの墓石に誌してあつた佛蘭西語を無意識に讀んで、乾からびる眼でロージーの收穫の燃える焰を凝視た。勤勉な平和な村人が額に汗して懸命に苅入れた僅かの貯へが燒き盡されるところであつた。

ロージーに對する復讐！避難民の行列がシュロッセルの眼の前をよろめいて通つた。子供や娘や女房や老人が家庭のみじめな紀念をしつかりと持つてひよろついて行つた。彼處には顫える腕に小禽の籠を抱えた六つ位の女の兒が居る。此處には家から助け出した子猫を胸に抱きしめたちいぽけな男の兒が居る。八十の阪を越した盲人が杖で歩道を探つて行く。松葉杖をついた二十前後の跛男が今にも轉びさうな恰好をして血の沼を一生懸命に渉つて行く。彼等は皆宿なしである。怖ろしい一夜を靑天井の下の畑の中で明かすのだ。滅茶々々に破壞されて燃えて居る村の街道を、

彼等は轟々たる死骸を越えて進んで行く。この悲慘な行列がいつまでも續くやうに思はれた。人數は數百人に過ぎないのだが、いつまでも續くやうに思はれた。

日はすつかり暮れて居た。しかし兵士の炬火と人家の燃え上る火焰とが白晝のやうに此光景を照した。寺院の庭に立つて居たシュロッセルの眼は一物をも逸しなかつた。苦惱の行列が彼の眼前を通り過ぎた。赤子を抱えた母、手をつないだり裳を摑み合つたりして恐怖した雛鷄のやうに一塊りになつた子供達、しなびた腕に孫を抱いて涙ながらに接吻を與へて居る老人、後生大事に蒲團を引ずつて虫の匐ふやうに歩いて行く病人、臨月の腹を抱えた女――シュロッセルは數へた、二ゥ三ィ四ゥ五ッ……彼はもう數へまいと思つた、それでも數へない譯には行かなかつた。此等の女は不幸な子を何處で生み落すであらうか？恐らく今夜にも、追ひ廻された野兎のやうに、何處かの野原の轍の中へ。それも生れる子は心痛と恐怖の爲めに殆んど死んで……嗚呼、悲慘だ！……曾て一人の婦が全人類の救主を生んだ時とは違つて、今やベツレヘムの外には彼等の子を生み落すべき馬槽すらもない。

行列はいつまでも夜の闇の中へと動いて行つた。シュロッセルは昔ピザで、ヴエニスで、羅馬で見た所の畫を心に思ひ浮べた。其等の畫も今彼の眼前に展開したパノラマに比べれば何でもなかつた。此光景の前にはダンテもホーメルも唖者であつたらう。チチアンも其畫筆を投じたであらう。

ロージーに對する復讐、それは彼自身の手に依つて放たれたのである。**シユロツセル**は天火を竊んだ**プロミーチアス**のやうに握拳を高く擧げて、此凶事を起させた當路者を呪つた。**ゲーテ**の所謂『睡眠者』を呪つた。

鐘の音がはたと止んだ。教會堂の尖塔に見えた血赤の光、それは附近の納屋の燃えるのが反射したのであらうか？

侍僧は頭上の蝕んだ梁から氣味のわるい爆聲を聞いた。彼は白と緋の法衣を着たまゝ鐘を抱えて逃げ出した。風が段々と強くなつた。寺庭の向ふから飛んで來る火の粉が**シユロツセル**の周圍に落ちた。しかし彼はそれを氣にも留めないで宛も呪文に縛られたやうに突立つて居た。塔の十字架の下に巣を造つて居た鳩が驚いて飛び立つた。彼等は塔上からあほりつける焰に逐はれて庭の周圍を飛び廻つたが、その胸に宿る抑えがたき母愛に驅られて、雛の啼きさわぐ巣に戻つた。軈て彼等は焰に焦げた翼をぱた〳〵させて**シユロツセル**の足許に落ちて來た。さうして悶え苦しみながら訴へるやうな眼で彼を眺めた。

ロージーに對する復讐は罪なき動物にまで及んだ！ 彼は急に思ひ付いた。しかし、もう遲かつた……

『厩を開放しろ、牛馬を解放しろ、豚も羊も逃がせ！』**シユロツセル**は走つて通り過ぎる兵士の一人に向つて絶望的に叫んだ。

其兵士の耳には入らなかつた。彼は最終の放火擲彈を抱えて、宛も復讐の神に驅られるやうに最終の標的を搜し廻つて居た。

シユロツセルは何うする事も能きなかつた。彼が呼び出した復讐の神は何處までも其仕事を遂行しやうとして荒れ廻つた。女も子供も、老人も赤子も、病人も、片端者も、腹の子も、家畜も鳩も、悉く此の怖るべき全燔祭の御供であつた。さうして其只中に發頭人たる自稱詩人が居た。彼は上官――(不可解の謎であるところの人物)――から受けた命令に盲從して此樣な騒ぎを仕出來したのであつた。

ロージーに對して復讐を――斯くの如き復讐を――加へたのは實に彼であつた。空は一面に血の色であつた。その中に混じる鮮黃色の條文は積重ねた藁や納屋に入れた穀類が燒却されて居ることを語つた。まるで**ソドム**と**ゴモラ**のやうだと**シユロツセル**が思つた。しかし此等の町が彼樣な運命に陷つたのは神罰として當然であるが、**ロージー**に在つては果して當然であらうか。

火焰と黑煙が靜かな星を隱して、地平線は一帶に紅褐色の棺衣のやうに見えた。**ロージー**の村は一つの火であつた。**シユロツセル**は兩手でひり〳〵する眼を蔽ふた。彼の眼は涙に濡れて居た。自分の命令によつて積重ねられた死骸の山に立つて、彼は**ロージー**の爲めに――又た彼自身の爲

めに泣いた。

『我まことに爾曹に告ん、爾曹のうち一人我を賣すなり。』

詩人にならうとする者が此様な事を仕出來したのだ！

落雷のやうな音がして、教會堂の塔が シュロッセルの眼の前で崩壞した。聖母 マリヤの畫像が灰に埋れて横はつた。

行列が段々疎らになつた。遂には落伍者が――ロージーの追放人の殿りが――ぽつ〳〵とやつて來るばかりであつた。愈々終了した。アドルフの火葬の積薪が燃え盡し、地平線上の火氣が仄暗くなつた。シュロッセルはすつかり氣を落した。彼は身を伏して獻歡いた。

第七章　哀愁の人

ひつそりとしてまだ燻つて居る ロージーの燒跡に鈍い太鼓の音が響いた。

村長の息子の ルイは見付け出されて、司祭のボンヴヰサージュと一緒に逮捕せられ、軍法會議に依つて銃殺の刑を言ひ渡された。他の二個の人質――村長とマルトーは往來で奮戰中に倒れたのであつた。彼等の死骸は未だ埋葬せられずに横はつてゐた。

誰も廢墟に近寄らうと敢てするものがなかつた。射擊班が鼓手を先に立て、第六中隊の軍曹に率ひられて、旭日の光りを受けながら位置に就いたが、あたりには一人の見物人もなかつた。

ルイとボンヴヰサージュは後手に縛られてじつとして居た。彼等の血色は怖ろしく蒼白であつた。しかし頑固な宗旨狂的な彼等の顏には、何處かに軒昂たる意氣が表はれて居た。殉教者の得意さが表はれて居た。

『ベルケルスブルグが之を見たら』とシュロッセルが思つた。規則によると、少佐は軍法會議の審判

者として銃刑の執行に立會はなければならぬ。彼はトロワイヨンの森で何と言つたか？　あの時に彼が表白した突飛な意見は何うであつたか？彼は死を決して義の爲めに戰ふ勇士を『別働隊』などと呼ぶのは可くないと言つた。

『分隊止れ！』

射撃班は寺院の庭に着いて、墓の傍に止つた。此等の墓には幸福な村人の靈が安らかに眠つて居るのだ。

ハインリッヒ　軍曹は部下を整列させた。彼は二十六歳の青年で、つい近頃召集されたばかりだ。その頃獨逸陸軍の卒伍の間には大戰爭の勃發を夢想するものさへなかつた。彼は入隊後間もなく**テレサ**と言ふ女と結婚した。**テレサ**は中隊長の家で小間使をして居たから、中隊の書記であつた軍曹が彼女と知るやうになつたのだ。

ハインリッヒは穩和な人物で戰場の荒つぽい仕事には適しなかつた。彼はウエーゼル沿岸の小さな町の吏員の悴で、十四の時から商家へ年期奉公に入つて居た。氣の利いた青年ではあるが、近頃の事だから收入の好い職業を見付ける事が困難である。そこで彼は中隊長の勸告に從ひ、文官資格を造る爲めに軍隊に殘る事となつた。彼は戰爭が起らうとは夢にも知らなかつたので、結婚する考へを起した。さうして四月に許可を得て**テレサ**と兵營内に所帶を持つた。

それが今！中隊の事務室で毎日机の仕事をして居た彼は鐵砲の打方すら殆ど忘れて了つた。それが今銃殺の刑を執行する任務を命ぜられた。餘り溫順しいので兵士から馬鹿にされて居た第六中隊の**ハインリッヒ**軍曹が刑の執行者になるなどは、戰爭に依つて始めて生ずる運命の反語だ。

部下に號令を掛けながら、彼の心は**テレサ**の側に行つて居た。彼が戰地へ來る時、彼女はクリスマスには世の中で一番結構な贈物を贈ると約束した。けれどもクリスマス迄に奈樣な出來事が起るか分つたものではない。今手を縛られて寺院の庭に立つて居る少年と老人は、二週間前に、否な二日前に、今日の事を夢想し得たであらうか？

それから彼は？

兵士は位置に就いた。**シュロッセル**は隱しから書類を取出して軍法會議の判決文を讀み上げた。『普魯西國王陛下の名に於て、軍法の規定に準據し……』兵士等は何十遍も同じ文言を聞いて慣れて居るから、此死刑の宣告を當然の事に思つた。他には誰も見物人が居なかつた。

佛蘭西の眞中の**ロージー**村の燒跡で此少尉に依つて裁判を行はしめた普魯西國王陛下の名に於て！

ハインリッヒ軍曹は眼を閉ぢた。柳の葉蔭から射す太陽の光りが彼の眼を眩すやうに思はれた。柳はまだ青々と繁つて居た。しかしクリスマスまでには柳が彼が彼の中隊が何うなるであらう？

テレサが何うなるであらう？柳の葉の落ち盡す頃には、誰が命を落さないとも限るまい。

宣告文の朗讀が了つた。**シュロッセル**は死罪者の目を覆ふ事を命ずるやうに軍曹に合圖した。

ハインリッヒは學校時代に町の屠牛場の前を通つた事を想起して怖ろしい氣がした。其頃彼は牛が眼を縛られて血腥い場所に入つて行くのをよく見た事があつた。

二人の兵士が囚人に近く寄つた。彼等は後手に縛られ足に砲丸を括り付けられて身動きすら能きなかつた。少年は頭を振つた。『要らないだ、要らないだ、眼隱しなんかしないで呉れろよ、俺らあ要らないだ。』老司祭は『神よ彼等の罪を宥し給へ、自らの行ひを知らざる彼等なれば。』と祈禱するやうに蒼空を見上げた。その萎びた唇からも矢はり確乎とした調子で同じ言葉が洩れた。

『要らない、要らない。目隱しをしないで呉れ。』二人の兵士は何れとも決し兼ねて、吩咐を待つやうに先づ軍曹を、それから**シュロッセル**を眺めた。**ボンヴキサージュ**は確かに祈禱を續けて居るやうであつた。尤もいつも教會の聖母の畫像の前で祈つた時のやうに手を拱くことは能きなかつた。

シュロッセルは顏をそむけた。彼は**ベルケルスブルグ**の說を忘れる譯に行かなかつた。彼は**ナポレヲン**に依つて銃刑を命ぜられた**アンドレアス・ホーフェル**の事を考へた。『**マンチュア**に囚はれの身となりて……』……それから又た『爾は言ふ、予れは王者なりと。』の句を想起した。彼は最早從容として死を待つ二人の顏を見るに忍びなかつた。彼等は**ピラト**の法廷に立つた耶蘇のやうに、

自分の血を流して身の明りを立てやうとして居るのだ。

『爾は言ふ、予れは王者なりと。』

軍旗に對して宣誓した彼は、一言の問を發することも能きぬ、何等の詮議を行ふことも能きぬ。唯だ自己の職務を行はなければならない。未來の詩人**シュロッセル**は勇氣を鼓して命じた。

『軍曹、彼等の意に任せるが可い。射擊の號令を掛けろ。』

『はあッ。』

太鼓の音が顫えるやうな空氣に轟いた。

ハインリッヒ軍曹は漸く氣を取直した。

『氣を付け、銃を肩へ、覘へ！擊て！』

一齊射擊が起つた。

『覘へ！擊て！』

又た一齊射擊。

『覘へ！擊て！』

又た一齊射擊。

『やめ！休め！』

『ポットヘル……グラウ。』

列から進み出た二人の兵士は地面に置いてあつたたヅツクの裂れを取り上げて、血の流れ出る二個の暖かい死骸に覆ひかぶせた。

『シエーネマンとボエリンダルが墓を掘るのだ。』

此二人は直ちに仕事に取掛つた。

『分隊進め！』

分隊は鼓手を先登として、來た時のやうにロージーの燒跡を通つて歸つて行つた。燒跡からはまだ燒供物の燻るやうな煙が天に立昇つて居た。

シユロツセルは思ひに沈んで跟いて行つた。

第八章　何の役に立つ？

幾時間か後に、ロージーの燒跡を漁つて歩く賊の一團がベルケルスブルグを見付けた。彼は農夫の糞掻に脊腿を突刺されたまゝ糞山の傍に横はつて居たのだ。賊は彼の時計と所持金を奪ひ、指輪（それは幸に極く緩るかつた）を拔取つて去つて了つた。

主人を失つた犬の飢ゑを訴へる聲が終に偵察隊を少佐の倒れて居る場所に導いた。兵士等は恐怖の眼を以て死骸と思つた少佐の體を見詰めた。偵察隊を指揮して居た軍曹は一通り應急手當を施してから耳を少佐の胸に當てた。彼は判斷を誤らなかつた。殆ど聽取れない程ではあるがまだ息があつて、心臟の鼓動が極めて微に聞えた。

軍曹の注意で二人の卒が少佐を抱き起した。彼を傷けた糞掻がその折れた尖端を體内に殘してどしんと地面に落ちた。ベルケルスブルグは擔架卒の手で最も近い野戰病院に擔ぎ込まれたが、何事も知らなかつた。綿密に診察してから院長は頭を振つて言つた。

『絶對に望みがない。傷が脊髓に達して居る。しかし ルート看護婦、手術を行て見やうかな。』

ルート 看護婦は答へなかつた。病院には繃帶や手術を施さねばならぬ士卒が幾百人も待つて居た。トロワイヨン 要塞戰が再び始まつたので、負傷者を運搬する荷車や自動車の行列が果てしなく續くやうに思はれた。

『兎に角やつて見ようか。』と院長が繰返した。

『先生のお考へでどちらでも。』

ベルケルスブルグは近所の百姓家から持つて來た臺所用卓子の上に顏を下に向けて横はつて居た。病院では此の卓子を手術の爲めに使つて居るのだ。

『ですが先生、もう寢臺が一つもあいて居ません。外の原には負傷兵が幾列にも並んで寢て居ります。』

ルート 看護婦は自分の言葉の間違ひない事を院長に分らせる爲めに窓を開けて見せた。重傷者の吐息や呻聲が俄かに室内に聞えて來た。しかし院長も看護婦も之に慣れて居た。如何に怖ろしい光景も今では彼等の神經を惱ます事が能きなかつた。

『殺して呉れ。早く殺して呉れ。』と哀願する聲が聞えた。叫ぶことの能きるものは回復の見込の充分な連中である。危險な傷を受けたものは少しも聲を出さなかつた。彼等は周圍の事物を全く

意識せずに死骸のやうに横はつた。

院長は助手をして運搬車の方に掛らせるやうに命じた。

『あの方は既う戸外へ參られました。』

『それなら宜しい。此患者には能きるだけ手を盡して見ようと思ふ。』

『先生のお考へ通りに。ですけれど寢臺の明いたのが御座いません。』

『十八番が明くだらう。あの患者は死にかゝつて居る。』

『でも未だ死んでは居りません。』

『俺の吩咐ける通りにしなさい。此方の手術の了る迄には彼は死ぬよ。』

『かしこまりました。』

『面覆とコロロホルムをよこして呉れ。』

看護婦は院長が器械と材料を入れて置く臺所戸棚の中から此等のものを取出した。彼女は少佐の危險な容態を別に氣に留めないやうであつた。

『コロロホルムは餘程儉約いたしませんと。』彼女が注意するやうに言つた。『病院列車が着きませんので、もう一壜しか殘つて居りません。此の方は知覺を失つて居りますから麻醉劑を使はないでも宜しくはありますまいか。』

院長は返事もしなかつた。彼は屠場の動物のやうな叫聲を窓外に聞きながら、少佐の顏に面罩を掛け、脫脂綿にコロロホルムを振りかけて、それを仰向けに寢かせた少佐の鼻の下に當てがつた。

『脈を取れ。』

『はい……』

ルート看護婦が幾ら脈を數へても分らなかつた。彼女の熟練した指先にすら感じない程、患者の脈搏は微弱であつた。

『脈がありません。』

『構はない……さうやつて居れ……』

患者の體がうつむけにされた。深い切開を以て肉と筋が骨から切り離された。

『俺の思つた通りだ。五番目の推骨に刺さつて居る。鉗子を呉れ。』

糞搔の破片が露れた。それは殆ど一吋穿入したのであるが、その尖頭が見えて居た。

『これが折れゝば萬事休すだ。』と考へながら、院長は鉗子で鄭寧に夫れを抑えて徐かに拔き取りに掛つた。

『拔けて來る。看護婦、うまく行くぞ。』

院長は微細な鑷子の尖片に注意力を集中した。彼は微細な聲で自分に囁いた……

『さうだ……さうだ……徐かに……此處だ……』

彼はぐいと引張つた……

成功！院長は歡喜の叫聲を發して、鉗子に挾んだ尖片を高く揭げた。

『さあ見てみろ、負傷部には何も殘つて居ないと思ふが。』

『はい、何も見えません。ほんとうにまあうまく行きましたこと！』

『さうだらう！』

院長は大得意であつた。

『さあ其昇汞水をよこして呉れ。』

桃色の液體を入れた水盤を受取つて、院長は徐に鄭寧に傷口を洗つた。

『不潔なものが刺さつたなあ！……しかし此防腐劑で大丈夫だらう……』

院長が洗滌を了へるまでに確かに五分は掛つた。創口はすつかり淸潔になつた……

『看護婦、ヨードホルムと繃帶を呉れ。』

一言も言はずにルート看護婦は吩咐けられた品々を出した。始め彼女は此手術が成功するとは考へなかつた。鑄た尖片が折れて骨の中に殘ると信じて居た。それで手術が首尾よく行つた今も

尙ほ患者が助かるか何うかを疑つて居た。ヨードホルムの粉を振掛けて居る院長に向つて、彼女は控え目に訊ねた。

『先生、此患者をお救ひになることが能きませうか？』

『まあ能きると思ふんだ。しかし全身不隨になるだらう。それに脊髓に刺さつたのだから、負傷部が結核性になるかな。』

『まあ怖ろしいこと。其位なら死ぬ方がまし。』

『結核になつても氣を付ければもう十年は生きられる。』と院長が言つた。

繃帶が卷きつけられた。少佐はまだ知覺がなかつた。

『酸素はあるかな。』

『はい、此處に御座います。』

五分間の手當の後、ベルケルスブルグは體を動かした。其蒼白い頰に幾分か血の氣が現はれた。

『脈搏が段々强くなつて參りました。』

『それ見ろ。うまく行つた。』

『さうで御座いますねえ、先生。』看護婦は滿足の微笑を以て答へた。

『さあ十八番の寢臺を見て來て呉れ。』

ルート看護婦は其寢臺の傍まで行つて、默つて其處に立つた。

『如何？』

答がない。

十八番の寢臺には十九歲の少尉が寢て居た。彼は少しも體を動かさなかつた。

『先生の仰つた通りで御座います。』看護婦は聲を顫はせて言つた。

『お前は奈何して泣いて居るのだ。』

『先生、私はあの方のお身の上を存じて居ります。』

『さうか……！』

『あの方はお一人子息で、お母さんは彼方を將校にしやうと思つて能きる丈の事をなさつたさうです。さうして彼方は未だ十九にしかお成りになりません……戰線にお出掛けになる前にお母さんの事を私にお話しでした。』

『さうか、……しかし頭部に彈丸が留まつて痙攣が起つたのだ……どうする事も能きない……氷冷機も二十四時間氷が一塊もないのだから役に立たない。泣くな。泣く看護婦は使へない。俺が既う何遍も言つて聞かせた筈だ。さあ手を貸して呉れ！』

ルートは默つて命に從つた。彼等は若い少尉の暖い死骸を十八番の寢臺から下して床の上に置

いた。『もう時間がない。戸外に居る連中は皆な手當をしなければならない。だから少佐を此處へ寢かさうぢやないか。』と院長が言つた。

『此寢臺に此儘で御座いますか。』

『さうさ、腦膜炎は傳染しやせん。丁度可い案排に此寢臺が明いたのだ。戰線から二哩半しか離れて居ない此病院の事だ。萬事に節約を旨とせんければ可かん。さあ早くせい！』

ベルケルスブルグは十八番の寢臺に置かれた。

『正氣が付いたらレモン水を三匙飲ませるんだ……それまでは……』

手術器械を手にして院長は出て行つた。何故なら彼は運搬車の負傷者を見舞つて手術を要する患者を撰擇しなければならないからだ。

第九章　あゝ邪魔だ！

ベルケルスブルグは九日間生きるか死ぬかの境に彷徨したが、院長と看護婦の盡力で何うやら斯うやら危險を通り越し、終に病院列車で獨逸に後送された。彼は二度と戰場に立てないのであるが、それを知らせては可哀相だと言ふので、彼の問と懇願に對しては、彼を失望させないやうな返答が與へられた。

彼は何んな感想を有つて居たか？　彼は**トロワイヨン**の森でたつた一人の前で覆面を脱つたばかりである。生涯を通じて唯一回胸中を打明けたばかりである。此人物の感想を誰が忖度したであらうか？

シュロッセル以外には一人も知つて居る者がなかつた。此**シュロッセル**が戰爭後に生きながらへて證人に立てるか何うかは誰も斷言は能きまい。其以外の人には、親戚にも妻君にも實際の顏が見えなかつた。**メラニー**には確かに見えなかつた。

ファルケンスタインの男爵邸の戸口で、**ウキルバルレン** 郵便局の電報配達人が呼鈴を鳴らして居た。偶ま庭で鷄や鳩に餌をやつて居た**メラニー**が家の中を通つて來て戸口を開けた。電報配達人を見ると、彼女は胸騒ぎがして、顔が眞青になつた。

西部戰場から**ファルケンスタイン**へは何週間も直接に戰報が來なかつた。獨逸新聞の勝報以外に何も來なかつた。新聞は獨逸軍の敗を反對に勝利として報導し、退却を說明するには常に高等戰術上の理由を以てした。こんな有樣であつたから伯林でも地方でも開戰以來頻りに勝利を祝つたが、その實、幾多の村落や農場は露國軍の爲めに破壞せられ、大軍が **マーン**方面から擊退せられ、**波蘭**や**イーゼル**では幾十萬の戰死者を出して毫も得る所がなかつた。

しかし之に關して**メラニー**は何事も知らなかつた。一般の獨逸國民と同じやうに、彼女は戰爭に就て朧氣に不安を感じて居たに過ぎない。一般國民と同じやうに彼女は唯だこれ丈けの事を知つて居た——それは何週間、否な何ケ月の間戰爭が行はれても何等見るべき結果がないといふ事。死傷者が日を逐つて多數となり、遂に發表されなくなつたといふ事。熱心と勝利の確信がなくなつて悲みと諦めが之に代つたといふ事。

さうして毎夜眠られぬまゝに遠く離れた戀人の顏を闇中に描きながら、**メラニー**は自分に訊ねた——此諦めと氣迷ひがいつまで續いたら眞赤な「眞理」の陽が昇つて酷烈な事實が迷想と夢想

の霧を貫くやうになるだらうと。

メラニーは配達人から電報を受取つた。何となく彼女は自分の手に運命の卷物を握つたやうに感じた。自分の未來の道を示す道標を握つたやうに感じた。しかし不安の念に驅られながらも、彼女は配達人に少しばかりの心附けをして一言禮を言ふだけの餘裕があつた。それから彼女は自分の室で心靜かに電報を開けて見ようと思つて二階へ昇つた。彼女は既に其內容を知つて少しも疑はなかつた。

此電報は**シュロツセル**が發したもので、文面は近頃の電報の例として極めて簡單であつた。

『**ベルケルスフルク**少佐重傷歸國、**アドルフ**大尉戰死。』

メラニーの心意は此文句に强く引付けられた。彼女は泣かなかつた。唯だ窒息でもするかと思はれるやうに微かな音が彼女の喉から洩れた。勇を鼓して彼女は自分を鎭め、水に浸した、海綿で燃えるやうな眼を壓えた。

彼女は呼鈴を鳴らした。

呼ばれてやつて來た小間使は彼女を一目見て甚く驚かされた。顏は灰のやうな色、眼の下は黑く、頭髮は亂れ、唇は開いたまゝである。

しかし**メラニー**は落付拂つた聲で言つた。

『此電報をお父様の處へ持つといで。』

『かしこまりました。』

『一寸お待ち。お父様は今お不快かえ。』

『やつぱり例のやうで御座います。』

『それなら此電報をウエルツに渡してお呉れ。好い折を見てウエルツからお渡しするんだよ。可いかえ。彼はお父様の事を一番よく知つてるから。』

『かしこまりました、それではウエルツさんに。』

電報をメラニーの手から受取つた小間使は好奇心に充たされた。此電報に何か怖ろしい事があるに相違ない。さもなければ奥さまはあんな樣子をなさりはすまい。今日にも凶い事がありはしないかと氣を落してばかり被入つしやる殿樣とは違つて、奥さまは近頃どつちかと言へば元氣で被入した。その奥さまがあんな樣子をして被入つしやるのだから、必と此電報が凶い事の知らせに違ひない。旦那樣が戰死遊ばしたに違ひない！

斯う考へながら小間使は吩咐つた通りに電報を手渡さうと思つてメラニーの居間を出た。小間使の考へは中つて居た。ヴエルツは邸中の人に嫌はれては居たが、誰を見ても何を見ても氣に入らない男爵の氣むづかしい性質を呑込んで居るのは此ヴエルツのみであつた。男爵に電報の來た

事を告げて少佐の計を知らせるのは確かに彼の役目でなければならぬ。

小間使は自分に電報を讀んだ。繰返して今一度讀んだ。さあ讀んで見た所ではたいして凶くもない、重傷ではあるが既う歸國の途中である。歸國の途中とすればそんなに容體の惡い筈はないと彼女は推理した。危險は通り越して居るに相違ない。しかし重傷である。恐らく何か怖ろしい出來事があつて、此電報は夫れを覺悟させる爲めであらう。腕か脚が一本なくなつたのかも知れない。或は兩腕も兩脚もなくなつたのかも知れない。

何と言ふ怖ろしい事であらう！どうしても眞實とは思はれない。少佐のやうな男盛りの人が、いつも好男子と思はれた人が、軍服を着ると彼樣に立派だつた人が、急に腕も脚もなくなつた……どうする事も能きない片輪、獨りでは着物も着られず食物も食られない片輪、何の用をたすにも人手を借りなければならない片輪……考へてもぞつとする！

しかし此電報にはまだ他の事が書いてある。アドルフ大尉戰死！小間使は此アドルフ大尉を知らなかつた。大尉のよく遊びに來る頃は、彼女はフアルケンスタインに來て居なかつた。これは必と少佐の友人で、電報の序に其の戰死を知らせてよこしたのであらう。

彼女は廊下でウエルツに會つた。彼は男爵の琶布を取換える爲めに臺所へ行く處であつた。最近二週間といふもの、男爵は亞麻仁の琶布でなければ痛みが凌げないと言ひ張つて居るのだ。

『もし、ウエルツさん。』
『姐さん何だね。』
『都合の好い折に此電報に書いてある事を貴方から殿様にお話し申すんですよ。奥様のお吩咐です。』
『何か變つた事かね。』
好奇心がウエルツの眼を輝かせた。
『自分で讀んで御覽なさいよ。』
『重傷……やれやれ……しかし俺はこんな事だらうと思つて居た。佛蘭西軍の彈丸に出會しちや誰だつて滿足な體では歸れやしないよ。佛蘭西の野戰砲兵は獨逸のよりかずつと強いからな。しかし獨逸ぢや誰だつて知つてるが、これを口に出す譯にや行かないんだ。』
『あらさう?』
『それからアドルフ大尉戰死。おやく。好いお方だつたがな。音樂がお上手だつた。何にしろ卽席に歌曲を作つてピヤノで彈くんだからな。あれを聽かされると涙が出たつけよ。』
『貴方アドルフ大尉つてお方を知つてるの?』
『アドルフ大尉を知つてるか?二三年前の大演習の時に此フアルケンスタインに來て居なすつたんだ。未だお前さんが御奉公に來ない時分さ。』

『あら。さうして貴方何か他にアドルフ大尉さんの事を知つてゝ?』
小間使はやたらに聞きたがつた。女性獨特の直覺を以て、彼女はメラニーの不思議な樣子とアドルフ大尉の戰死との間に何か面白い關係がある事を察した。彼女は仕事の暇によく小說本を讀んだ。さうして何んな家にも一家の秘密はあるものだと信じて居た。彼女は又た訊ねる。
『ウエルツさん。此の妙な大尉さんの事を何か他に知つてゝ?』
『どうしてお前さんは妙な大尉さんなどと言ふんだね?』
『妙と言ふ理由があるのよ。』彼女は自ら妙な微笑を含んで斯う答へた。
他人に面白がられるのが何より好きな、さうして常に他人の上手を越したがるウエルツは、對手よりも更に妙な語氣を以て答へた。
『さあ知らないでもないよ。之には一寸味な事が絡んで居るんだ。アドルフ大尉さんが此お邸に泊つて居なすつた頃には噂をしないものはなかつたよ。』
『奥さまに關係した事なの?』
『さうさ。奥さまに大關係があるんだ。俺等は大尉さんが奥さまに申込む事とばかり思つてたんだ。あのお池の側にある樫の木、あの下にベンチがあらう?ベンチに口があればあれに訊いたつ

て解るよ。所が意外にもお孃様が二十も年齢の違う少佐様と話が決つたんだ。ウヰルバルレンの猶太野郎の話ぢやあ何でも金錢のいきさつださうだ。あの猶太野郎、猶太ぢやなくつて英國人でゝもあるやうな下等な笑ひ方をしながらさう言つたつけよ。』

『戯談はおよしなさいよ、ウエルツさん。』

『戯談ぢやない、全く眞面目だ。今日では一人の英國人は猶太人の十人よりか十倍も悪い。世界中に英國人のやうな性質の悪いペテン師はありやしない。嘘と思ふなら東普魯西の新聞を見て御覽。しかしお前さんは此節でも新聞を讀まないんだな。お前さんは小説本の他には何も讀まない人だ。』

小間使は聽いて居なかつた。

『それで解つた。すつかり解つたわ。』と彼女は呟いた。して見ると奥さまが彼様にして被入つしやるのは大尉さんが死んだからで、旦那様のお怪我の爲ではない、このお邸にも一家の秘密はあると彼女は考へた。

『琶布が熱くなりましたよ、ウエルツさん。』と臺所からコツクが呼ばつた。

『あゝ今行くよ。』

ウエルツは去つて了つた。小間使は雇人部屋へ入つて行つた。言ふまでもなく彼女は其處で一

同に大秘密を洩した。

第十章　手の附けられぬ病人

邸の廣間の、今年になつて始めて焚いた暖爐の前に腰かけて、**ファルケンスタイン**男爵はぢれつたさうに琵布を待つて居た。例の長い煙管は近頃彼が掛けつきりにして居る臂掛椅子の側の隅に立て掛けてあつた。彼は化粧着をぐる〳〵卷に着てむき出しの脹れた左足をさすつて居た。

『あの男は何うしたのぢや！』

彼はもどかしがつて置時計を眺めた。單調なチクタクの音が秒を刻んで、其中に少くとも又た五分經つた！女中どもに引掛つて話込んでゞも居るのか。老男爵は氣をいら〳〵させて新聞紙を取上げた。一寸持病の痛風を忘れた彼は餘り勢よく足を下して大層氣を揉んだ。

彼は**ウヰルバルレン**の新聞を讀んで氣を晴らさうとした。朝から既う五度も讀んで夫れを暗に覺えて居たが、今一度『露國方面の大勝利！**ヒンデンブルグ**將軍八萬の捕虜を得たり！』の文句を滿足氣に讀んだ。彼は露國が百五十萬の豫備兵を有つて居る事、西比利亞は東普魯西の百倍も廣

い事を考へて見なかつた。『**ヒンデンブルグ**將軍八萬の露國兵を擒にす。』ちやんと此處に印刷してある。新聞に出て居るのだから事實に相違ない。

ファルケンスタイン男爵はえらい元氣であつた。八萬の露國人、大層な數だ！間もなく獨逸には捕虜を收容する餘地がなくなるであらう。捕虜に給する麵包がなくなるであらう。人民は既う物價が何うの斯うのと騒いで居る。青豆が百封度で四十五マルクもする。メリケン粉にば既う馬齒苜蓿の粉が混つて居る。それは八萬人の露國捕虜の爲めだ。獨逸は捕虜を收容する事が能きる英國が如何に港を封鎖して食料品の輸入を妨害したところで、やつぱり不足を來すやうな事はない。今年は大收獲だ、これも八萬人の露國捕虜の爲めになる。自分は、西比利亞には麵包は少ないが獨逸よりも廣い土地があるといふ事を忘れた。忘れたのが何故惡い？**ヒンデンブルグ**が八萬の捕虜を得た、それが要點だ……彼は悉く滿足した。

彼は杖を取つて痛む足を引きながら歩かうとした。

『えい！クソッ！』

しかし八萬人の露國捕虜の事を考へると、彼は元氣が出た。

廣間には東部戰場の地圖が掛けてあつた。

彼は地圖を調べなければ承知が能きないのだ。偉大なる**ヒンデンブルグ**が八萬の露國人を捕虜に

した場所を捜さなければ承知が能きないのだ。『三層倍も多い露國の軍勢をマンシュリヤの湖水の中へ逐ひ込んで、東普魯西から露國兵を追拂つて了つた人。』とお氣に入りの山守モスコウキツツが言つた事があつた。

『えいクソツ！』

男爵は地圖面を捜した。『ワルソー、ヴヰストウーラ、ワルト……トルン』

『おや！トルンか。露國軍がトルンへ攻めて來たら何うぢやらうな？』しかしそんな事は考へるのも莫迦々々しい。ヒンデンブルグが湖水の中へ追込んで了ふだらう。湖水がなければ何處か他へ追込んで了ふだらう。ヒンデンブルグが居れば大丈夫だ。

山守はもう、彼是れ七十歳だが好い人間であつた。彼は男爵と同じやうに若い時分千八百七十年の戰役に從軍した。その頃男爵は痛風で足の痛むやうなことはなかつた。酒を何本飲んでも、夜通しトランプをやつても平氣であつたが、今は醫者から酒精分を飲む事を禁じられて居る。しかし山守は今でも勝手な眞似をする事が能きた。

聖ブリヅーで彼は俺の命を助けて呉れたつけと男爵は想起した。嗚呼奈勃翁三世と聖ブリヅーの時は愉快であつた。彼時佛蘭西は新興の獨逸の爲めに粉碎された。今度も英國が『信義を知らぬアルビオン』でなかつたら、それから此ケチ臭い白耳義が陛下の軍隊の通るのを拒絶しなかつ

たら、今頃佛蘭西は粉碎されて居たのだ。英國の事を考へるとフアルケンスタインは拳を固めて地團駄を踏んだ。

『えいクソツ！』

ウエルツが湯氣の立つた琶布を持つて入つて來た。

『殿樣、何をして被入つしやります。何ういふ事が御座いましてもお起ちになつては可けません。』

『大丈夫ぢや、ウエルツ。』

『いゝえ、お御足に繃帶を遊ばさないでお起ちになつては可けません。』

邸中で男爵が幾らか人間扱ひにして居るのは此のウエルツだけであつた。ウエルツは男爵の性質を呑込んで居たのだ。それだから男爵は溫順しくウエルツに捕まえられて臂掛椅子に引戻された。

『さあ殿樣。どうぞお腰をお下し遊ばせ。』

『えい！此足が！』

『殿樣、お御足も直ぐ癒ります！熱い琶布が一番お宜しいと醫者も申して居ります。どうぞお御足をお擧げ下さい。』ウエルツは燒けどをするやうに熱い琶布を關節の周圍に當て始めた。

『えいツ！こら！俺を焙肉にでもする氣か、コザツク兵がシユマルカルデンの人民をやり居つたやうに。うむ？この野郎！』

ウエルツは鐵石の如くであつた。彼は熱いのが何より可いのだと男爵に言ひ聞かせながら、ずん〳〵琵布を卷きつけて行つた。

『殿樣、熱いが何よりで御座ります。少しお微溫くはないかと心配して居りましたので。』

『くたばるが可い！』

『殿樣が其樣に私をお扱ひ遊ばすなら。』

『何ぢやウエルツ、其樣に私を扱ふとは何う言ふ意味か？何うしやうと言ふのか？』

ウエルツは主人の氣質を知つて居た。好奇心が其主なる弱點であつた。ウエルツは男爵に聞かせる好い便りを有つてゞも居るやうに唯だ嫣然と笑つた。

『何ぢや。』

ウエルツは男爵の好奇心を高めるために一寸默つて居た。

それから彼は悠長に言つた。『殿樣、西部戰場から消息がありました。』

男爵は眼を見開いて、ウエルツの言葉を口から引張り出さうとするやうな顏付をした。

『ウエルツ、勝利ぢや？佛蘭西を再び起てんやうにした大勝利ぢやな？西部戰場からは其他に消息の來る筈はないが。』

ウエルツはフキガロのやうな微笑を浮べた。

『内々のお便りで御座ります。今しがた奧樣の所へ電報が參りましたので。』

『婿からの便りかの？』

『はい、さやうで御座ります。』

『好い便りか。』

『私の考へますところでは、一番凶い便りでは御座りませぬ。』

『やれ〳〵、その便りを聞かうかの。』

ウエルツは又た躊躇した。『殿樣をお驚かせ申してはなりませんから、順を反對にしてお話し申上げる方が宜しからうと存じます。』

『順を反對とは何ういふ意味かの。』

『はい、なに、始めには何うでも宜しい事を、それから結構な事を、それから少々凶い事をお耳に入れやうと存じますので。』

『うむ、お前は中々よく俺の神經の工合を心得て居るの。』

『はい殿樣、それはもう。』ウエルツは得意になつて言つた。『殿樣はアドルフ大尉とおつしやる方を御記憶で被入つしやりますか。あの時は中尉で御座りました。』

『それは誰かな。』

『二年前の大演習の折にファルケンスタインに宿をお取りになつた方で御座ります……』

ウエルツは躊躇した。

『ウエルツ、先を話せ。遠慮せんでも可い。』

『其方はあの頃たしか……お孃樣に……』

『さうぢや其樣な事があつたつけの。好男子で短い髭を生やして居つたやうぢやの。』

『陛下が卷煙草の火でお髭をお燒きになつてからは、殿方は皆な口髭を短くして居られます。』

『さうぢや、さうぢや、ルードルフぢやつたな？うむ、そのルードルフが何うしたのか。』

『いゝえ殿樣、アドルフで御座ります。』

『名は何うでもよい。』

『其方は戰死なすつたと電報に書いて御座ります。』

『可愛相に！しかし今日は戰死者が澤山ある。別に驚ろく事もない。』

『さやうで御座ります。別に驚く事も御座りません。毎日何千人も戰死いたします。それが當節は普通の事になつて居ります。』

『婿のフラン・ベルケルスブルグは？』

『少佐樣は御歸國の御途中で御座ります。』

『歸つて來る？それはまあ結構ぢや！さうするとトランプの對手が一人殖えるの。ウキルバルレンのミユエルレル牧師は下手で困るのぢや。それにもうそろ〳〵孃になる。』

『はい、しかし……』

『その「しかし」は何う言ふ意味ぢやの。』と男爵が訊ねた。

『電報にはまだ他の事が書いて御座ります。』

ウエルツは之では切し出し方が拙かつたと內心考へた。

『それは何んな事かの？……婿が歸つて來てトランプ仲間に入るやうなら結構ぢや。此他に一體何が書いてあるのぢや。』

『殿樣は此電報が戰地から參つた事をお忘れ遊ばしましたか。電報には少佐樣が御負傷遊ばしたと書いて御座ります。それも重傷をお受け遊ばしたので。』

『さうして歸つて來るのか。それは何ういふ譯ぢやらうかの。』

『私も其點を未だ存じませんので御座ります。しかし少佐樣は片方のお腕かお御脚をお失ひ遊ばしたかも知れません。重傷と申しますと此樣な事で御座ります。』

男爵は頭を搔いた。恐らくウエルツが正しい。『腕ならば、一本だけで濟めば可いがの。ウエルツ、お互に靜かに待つて見ねばなるまい。彼が此方へ歸つて來るとすれば！……さうさの、奈何な事

があつたかも知れん。此亞麻仁は中々よく利くわい。醫者の言つたのが眞實ぢや。煙管を取つて呉れ。』

『はい。』

『火を點けて呉れ。火がなくては喫めぬ。』

『かしこまりました。』

ウエルツは男爵の長い煙管に火を點けた。

『あゝ、やつぱり煙草は此ブリナスが一番好いのう。』

第十一章　周圍は永久に暗い

三日後にベルケルスブルグがフアルケンスタインに着いた。彼は以前のベルケルスブルグの影に過ぎなかつた。樅の小枝を輪にして表口を飾らうと考へ付いたウエルツはそれをせずには居られなかつた。槲の葉がすつかり枯れて了つたからだ。『木々の葉の落ちぬ前に、吾等は皆親愛なる祖國に歸るべし。』と皇帝陛下は宣つたが、これは事實にならなかつた。しかしウエルツは戸口を國旗で飾つて、『凱旋の勇士を歡迎す』と記した板を掲げた。

歸つて來たベルケルスブルグは忠僕の心盡しの飾付けが目に留まると、その蒼白い痩せこけた顏に力のない微笑を浮べた。

『之が凱旋の勇士か』と彼は思つた。

がた〳〵に狂つた神經とまだ痛む脊中の傷、戰爭の紀念物はこれ丈けだ。彼は引きりなしに大砲の轟きを夢に見た。そして目が醒めて居る間は常に血と死骸を、死骸と血を視た。目に映ずる

ものは悉く怖ろしい深紅色で塗られたやうに見えた。食物は血に浸されたやうに思へるので殆ど一口も嚥下する事が能きなかつた。毛ほどの事で彼は赤坊のやうに泣いた。どうかすると何の理由もないのに赤坊のやうに泣いた。

此怖ろしい發作は時を嫌はずに起つて彼の心身を疲らすのであつた。まるで彼の命令によつて家を燒かれたロージーの女子供の涙が一緒に集まつて彼の眼から溢れ出るやうに思はれた。幾多の無智な無分別な人間に交つて、彼は自分が何を爲しつゝあるかを承知して戰爭に出掛けたのであつた。彼は自分が神の裁判を受けて居るのだと感じた。

彼の姿を見ると雇人達は驚いて口が利けなかつた。老男爵も輕口一つ言へなかつた。邸中の人人は種々の事柄を訊ねやうと思つて居たのだが、一人として問を發する者がなかつた。訊ねなくともベルケルスブルグの樣子にはつきりと表はれて居た。好奇心と興味が變つて恐怖と憐憫になつた。唯だ一人だけは少しも假借なき目付を以て穴の明くほど彼を眺めた。メラニーは何んな事をしても眞相を知らうとしたのだ。しかし彼女の良人は簡單な形式的の文句の外に一語をも發しなかつた。

男爵邸に着くと直ぐ彼はウエルツと今一人の雇人に運ばれて自分の部屋に入つた。さうして其朝一番に醫師の來訪を受けた。此醫師が軍醫の報告で讀んだ事を男爵とメラニーに繰返して聞か

せた。『精神障害重大にして、今後如何なる變化を來たすかは豫じめ斷言するを得ず。背部の負傷は脊髓を傷け、豫後不良なれば、恐らく緩漫なる結核症を惹起すべし。』

醫師は極めて重大な結果が生ずるだらうと云ふ事を隱さずに語つた。男爵邸の廣間で彼女は葡萄酒とシガーをやりながら、男爵と患者の妻を對手に長い間話をした。男爵は自分の體の事を引きりなしに質問して話の邪魔をした。それだから老醫師も我慢がしきれなくなつて一度などは慳貪に答へた位であつた。しかし痛風病みの男爵は自分の事ばかり考へて居て、他人の病氣に頭腦を惱ます事が能きなかつた。それからメラニーは醫師の診斷を平氣で聞いた。その樣子を見て醫師はまるで水行水でもつかはされたやうに感じた。だから彼は再び自分の馬車に乘つて町へ歸る事になると大に喜んだ。『いやはや實に驚いた！俺は開業以來この樣な不人情な連中に出會つた事がない！』と彼は思つた。彼は翌日ウヰルベルレンの町立病院から看護婦をよこす事を約して、二言三言鄭寧に挨拶して歸つて行つた。

患者は體を動かす事が能きないから熟練な看護婦を置く必要があるといふのが醫師の意見であつた。フアルケンスタインもメラニーも之に同意した。

町立病院のウルスラ看護婦は翌朝時間正しく出掛けて來た。患者は前夜殆ど眠らなかつた。食慾が全くなく、傷の痛みが益々甚くなつたので、彼はモルヒネの注射を乞ふた。看護婦は少時躊

躇して居たが終に患者の望みに任せて注射を行つた。その結果幾分精神が鎭まつた彼は少量の珈琲を啜り、且つ二三の言葉を口に出すことさへ能きた。

『家内を呼んで呉れ！』

『あまり亢奮なさるやうでは可けませんが！』

看護婦は不服を唱へるのを氣の毒に思つた。何故なら少佐の唇が氣味わるく痙攣し始めたからだ。彼女は此朝患者の發作的に泣き出すのを警戒するやうに醫師から注意されて居た。患者の神經は非常に弱つて居るから、何時危險な容態に變化しないとも限らないのだ。今一度患者は幼兒の祈禱のやうな調子で懇願した。その聲は既う泣聲であつた。

『看護婦さん、家内を呼んで呉れ。』

看護婦は患者の希望に從つて無言で室外へ出た。窓際に捨えた廻轉椅子に腰掛けて、少佐はフアルケンスタインの秋の庭を見詰めた。彼の心の眼は村の燃え上る火炎と、幾千人の創傷から迸しる鮮血との外に何物をも視ることが能きなかつた。フランダースと佛蘭西と波蘭の土に拭ふべからざる汚點を殘した幾千人の血、如何なる歴史の裁判も此等の汚點を恥辱の帳簿から拭ひ去る事は能きない。

ベルケルスブルグは急に怖ろしい幻覺から醒めた。戸が開いて、黑の喪服を着けた陰氣な人影が

室の中へ辷り込んだ。彼が若しローシーの教會堂の傍にあるピュニヨン少年と老司祭の墓を見た事があつたなら、此の人影を見て彼は其墓を想起したかも知れない。彼は曾て自分の妻であつたが今は赤の他人である此の人影を見知らぬ顔に眺めた。

『入つて來たのは「復讐の女神」であつたらうか。』と彼の激昂した心意が訊ねた。

此女は決して了解しないであらう、決して容赦しないであらう。メラニーの後から看護婦が跟いて來た。運命の怖ろしい炬火の傍に月の光がさしたやうだと彼は思つた。看護婦は親切と慈善の權化、黑服の女は最終の宣告を傳へる無情の使者であつた。彼は看護婦に自分の傍を離れないやうにして貰ひたかつた、それほど彼女が頼母しく思へた。しかし彼は自分の心を勵して言つた。

『看護婦さん、僕は少時家内と二人で居たい。』

看護婦は患者の椅子蒲團を直し、ラムネを載せた小さな卓子を近く寄せて、好い聲で訊ねた。

『何も御用は御座いませんか。』

彼は無理に氣力を出して答へた。

『別に用はないから向ふへ行つて呉れ。』

看護婦は出て行つた。彼の兵營町で別れてから、始めてメラニーとベルケルスブルグが二人きりになつた。

薄暗い秋の光線が彼女のすらりとした姿に落ちた。何年か以前に彼はソフヲクリスのアンチゴニを舞臺で見た事があつた。『私が此處へ來たのは憎む爲めではありません！愛する爲めでもありません！』彼女も此白の通りであらうか。いや……其堅く結んだ決して憐愍の情に和らぎさうもない唇には別種の表情があつた。戰勝の紀念としてホロフアーニスの首をイスラエルに持つて來たジユーデイスは、此樣な顏をして居たかも知れない。深い沈默が二人の間に横はつた。壁にかけた時計の音が秒を刻んだ。一言も話が出なかつた。メラニーは殆ど良人に脊中を向けるやうにして窓のところへ行き、じれつたさうに硝子をコツ〳〵と叩いた。終に彼女が言つた。

『どうして私をお呼びになつたんです。』

唯だそれだけ。彼の名をすらも彼女は呼ばなかつた。

『メラニー、お前は誰の喪に服しとるんだ。』

此問は苛酷のやうであつた。彼女はそれを感じた、しかし彼女の答は更に苛酷であつた。彼女の言葉は鐵槌の如くに下つた。戰爭と恐怖が既に憐愍の情を殺して了つた。彼女の胸には愁傷の念が起らなくなつて了つた。今ベルケルスブルグは彼女の冷やかな答を聞いて其事が解つた。

『私はアドルフの喪に服して居ります。』

『お前の戀人だな！』

『此世の中で一番いとしく思つた人で御座います。』

彼女は嘲るやうに微笑んだ。さうして彼は其以上に彼女を追窮するには自分の氣力が甚しく足りない事を感じた。再ひ涙が湧き出て、彼の喉が詰つた。トロワイヨンとロージーの血のやうに赤い幻影が彼の眼の前に現はれた。

『彼方へ行け！彼方へ行け！』彼は途切れた聲で言つた。一言も言はずに、又た見向きもせずに、メラニーは室を出た。

第十二章　哀哭の聲

ベルケルスブルグの最も恐怖した時間は夜の時間であつた。眠りもならぬ永い秋の夜な夜な、吼えるやうな風がフアルケンスタイン邸の窓に當つて、いつ迄も癒えない創傷がズキ〳〵とうづいた。

十時前後にウルスラ看護婦が彼を寢床に入れるのであつた。彼女は毎夜彼に何か欲しくないかと親切に訊ねる、毎夜彼は何も欲しくないと答へる。すると彼女はドーアを通つて隣の室に寢に行くのであつた。

それから始まるのだ。時計の單調なチクタクが一秒一秒と刻んで行く。彼は一時間の四分の一も安らかに眠ることが能きなかつた。一の側から他の側へすらも彼は動くことが能きなかつた。一寸體を動かすのも難儀であつた。脊推の傷は一生癒りさうにもない。彼はじつとして寢て居なければならぬ。すると例の光景が現はれる——夢ではない、大病人の妄想ではない、永久に食ひ入る悔恨の齒が頭腦に印した怖ろしい眞實の繪だ。此戰慄すべきパノラマが展開して來る。

例の兵營町の停車場。大勢の人が訣別の挨拶を述べる、手巾を振る、握手をする。いづれも草花と槲の葉を飾つた兵士等の爲めに此樣な事をして居るのだ。舞踏會へでも出掛ける時のやうに、陽氣な彼等は歌つたり、口笛を鳴らしたり、酒を飲んだり煙草をふかしたりして居る。古參兵の長い縱列、昨年の秋に召集された新兵の群、何處までも續く縱隊又た縱隊。二三週間で勝利を收める積りでもあるやうに、國境を過ぎ、ルクセンブルグを過ぎ、白耳義を過ぎて佛蘭西の北部へ進んで行く。彼等は屠所に向ふ牛の群に過ぎない。佛蘭西軍の野砲の食物に過ぎない。白耳義の沿岸に於ける英國弩級艦の巨砲の的に過ぎない。フランダース と佛蘭西の野に死骸の層を築く人間の石屑に過ぎない。

さうして煙の棺衣に蔽はれて掘割も河も紫色になつた此等の廣い土地の到る處に、燒かれた町や村の火が燃えて居る！勤勉な繁昌な佛蘭西が今や赤熱した一つの窯であつて、その中で諸國民が敵味方の別なく生きながら焙燒にせられつゝあつた。

其處に横はつて過去を考へながら、ベルケルスブルグは自分が魔王サタンの國から起つたやうに感じた。聖書にはサタン の事を何と錄してあるか？『彼は始めより虐殺者にして、眞理を守らず、そは彼に眞理なければなり。』サタンは始めから虐殺者であつた。

しかし今此樣な事を考へて何の役に立つ？何故に此等の怖ろしい考へが繰返し〳〵起つて來る

のであらうか？後から後からと色々の光景が現はれて來る。恐怖の光景、狂亂の光景、彼は自分に能きる事なら此等の光景を拂ひ退けたいのであるが、終日終夜ひつきりなしに現はれて來る。何故ならば彼は自分の眼を以て之を視たからである。何物も之を拭ひ去ることが能きない。

歐羅巴が自己と戰つて居る。母體が細々に刻まれて居る。此等の諸國民を生んだ體が八つ裂きに裂かれて居る。

これが總ての中で最も要重な考へであつた。寄木細工のやうに無數の斷片的心像を集めて出來た狂亂と恐怖の一大心像であつた。仕掛の狂つた世界はもう修繕する事が能きない。世界は發狂したまゝに放置してある。仕掛が狂つて居る。機械水雷を以つて充たされた海、海に面した絶壁には何處にも「死」が待つて居る。どの山の頂からも「死」の矢が放たれる。どの谷も「死」の收獲を以て埋もれて居る。肉のない顏と骨ばかりの腕を有つた「死」が國から國へ濶歩して居る。空氣は憎惡と騷亂の言葉の爲めに濁つて、各國民に害毒を及ぼしつゝある。

眼の細い黃色人種が飛び出して白皙の同胞と戰ふ。黑人種が獵犬の如くに鞭たれて世界の尊い獲物を漁る。インダスやガンジスから刑罰の執行者として皮膚の黑い人間が引張り出される。嗾けられた回々教國の宗旨狂が、綠色旗と新月旗を頭の上に飜へらせて泰西文化の業蹟を破壞しに掛る。

『全能の神　アラーの名に於て……』

アラーの名に於て世界が狂はされた……露國の草原から匈奴やマヂヤル族の時代と同じやうに大軍が攻めて來る。黎明の天の一方から雲の如くに押寄せて來た淨塵子が青々とした畑を散々に荒らして行く。

何の因果か彼は傷の痛みに苦しみながら毎夜斯くの如く考へ、斯くの如く心に描いた。彼は世界的災禍の復雜な光景を解剖する事に未來永劫努めなければならぬやうであつた。

ベルケルスブルグは低い聲で自分に言つた。全人類の災禍に比べれば自分の小さな生が畢竟何である？彼が斯く自問したのは何度目だか分らない位だ。しかし自分の生の方が自分に取つて重要ではなからうか？

トロワイヨンの森に於ける彼の戰鬪、アドルフ及び自分の助かつた事、アドルフの暗殺、一齊射擊、ロージー、農家での負傷、それから殺さうといふ希望、裏切らうとする意志、此等は何よりも自分に取つて重要ではあるまいか？今日世界の感じつゝある苦痛に比べれば此等の事柄に畢竟何の意義がある？それでも之が自分に取つて更に重要ではあるまいか？

それは新しい世界を鍛製しつゝある此大戰亂の始めと終りを、地球の周圍に鋼鐵の箍のやうに卷きついた此大變災の始めと終りを包轄するではないか？罪惡と不和の起原が何であつたかを小さな鏡の如くに反映するではないか？嫉妬、猜忌、不信、反逆、神に對する誓言の違背、條約の

破棄、信仰の基礎の動揺……虚偽……大戰亂に虚偽があると同樣に此處にも虚偽がある……聖靈に對する罪……此處にも此罪がある……アドルフの定業にも、自分の定業にも、全人類の定業に於けると同樣に……復讐の神が自分をも他人をも窺つて居る！復讐の神がロージーにも世界にも威を揮ふのである。

ベルケルスブルグは創傷を忘れて寢床から跳ね起きやうとしたが、よろ〳〵と倒れて苦悶の聲を揚げた。

彼を窺つて居る復讐の神！二つの眼が彼に知れないやうに眞暗い室の中で窺つて居た。それは彼の妻君のメラニーの眼であつた。彼に罪惡があると臆斷した彼女は毎夜室内へ忍んで彼の寢言に耳を傾けるのであつた。

復讐の神は彼の妻君と成つて彼の寢床に現はれた。彼女は彼の息づかひに一々耳を傾けた。彼の呟く言葉に、彼の體を動かす音に一々耳を傾けた。斯うして彼女は彼の心の秘密を探らうとするのであつた。彼自らロージーへ呼び出した事のある復讐の神が今は彼の病室に……

絶望の餘りベルケルスブルグは恐怖の汗を額から出して合掌した。彼は祈禱を上げた。『それでもまだお祈禱が能きるんだ。』とメラニーは心の中で言つた。彼はまだ祈る事が能きた。メラニーは曾て彼が彼女の愛と童貞の供物を偷んだやうに彼の祈禱を偷んでやらうと思つた。

眼にて眼を償ひ齒にて齒を償ふ。それは死と破壞を齎らしつゝある現今の想念である。慈善と恕罪の教理が生れない前の舊約書の精神である。國家相戰ひ、兄弟相戰ひ、友人相戰ひ、夫婦相戰ふ。『正邪よりも强弱』これが今日の法則である。最大分量の破壞を遂ぐるものが優勝者である。

メラニーは偷んだ。彼が偷んだやうに、彼女も亦た心の祭壇から供物を偷んだ。神の所有である所の供物を偷んだ。彼が神にのみ洩らさうと思つて居た心の秘密を偷んだ。

『吾曹に罪を犯すものを吾曹が恕すが如くに、吾曹の罪をも恕し給へ。』ベルケルスブルグの乾いた唇が呟いた。『命の恩人たるアドルフに對する私の罪、天に在す神よ！――私の永劫の罪。殺さうとする心を抱いたのは既に殺害を行つたのであります……おゝ天に在す神よ！吾曹に罪を犯す者を吾曹の恕すが如くに、吾曹の罪をも恕し給へ。』

呻きながら彼は枕の上に沈んだ……言葉が最早出なかつた。彼の頭腦には最早翼がなかつた。意味のない言葉は天に舞ひ上ることが能きない。彼は神を信じなかつた。曾て信じたことがなかつた。彼は祈つたのではなくして、唯だ懺悔したに過ぎない。

眼を以て眼を償ひ齒を以て齒を償ふ……彼の苦悶の寢床を窺ふ復讐の神、彼の命令に依つてロージーに呼び出された復讐の神。二つの光つた眼球のやうなものが暗くした室の中で彼の目に見えた……何であらう？今彼の室から忍び出て行く黑衣のネメシスが憎惡に充ちた二つの眼を以

て實際に彼を見詰めたのであらうか？彼女であらうか？それとも幽靈であらうか？

彼は聲を立てやうとした、ウルスラ看護婦を呼ばうとした。是非とも彼女を呼んで自分の胸に積り重なつた山を除けて貰はなければならぬ。自分を發狂せしめつゝある幻想を拂ひのけて貰はなければならぬ。周圍に徘徊してゐる復讐の神から自分を救つて貰はなければならぬ。看護婦のウルスラに何うしても來て貰はなければならぬ。光明を持つて來て貰はなければならぬ。冷い軟い手を額に當てゝ貰はなければならぬ……しかし彼は聲を出して呼ぶ事が能きなかつた。自分の意志を働かす事が能なかつた。

フランダースと北佛蘭西に於ける、トロワイヨンとロージーに於ける怖ろしい戰ひが彼の腕を不具にして了つた。曾て鐵のやうだと思つて居た體質をめちゃ〳〵に壞して了つた。彼を老耄爺か生れ立ての赤坊のやうにして了つた。

何故……泣いて……待つて……苦んで、苦んで、苦んで、さうしてさん〴〵苦んでから死ぬのか？もうさん〴〵苦んだ自分が、遠方から苦患を脊負つて來た自分が……いや朝まで待たう……待て……待て……呼ぶな……意味のない言葉は神には通じない……

斯くして彼は秋の曙光がそろ〳〵と室の中へ這入つて來るまで天井を見詰めながら横はつた。

とう〳〵夜が明けた。

第十三章

恐怖に包まれて

フアルケンスタインは燃えて居た。神の大審判が始まつたやうに火が眞夜中に老男爵の邸宅に落ちた。さうしてリエージュとナムールの如くに、アントウエルプとマリーヌとルーヴーンの如くに、リール、アラス、モービユージュ、ロージーの如くに燃え上つた。周圍の村落の火が映る爲めに黑い無月の夜が眞赤な晝のやうであつた。コザツク兵が東普魯亞とフアルケンスタインへ侵入して來たのだ。

ウキルバルレンの教會堂の鐘が大恐慌を報じた。『コザツク來る！』ドンとヲルガの大平野から來た遊牧民の群。西比利亞の荒地から來た韃靼民の群。鞍上の人は縱横に馳突して恐怖に驅られた人民を逐ひまくつた。

アイトクーネンの森からダンビンネン街道の方へ、家を失つた憐れな人民が行列を造つて遁げつゝあつた。ポドリアとヲルヒニアの草原から來た浮塵子の群に驅逐されて西へ西へと遁げつゝあつ

た……

彼等は露帝の刑吏であつた。ペトログラードにモスクワにキエフにオデッサに活動して居た殘忍なる將軍の配下であつた。彼等の野生的な眼には神父と其教會とに對する信仰が輝いた。神聖なる大露西亞に對する狂熱的な忠節が輝いた。草原地方から來た此等の軍勢は今や全土を荒し廻つた。男も女も主人も召使もファルケンスタインから遁走つた。

メラニーが使つて居た可愛らしい——しかし幾分ほじくり屋の——小間使は、一人の韃靼人にさらはれてアイトクーネンの森に連れ込まれ、其處で彼の爲めに殺されて了つた。彼女は喉を扶ぐられて永久の眠りに就いて居た——ザールの名に於て神聖な大露國の犧牲とせられたのだ。

惡鬼の群は避難者を追ひ驅けて行つた。農場や村落が燃え上つて炬火の如くに道路を照した。西へ！西へ！

農夫の荷車、村人の燒け殘りの家財道具を積んだ乳母車、大地主の馬車、此處彼處に置き去られた自動車、すべてが雜然として集まつて居る。その中に交つて幾千の人々が足の痛みを忍びながら泣き〳〵徒歩で逃げて行く。永久に燒き拂はれた故鄕の煙が彼等の眼にしみる。その後からやつて來るのがコザック兵だ……

『アホウ！……露帝の御用だア！……』

いつぞやメラニーをウキルバルレン驛に出迎えた老馭者は荒々しく馬車を驅つた。彼に鞭たれる馬は森の闇に眼を眩され、處々の火の手を見ては荒れ狂つた。

『アホウ！アホウ！コザックが追つかけて來る！』

『ぴし〳〵鞭て！賴むぞ、ぴし〳〵鞭て！』ファルケンスタイン老男爵は頻りに叫んだ。『コザック共が追いついて來るぞ！』

馭者は鞭つた。罵つた。さうして狂氣の如くに馬車を驅つた。

『アフウ！アホウ！……』

恐怖の爲めに痛風を忘れて了つた男爵は、しつかりと握つた拳で上着のポケットを壓えた。その中にはファルケンスタイン家の金庫から出した紙幣が紙入に入つて居た。彼の手に殘つた紙幣は之れだけである。さうして明日は一文なしにならないとも限らない。何がさてコザック兵の襲撃を受けて居るのだ……

『アフウ！アホウ！』

わめき聲が彼の耳を貫いた……遠くの方にぱち〳〵の音、ガタン〳〵と物の壞れる響、暗い空に大花火のやうに擴つた火粉、めちや〳〵に崩壞した村落、煙と灰に化しつゝある農場。今まで土地に嚙付いて、小百姓を奴隷同樣に扱ひ、彼等に對して自分等の意志を强行する爲めに敎員を

道具に使つて居た大地主連が行列を造つて落ち延びて行く。

神聖な露國とコザツク兵が彼等を襲撃して居るのだ！

森の中の泥道を徐々と進んで行く男爵の馬車の後部にベルケルスブルグが横はつて居た。その喰ひ緊つた齒の間からは少しの音も洩れないで、顏の色は怖ろしく蒼白かつた。彼は其處に死骸の如く横はつた。さうして彼の病的な心意は唯一つの考へを懷いて居た。『復讐の神ロトジーを襲ふ！』

ファルケンスタインの人々はコザツクの『アフウ！アホウ！』が男爵邸の中庭に聞えない前に丁度よく警戒を受けたのであつた。邸の屋根に火が附かない內に、四方から露軍に逐はれて逃げて來た村民が、寄つてたかつてベルケルスブルグを寢臺から擔ぎ出し、階下へ運んで馬車に載せたのである。

ウルスラが彼に附添つて居たが、彼女の看護は何の役にも立たなかつた。ベルケルスブルグの傷は火のやうに、地獄の火のやうに熱した。彼は何等か容易ならぬ事が出來したと思つた。癒らない傷口が開いたに相違ない。繃帶が動いて骨が露出したに相違ない。さうして馬車の搖れる毎に彼は殆ど堪えがたい痛みを感じた。しかし彼は一語をも發しなかつた。彼は唯だ舅の恐怖した眼を見詰めて居た。舅の老男爵は此樣な場合にも自分の大事な命と財產の外、何を考へる事も能きなかつた。恐怖した疲れた馬に鞭つ事を馭者に歎願する外何をする事も能きなかつた。

老男爵は坐席から重ち上り、馬車の窓から頭を出して後方を眺めた。

『すぐ後方へ來たぞ。クリスチヤン！馬に鞭を中てゝ呉れ！』と彼は叫んだ。

しかし夫れは燃え進む火焰の爲めに處々の木の影が動くに過ぎなかつた。此時コザツク兵は農場を捜し廻つて居て追擊を考へなかつた。彼等は木の下に腐つた林檎の臭を嗅ぎ付けて來る野蜂の群のやうに豐饒な土地を襲つた。

『彼女は一體何處へ行つたのぢや。』終にファルケンスタイン男爵が言つた。

何の答へもない。

『ウルスラさん。お前は知らんかの？』

『少しも心あたりが御座いません。』

『大變ぢや。敵の手に捕まつたに違ひはない。』

『そんな事は御座いますまい。』

『どうしてぢや。』

『奧樣のお體に間違ひはないと存じますから。』

『どうしてお前はさう思ふのぢや。俺を安心させやうと思ふなら話して呉れにや困る。』

『奧樣は昨日お出掛けになりました。未だ露西亞兵がウキルバルレンに攻め込んだ噂の立ちません

内に。ですから奥様は多分……』

ウルスラ看護婦が斯う言ふと、ベルケルスブルグの眼は熱心に彼女に向けられた。しかし彼は一言も口に出さなかつた……老男爵が追窮した。

『ウルスラさん。お前は何か確かな事を知つとるに相違ない。何故娘が昨日の中にウキルバルレンを出發したと斷定するのぢや。娘は何處へ行つたのぢや。』

看護婦は默つて居た。彼女はベルケルスブルグが自分の一言一句を熱心に聽いて居るのを視て、若し自分が老男爵の問に答へれば、それが病人の耳に入つて非常な精神的打擊を與へるに相違ないと考へた。

老男爵は語り續けた。『お前は何か確かな事を知つとる。俺の娘の居所を知つとる。彼女が父にも良人にも誰にも挨拶せずに昨日ウキルバルレンから發つた事をお前は知つとる。俺達に餘計な心配をさせて呉れるな。今は戰爭ぢやからの。』

看護婦は此問に何と答へて可いか決心が付かなかつた。

『アフウ！アホウ！』

ファルケンスタイン男爵は驚いて跳び上つた。

『コザックかの？おゝコザックかの？』

しかしそれは馬を勵ましさうとする馭者の聲に過ぎなかつた。馬は散歩路へ入つて中々歩調を早めないのであつた。

『話して聞かせろ。』

ベルケルスブルグが大奮發で訊ねた。しかし其語氣には以前彼の口から出た號令のやうな權威があつた。看護婦は其威力に壓せられて服從しない譯には行かなくなつた。

『奥様が私にお手紙を下さいました。』

『手紙をよこした？何故今まで話さなかつたのか？』

ウルスラ看護婦は默つてファルケンスタインの叱責を受けた。彼女は最早彼に注意を拂はないで、ベルケルスブルグの顏を驚いて凝視た。その血走つた眼が彼女の心の中を透視するやうに思はれた。

『先を話して聞かせろ。』

最後の努力を以て命じた聲の怖ろしさに彼女は身慄ひした。

躊躇したけれども、彼の意志に拮抗する事が能きないで彼女は喋り出した。

『奥様はケニグスブルグへお發ちでした。其處から伯林へお出掛けになるので御座います。ですからコザック兵の手にお捕まりになる筈はありません。お手紙に書いてある事を何方へも話さいお約束を致したので御座いますが、皆様が御安心遊ばすやうに此事だけはお談話しなければなる

まいと存じます……』

『ウルスラさん、俺の娘は何か計畫しとる事をお前に話したかの？何の爲めにケニグスブルグから伯林の方へ出掛けるのぢや。』

前方を凝視て居たベルケルスブルグは此理由を察する事が能きた。

『いゝえ、存じません。』看護婦はつい嘘を吐いた。

方便の嘘も役に立たなかつた。ベルケルスブルグはメラニーが眞相を知つて永久に自分を見捨てて了つた事を善く理解した。何か彼の手に光つた。馬車の中に閃光が發して、鈍い銃聲が聞えた……フアルケンスタイン老男爵がアッと叫んだ。看護婦は一聲悲鳴を擧げたが、ベルケルスブルグの上に體を屈めて其顏を撫でた。狹い場所の中で彼女ば何うすることも能きなかつた。

老男爵の唸るやうな聲を聞いて彼女はすつかり落付きを失つて了つた。

『何をしたのぢや。自殺したのか？話して聞かせ……』

看護婦は冷い手を顫はせてベルケルスブルグの體を探つた。其手が終に濃厚な暖い何物かの流れに觸れた。彼女は顫え聲で答へた。

『心臟の眞中のやうで御座います。心臟の眞中で御座います。』

狂氣の如く馭者は馬に鞭ちつゝあつた。

『アフウ！アホウ！』――コザック兵が來た、今度は本物のコザック兵であつた。想像が拵えた幻影ではなかつた。

短銃を放つ音がした。馭者は坐席から落ち、馬はよろめいて倒れ、馬車は止つた。銅像のやうな顏が幾つも老男爵を見詰めた。ベルケルスブルグの死骸を見詰めた。外の泥の中にはクリスチヤンと馬車馬が血の溜りの中に横はつて居た。又た短銃がパチ〳〵と鳴つた。それから沈默。

汚い手がフアルケンスタイン男爵の紙入と大事な紙幣を搜した。汚い手が重傷の看護婦を苦むした地面に引ずつて藪の中へ持つて行つた。ベルケルスブルグとフアルケンスタインの死體は、馬車馬と馭者と引くりかへつた馬車の傍に、ぶつちがひに横はつた。

『思ひ知れ！露帝陛下のコザック兵だぞ！』それは天より下された審判であつた。ロージーの時と同じく復讐の神が威を揮つたのであつた。

しかしベルケルスブルグは最早耳が聞こえなかつた。

トロワイヨンの森の中を彼の率ひた中隊が進んだやうに、コザック兵はアイトクーネンの森の中を進んで行つた。木の下の腐り林檎にたかつた野蜂の群は森の中へ飛んで行つた。

軈て彼等の姿は見えなくなつた。

第四編　內面暴露

第一章　獨座默念

急行列車は時間表にお構ひなく伯林からエイクス・ラ・シヤペルに向つて夜の闇を突き進んだ。此列車にはフランダースの戰場に向ふ名醫ウヰルヘルミの救護班が乘り込んで居た。

伯林には種々怖ろしい噂が立つたが、戰爭の電報は公表を禁じられたから國民は樣子を知ることが能きなかつた。一週間といふものは死傷者の數が少しも發表されなかつた。イーゼル河の渡渉は三度とも失敗に終つたのであるから此爲めに非常な損害を受けたに相違ないと言ふ風評もあつた。軍用列車が續々と東から西へ走つた。東部から送られた援兵は第四回の渡河戰を遂行する爲めの豫備隊であつた。何故なら獨逸皇帝は或る日限までにカレーとブウローニユの占領を命じたからである。

普魯亞陸軍の精鋭を以て目されたボツツダムと伯林の近衞諸聯隊が此驚くべき計畫を實行する豫定であつた……さうして北海の水は今にも彼等を迎へ擊たうとして居た。

從來よりも更に怖るべき損害を被らないとも限らないので、此列車はウヰルヘルミの指揮の下に醫師や看護婦長や看護婦を滿載して、途中殆ど停車せずに東部から西部に向つて急行しつゝあつた……

窓外には初冬の夜が益々暗くなつた。一等室の隅の座席に學者風の强い沈着な顏を有つたウヰルヘルミが腰かけて居た。彼は伯林大學の臨床講義室で幾百人の命を救つた名醫である。

彼の頭の上の手荷物棚に小さな革製の箱が載せてあつた。その中にはメスや、骨鋸や、鉗子や、傷創の秘密を探る爲めの種々の探針や、强直症を防ぐ爲めの消毒繃帶が入れてあつた。此等は軈て巨匠の手に活用せられて奇蹟の道具となるのだ。

ウヰルヘルミは眠れなかつた。伯林大學の外科臨床講座の主任となつてから、傍らポン及びプレスラウ大學で外科大家の助手をも勤めた彼は、十七年の長い間に種々の怖ろしい光景を目擊したが、今フランダースの戰場には如何なる光景が彼を待つて居るのであらうか。

先年プレスラウの附近に鐵道の大椿事のあつた時、彼は眞先に現場に派遣された一人である。それから曾てルール郡の或村に大落雷のあつた折には被害民救助の任に當つた。

けれども、鐵道の椿事だの落雷に因る被害だのは、英國戰鬪艦の巨砲や佛軍の野砲の能へた損害に比較すれば何でもないのだ。嘗て風景の美を誇つたフランダースの廣い平野には幾千の同胞が

重傷を負ふて横はつた。彼は驕て此の怖ろしい光景を目擊するのだ。伯林大學の外科臨床講座主任としてウキルヘルミが自ら人間の禍災のドン底を極めたと考へたのは六ケ月前である……然るに今は如何なる事態が到來しつゝあるか!

北獨逸の平野を汽車で運ばれながら、彼はつい先頃内外の主なる都市で試みた自分の講演を想起した。此等の講演に於て彼は勞働者の傷害保險を說いた。工場、鑛山、及び鐵道に於ける勞働者の從業狀態を取締るべき方法を說いた。癌治療の爲めにラヂユムを備付ける必要を說いた。結核患者の療養所を設立する必要を說いた。今になつて見ると人類の苦患を輕減する爲めの此等の奮鬪努力は何の役にも立たなかつた、寧ろ滑稽であつた、と彼は思つた。

彼は勞働者の爲めに、癌患者の爲めに、結核患者の爲めに奮鬪して來た、心血を注いで研究を續けて來た。しかし今日此等の人々が何である?

フランダースと波蘭の平原に於て、塹壕に、要塞に、海岸に、血を流しつゝ生命を縮めつゝ横はる幾千の人々と比べたら彼等が何である?ラヂユムを以て餘命を延ばす必要などのない幾十萬の强壯な青年が、丈夫な立派な子孫を造るべき諸國民の精華が、『死』に捧げる奠酒として彼等の生血を流して居る。さうして彼等に代るものは老人と不具者と病人である。

獨、佛、英、白、露、各國民の精華が、營利者流の工夫した殺人機械によつて容赦もなく苅り

倒される。さうして之に代るものがない。英佛兩國が味方として今度の戰爭に參加せしめた黑人種兵や印度兵やアルゼリヤ兵は、悉く此等の巨大なる殺人機械の糧食である。此等の機械は藝術を以て世界の人々を恍惚たらしめた畫家にも、名作を以て幾多の人々を喜ばしめた詩人にも、眞理の探究に努力した思想家にも、幾千人の病を治療した醫家にも、世人を導いて靈の向上を遂げしめた說敎家にも、一樣に數理的精確を以て彈丸を雨下するのだ。而も犧牲は此等の人々のみであらうか?

不具になつたり病氣になつたりして故鄕に送り還される其他の人々は何うか?彼等は色慾を斷念する、自己の虛弱を遺傳することを拒絕する、子孫の繁殖者たることを拒絕する。歐洲諸國の將來の大不幸は此處に存するのだ。ウキルヘルミはフランダースの戰場に向つて夜の中を進みながら眼の前に此等の人々を視た。彼は其幻影から眼をそむけた。

彼は自分の前の席に寢て居る宮中牧師の顏に視線を向けたが、思はず侮蔑の擧動を以て頭を擧げた。これは何うだ!宮中牧師の稱號を有つて得意になつて居る馬鹿者が!と彼は思つた。ウキルヘルミは凝り固まつた唯物論者であつた。彼は英國——獨逸人の立場として惡まねばならぬ英國——のダルウキンを崇拜した。又た彼は學說の爲めに一部人士の呪詛を受けたバストウールを崇拜した。今まで彼はむづかしい職業に身を委ねて、自分の正當と思ふ事を行つて來た。さうして

信仰とか未來とかいふ事柄を曾て問題にしたことがなかつた。自分の前に贅澤な椅子褥に寢て居る牧師の顏を眺めると、珍らしい考へが彼の心に浮んだ。神學――總ての思想の中で最も變通性に富んだ神學――それは抑も何であるか？醫者で生理學者の頭腦を有つた彼には、これまで神學といふものが何うも善く解らなかつたが、今は全く之を理解することが能きなかつた……

新教の神學は軍曹に『廻れ右』の號令をかけられた獨逸の兵隊のやうに、偶々二週間の中に全廻轉をやつて了つた。主義を一變して了つた。今自分に對ひあつて眠つて居る人物がその生きた證據だ。宮中牧師、戰地布教師、その外幾つ職名を有つて居るものか知れはしない。此樞密顧問官、此神學者は戰地に出張を命ぜられたのだ。戰地の士卒を激ます爲めに今病院列車に乘つて自分と一緒に旅行しつゝあるのだ。

此人物はまるで手品師のやうに博愛の教旨を憎惡の教旨に變じて了つた。『爾の隣を愛しみて其敵を惡むべしと言へることあるは爾曹が聞きし所なり。されど我爾曹に告げん、爾曹の敵を愛しみ、爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を惡む者を善視し、虐逼迫害ものゝ爲に祈禱せよ。かくするは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり。』と聖書にも錄してある。然るに彼は其主基督に背いて憎惡を敎へる。『ナザレの夫子』は爾を訟へて裏衣を取らんとする者には外服をも亦とらせよと敎へたが、此宮中牧師の裏衣を取らうとする者があつたら果して何んな顏付をするであらうか！

ウキルヘルミは昔チベリアスの海に近いガリラヤの山で幾千の人々が一塊の麵麭と二つの魚を食つて基督の言葉に耳を傾けたことを思ひ浮べた。さうして考へた、此人物は……

しかしこれが不思議であらうか？此の高僧は、つい二三週間前に倫理と人類の道德律を衆人の前で弄んだではないか？さうして世間は彼の言葉を信じたではないか？今は總ての事物が冠履顚倒して居るではないか。自分と同業者を除けば總てのものが顚倒して居るではないか？敵味方の區別なく療治を加へる爲めに出て來るのは、人間の苦患を輕減する爲めに出て來るのは、善を爲さんが爲めに出て來るのは、自分の職業に屬する人々のみではないか？

列車が停つた。宮中牧師は一寸目を覺さうとするやうに見えたが、又た寢込んで氣持ち好さうに鼾をかいた……三週間の停車だ……小さな停車場の構内にちらほらと灯が見えた……野戰衞生隊の兵士が重傷者を擔架に載せて上り列車に搬び入れて居た。これはブラバントとフランダースの病院が餘程前から傷病者を收容しきれなくなつたからだ。旅行に堪えるものは皆な獨逸國内に歸らなければならない。さうして途中で落命するものが幾人あるだらう？

病院列車が動き出した。又た車輪の單調な響と根氣の好い機關車の煙を吐く音が始まつた。

フランダースとブラバントの野や町がウキルヘルミの昂奮した心の前に現はれた。ウキルヘルミ夫妻は藝術と美の崇拜者であつた。彼等は海を愛した。又た彼等は西班牙全盛時代に革命と自由の精

神が張つた舊い街々を愛した。

ゲント やブルージュの靜かな疎水の附近に樂しい夏を送つた往時の事を彼は思ひ浮べた。涼しい水に映る破風造りの家や楡の列樹。天然を愛し自由を誇る市民の手に建てられた公會堂や寺院や商人會所が堀に面して立つて居た。そのあたりには『時』が何百年も前から進行を停めたかと思はれた。

ウヰルヘルミ は身顫ひした。あんなに閑靜であつた町に、あんなに美しかつた町に、今度は如何なる光景を見出すのであらう？ さうして彼の前では伯林から戰地へ派遣された大得意の宮中牧師が鼾をかいて居た。此人物に取つては戰爭も死も憎惡も來世も何等の秘密がなかつた、此人物に取つては道は神にあらずして唯だ道であつた。

窓の外には夜が明けた。もうエイクス・ラ・シャペル に着いたのであらうか？ もう國境に來たのであらうか？

第二章　大勇猛心

ブラバントとフランダース。それは將軍 エグモント と畫家 ルーベンス の鄕土である。羅馬の爪とフヰリップの牙から世界を救つた人文の搖籃である。民權の守護神である。

ウヰルヘルミ の救護班を載せた急行車は、兵士で一杯になつた國境の停車場を出發した。此等の兵士はエイクス・ラ・シャペル に在るものと同じく、イープル の戰場へ豫備隊として送られるところであつた……リエージュと附近の炭坑が見えて來た。陷落した要塞が處々にあつた。最後まで持ち堪えたのには、まだ白旗が翻つて居た。その廢墟の下には幾多の勇士が葬られた。さうしてその司令官は砲煙の中から救はれて捕虜となつたのである。リエージュ の工業地――ぶち壞れた煙突が泥に埋つて處々に横はる工業地――が飛ぶやうに過ぎた。ワルーン民族の國土が急行車の遙か後方に殘つた。

ルーベンスとレンブラントの國！ 國も數多ある中に爾が未曾有の大戰爭の戰場にならうとは！ 爾

が血に浸されやうとは！爾の楡とポプラとが美しい地面から根こそぎにされて消え失せやうとは！平和の空氣を呼吸する爾の運河が太洋の波濤も洗ひ去ることの能きない血を以て汚されやうとは！

メラニーは汽車の窓際に立つて、熱い額を冷やかな窓硝子に押し付けて居た。機關車から吐き出す水蒸汽と煤が硝子を曇らしたので、彼女は窓外の地形を殆ど見分ける事が能きなかつた。しかし憐みに充ちた彼女の心は其潤んだ眼に視得ないことまでも觀照した。**ウキルヘルミ**と同じく彼女は戰爭前の**プラバント**と**フランダース**を知つて居た。さうして彼女は海の臭の强い爽快な空氣が歐羅巴に類のない光線と美しさを以て鼓動する此鄉土を愛した。

メラニーは愈々家と良人を見捨る決心をしたのであつた。赤十字の事業に働いて總てを忘れやうと決心したのであつた。敵味方の差別なく――（彼女の眼には最早此差別がなくなつた）――何處へでも出掛けて他人の爲めに善を行はうと決心したのであつた。何處でも哀愁と死が過去を忘れやうとして居るところへ行つて彼女は働かうと決心したのであつた。

ケニグスベルグと伯林とで彼女は處々方々へ出掛けて見たが何れも失敗であつた。何處も彼處も滿員であつた。怨恨と憎惡の世界の眞中で博愛の事業の爲めに働かうといふ婦人連（彼等の多くは唯だ流行を逐つて居るに過ぎない）が到る處にひし〳〵と詰掛けて居た。彼女は十度斷られ

た、しかし成功するまで斷念しなかつた。彼女の決心は極めて固い。一旦正と信ずることを實行しやうと決心すれば、彼女は何處までも其決心を曲げないのだ。敵の國で、能きることなら日頃憧憬れて居た白耳義で、『博愛』の僕とならう、これが彼女の望であつた。

赤十字社の事務所ばかりでなく、婦人の創立經營に係る**ケニグスベルグ**や伯林の種々の協會の本部は、彼女と同一希望を持つた婦人連で雜沓して居た。しかし彼女の希望は此等の人々とは全然同一ではなかつた。彼女は總ての戰爭の敵であつた基督の言つたやうに、疲れたるものと重きを負へるものゝ爲めに働かうとするのだ。彼女は他の人々と一緒なつて憎む爲めに來たのではない。彼等と共に愛しむ爲めに來たのである……彼女は終に本望を遂げるであらうか？

彼女は最後に際どい所で成功した……**ワイツエンスタイン**男爵未亡人――博愛の事業を神が特別に自分の爲めにこしらへて呉れたと考へて居る人――此人が**メラニー**を**ウキルヘルミ**教授の許へ送つた。**ウキルヘルミ**が白義耳行救護班の準備をして居ること、それから數日の中に**ランダース**方面へ出發することを未亡人は知つて居たのだ。

ウキルヘルミに向つて**メラニー**は其煩悶を打明けた。**ウキルヘルミ**に向つて彼女は其熱烈な希望を漏した。危險と死の眞中に働き度い、白耳義の憐れな人々の爲めに働き度いといふ希望を洩らした。彼女は彼を一見して絕對に信賴すべき人と感じたので心の中を包み隱さずに打ち明けた。

意外にも、伯林フヲッス街の自宅の診察室で多忙なウヰルヘルミが彼女に面接した。彼女はライプチーゲル辻の物音が遠くの海の音のやうに聞えて來る靜かな一室で、悲哀と苦惱に顫えながら心の中を彼に打ち開けた、その時の事を彼女は永久に忘れないであらう。

さうして何といふ立派な室であつたらう！人情の偉大なる批判者であり、藝術の熱心なる嘆美者であり、人間の味力である主人の面影が、其室の設備に顯れて居た。彼の眼中には國と國との差別がなかつた。彼の眼中には唯だ人間といふものがあつた。唯だ不幸な人間があつた。その病患と苦惱を癒し和げることが彼の事業であつた。

其室の壁には偉大なる畫家レンブラントの『解剖術の稽古』が掛つて居た。その隣りには『醫』と題する英國の名畫があつた。これは醫者が熱病に惱む子供の枕邊に體を屈めて居る哀れな光景を描いた畫であつた。それから伯林の國立美術館に藏するガブリエル・マツクスの『耶蘇病める嬰兒を癒すの圖』とルーヴル所藏の或名畫――彼女が昔親しい友と巴里に遊んだ時に感心して見たことのある名畫――の模寫が並んで掛つて居た。この他に『活體解剖者』もあつた。生理學者として活體解剖を行はうとした女が刀を持つ手を控えて小犬を胸に抱いて居る圖だ。燃えるやうな慈愛の心情と冷かな打算的の頭腦と、卽ち情と智と、此二者が暗鬪して段々と情が智を制して行く心理狀態を巧みに表はした畫だ。

ウヰルヘルミは眞理と博愛と美の使徒であつた。彼女は矢張り彼の室に飾つてあつた『解剖家』の模寫に依つて之を感じることが能きた。此畫では若い美しい娘の死體が裸にされて手術臺に横はつて居る。その上に體を屈めた老醫はメスを下さうとして躊躇する。自然の神秘を究めやうとして躊躇する。何故かならば目的に達する途は美の破壞によるの外にないからだ。

メラニーはウヰルヘルミの善性と偉大を感じた。少時して彼が入つて來ると、彼女は一目見て直ぐ自分の感想の誤らないことを知つた。彼は本領を失はなかつた、近頃のやうに總てのものが文明と敎化の羈絆から離れて了つた怖るべき時代に在つても。尤も此敎化は善く見てもくだらない上塗に過ぎなかつた。彼女の今過ぎて行くブラバントとフランダースの光景が彼女に此事を敎へた。

ウヰルヘルミは本領を失はなかつた。依然として人間の味力であつた。依然として平和主義者であつた。彼は曾てノーベル――ベルタ・フヲン・ズツトネルの事業を第一に推奬したノーベル――と親しく文通をして居た。ノーベルの公にした多くの論文や著書に於て、メラニーは曾て此ウヰルヘルミと同型の人物を認めたのであつた。今彼は慰安を齎す爲めに、燃えるやうな創傷に鎭痛油をふり撒く爲めにフランダースの戰場に向つて急行するところだ。周圍の幾百萬人が狂氣の如くになつて、二千年前エルサレムの街に響いたと同じやうに『彼を磔刑せよ！彼を磔刑せよ！』と怒號しても、彼は遂に本領を失はなかつた。

ブラバントとフランダース、此方面に彼女は行きたいと思つて居た――それは戰爭の慘狀の最も甚だしかつた方面である。最も多くの犧牲を出した方面である。ブラバントとフランダース、それは彼女の愛する鄕土であつた。

彼女は頰を火のやうにし、聲を顫はせ、純撲な言葉を以て心願を打明けた。又た自分の結婚生活と悲哀の物語を彼に聞かせた。彼は彼女の言葉を遮らずに、溢れるが如き同情を以て終ひまで耳を傾けた。それから彼ははつきりした何物をも貫くやうな眼で彼女を眺めながら言つた。

『貴女は御自分の志願を理解しておいでゞすか。』

彼女もやはり簡單に答へた。

『はい、理解いたして居ります。』

彼は頭を振つて言つた。

『いや、貴女は御存じない。甲羅を經て感覺の鈍くなつた看護婦ですら手術中に往々氣絕します。私は現に自分の臨床講義室でさう言ふ例を何遍見たか分らんです。』

『先生、それはよく解つて居ります。』と彼女が答へた。ウキルヘルミは語り續けた。

『戰線附近の陸軍病院は臨床講義室ではありません。其處で奈樣な經驗に出會ふか私自身も解らんのです。戶の外に大砲の音がしたり、擲彈や榴霰彈が赤十字旗の飜へる屋根の上へ飛んで來るやうな場合に、果して自分の度胸を頼むことが能きるかどうか、私にも解らんのです。』

『いゝえ、先生は大丈夫お能きになります。』彼女は確信に充ちて言つた。

彼は微笑した。

『まあ能きるだらうと思ふのです。しかし貴女は？失禮ながら氣隨氣儘にお育ちになつた上流の御婦人でありますから。』

メラニーは目をうつむけたが、しつかりした語氣で言つた。

『先生、私は何物にも打ち克つことが能きます。何物にも打ち克つことが能きると申しますのは、打ち克たうといふ決心があるからで御座います。打ち克たなければならないからで御座いますす。フランダースとブラバントを愛するからで御座います。戰地で負傷した方々を助けたいと思ふからで御座います。』

又た彼が故障を唱へた。

『奧さん、よろしいですか？現代の戰爭では一時間の中に數百人の重傷者が手術室に連れて來られることもあります。貴女は此等の數百人の苦しい叫聲に堪えることが能きますか？此等の中から手術するものと手のつけられないものとを撰り分けることが能きますか？』

『能きますで御座います。』

『時によつてはコロロホルムを使はずに手術する場合がないとも限りません。一時に大勢の手術をするのですから麻醉劑が思つたよりも早くなくなる場合がないとも限りません。患者の苦痛を承知して其生きた體を切らなければならない場合がないとも限りません。奥さん、貴方は之に堪えることが能ますか?』

『そのやうな場合には、先生が患者を助けやうと思召して苦痛をお與へになるのだと考へまして、先生の我慢遊ばす丈は私も我慢いたします。助けやうと思ふ心は私も同樣で御座いますから。』彼は起ち上つた。

『宜しい、解りました。』と彼は言つた。『それでは奥さん。今日の午後四時にツァイゼル街の私の臨床講義室へ被入して、看護婦長に赤十字看護婦の制服をお貰ひなさい。此名刺に一寸書いて置きました。これをお持ちになれば解ります。』

彼は既う戸口に來た。彼は大勢の來客を待たせて置いて彼女の爲めに大事な時間を可なり長く費したのであつた。

『私は明朝八時半にポツツダム驛から救護班と一緒に出發しますから。』

『はい。八時半で御座いますね。』彼女は手を差延べた。彼は實意を籠めて握手した。

此時から彼女の名は イレネ看護婦となつた。即ち平和の女神の名を採つたのである。さうして

今彼女は彼と同じ列車でブラバント、フランダース方面に向ひつゝあつた。彼女は彼の知遇に報ひるだけの働きをする覺悟なのだ。

第三章　水邊の舊都にて

『ブルッセル、風雅の都、第二の巴里が今では陣營のやうだ』と、イレネ看護婦が思つた。彼女はウヰルヘルミの側について停車場を出、取引所の方へ廣小路を横切つて歩いて居た。風に飜へる黑と白の旗や黑白赤の三色旗。歩道を蔽ふ兜帽と鼠色の外套。鼓手と喇叭手を先に立てゝ行進する軍隊。

深い思ひに沈みながらイレネ看護婦はウヰルヘルミと並んで、曾て賑かな忙がしい人民を以て充された此街を歩いた。往來近く大理石の卓子を出して客を呼んだカフエーはがらんとして居た。取引所の前には絹帽を冠つた忙しさうな人々が市況の話をして居たものだが、今はその姿も見えなかつた。白耳義と其首府の爲めには最早一の市場もないのだ。

國王も軍隊もアントワープの周圍の要塞から免れて、今は海岸やイープルの附近やイーゼル河の岸で英佛軍と協力して戰つて居た。市街は外國人の手に歸して了つた。大鼓の音、喇叭の響。衛

戍兵が市役所と商業會議所に向つて行進して居た。國王の居ない王宮や裁判所の前を練り歩いて居た。

『裁判！公正！』イレネ看護婦はウヰルヘルミと一緒に軍隊の後に跟いて、世界に有名な裁判所の大建築が立つ臺地まで來ると心の中で斯う叫んだ。征服者の巨砲が臺地の上から彼女を睥睨し、その砲口が市街とブラバントの平野を瞰制した。此等の砲は射擊の準備はしてあるが、今は沈默して居た。

イレネ看護婦は考へて身顫ひした、しかし一言も口に出せなかつた。彼女はウヰルヘルミに向つて自分の考へを表白する勇氣がなかつたのだ。偉大なる外科醫も亦た此光景を見て默つて居た。悲哀の沈默。ブルッセルに對する復讐……曾てロージーに加へられたやうに、又た東普魯西に加へられたやうに……心を傷ましむる光景は何處へ行つても同じだ。

裁判所の前に獨逸の番兵が一人立つて居た。バヴリヤの制服を着た若い歩兵だ。スタルンベルグ湖に近いポッセンホーフエン出身の氣だての好い青年で、自分が實際如何なる土地に來て居るか、又た何故其處に立つて居るかといふことを彼は少しも知らなかつた。彼は獨逸赤十字の制服を着た婦人と、形の好い外套に絹帽の紳士を見て、相好をくづして微笑した。必と地方の外科醫だらう。彼はそれだけしか考へなかつた。

ウキルヘルミは葉巻入からハヴナを一本出して此青年に渡した。すると彼は一寸考へ込んだ……彼はミューニッヒの兵營で、又たマルスフエルドで言い渡されたことを想ひ出した。番兵は誰にも口を利いてはならぬ、物を貰つてはならぬ。しかしブルッセルでは、戰地では？別だ。それに獨逸の新聞は種々の軍隊慰問事業を毎日報導するけれども、兵士に取つては葉巻が珍らしいのであつた。戰地には煙草を吸ふ兵士が何百萬も居るのに、十萬本や二十萬本の葉巻が何になる？

熱心な感謝の辭を以てポッセンホーフエン出の番兵は貰つた葉巻を薄紺の制服のボタンに挾み、又た銃を肩にして往きつ戻りつ歩き始めた。彼はもうそれつきり紳士と婦人のことを氣にしなかつた。婦人は獨逸赤十字の看護婦、紳士は醫者、それだけで充分であつた。それに守備兵の交代を知らせる軍樂の音が近くに起つた。これが若い番兵の頭腦を司配する主なる要件であつた。

ウキルヘルミとイレネ看護婦は臺地の緣へ行つた。陽は澄んだ空に輝いた。脚下に横はるブルッセルの街には獨逸の國旗が凱歌を奏するやうに飜へつた。國王と后は國外に放逐されて居る、人民は飢餓と貧苦に迫つて居る、獅子の勇を以て惡戰苦鬪した軍隊は、今は悉くイーゼルの黄い波の彼方に退却して了つた。イレネ看護婦の眼はパノラマのやうな市街の上に彷徨つた。足許に横はる廣い街區、誘惑と奢侈と歡樂の都、巴里を除けば廣い歐羅巴に比べるものゝなかつた美しい都。それが今は！

彼女は自分の體を支へる爲めに欄干に手を置いて其石を摑んだ。ウキルヘルミは彼女が非常に感動したのを視た。

『奥さん、奈何しました？貴方は最早泣いて被入つしやるんですね？』

『此樣にしなけりやならないんでせうか？先生の御意見は如何で御座います？』

『奥さん、私には、もう意見はありません。』

『先生に御意見がなかつたら、世界中で誰が意見を有つてるで御座いませう？』

『當節は誰も意見を有ちません。』

『誰も。ほんとうに先生のおつしやる通り、誰にも意見がないので御座いますのね。』

彼女は殆ど嘲けるやうな微笑を洩らした。ウキルヘルミはそれを認めた。

『貴方は笑つて居ますね？』

『先生、私は戰場の勇士の事を考へて居りました。あの人々は自分で勇士と思つて居りますけれど、實際は奴隷で御座います。』

『奴隷とおつしやるのは何ういふ意味です。』

『無理に押付けられた意見の奴隷と申す意味で御座います。』

『成程、奥さんの御說の通りかも知れません。』

イレネ　看護婦の眼は稍久しく脚下の市街を凝視した。終に彼女はウキルヘルミに向つて言つた。

『先生、歸ると致しませう。もう此處で何もかも解りましたから。』

『先生、私が誰のことを考へて居るかお解りですか？』歸りがけに彼女が訊ねた。

『さあ、誰ですか？』

『ゲーテの事で御座います。』

『ゲーテ？何うしてゲーテの事を？』

『ゲーテにはブルツセルと其歴史を詠じた不朽の詩の本が二冊御座いますから。』

『さうでしたな。私は其事を想ひつきませんでした。』

『私は歩きながら絶えず考へたので御座います。和蘭が未だ自由の運動を起さない以前、嚴しい顔をした軍人が此街路を歩いて居ました時の事を。それからゲーテやエグモントやクレールヘンの事を考へて居りました。群衆を指揮してエグモントを牢屋から逃がさうとしたクレールヘン。「おゝクレールヘンよ、卿は眞の男兒なりしか……然らば卿に謝すべき事あり、國王には求めがたき此賜……自由てふ此賜。」と申す一節が御座いますのね。』

『あゝ奥さん、自由、それは空想です。虚殺者が幅をきかして居る今日、何事も唯だ武力によつて定まる今日、自由などを語るのは空想です。』

『先生、私に空想を許して下さい。此のブルツセルで私に唯一の慰藉を與へて呉れるのはエグモントの信念で御座います。』

『どういふ信念ですか。』

『エグモントが絞首臺に上る時に有つて居た信念で御座います。「我も亦名譽の死に就かう。我は自由の爲めに生き、自由の爲めに戰ひ、今は自由の爲めに死す。我は自由の生贄として吾一命を捧ぐるなり。」此信念で御座います。ブルツセルとエグモントとベートーヴエン、自由の音樂を造つたベートーヴエン。それからゲーテの戯曲。此等は皆互に離すことの能きない觀念かと思はれます。』

『御尤もです。物も人も土地も、之を聖別した人が死んで、選民の一人であつた其人が死んで、始めて吾々に取つて神聖なるものとなるのです。斯ういふ人に依つて聖別せられたものを、破壞したり攻擊したりするのが惡い。何故ならそれは人間の理想の一となつたのでありますから。貴女のおつしやることは御尤もです。貴女が私の注意を促して下さつたので、始めて自分の悲哀の眞の原因が解りました。……ブルツセルとゲーテ。『エグモント』が始めて作られてから、此二者は互に離すことの能きない觀念です。あゝ、貴女の御説は實に御尤もです！』

イレネ　看護婦は默つて居た。彼女はウキルヘルミの爲めに之から働かうといふのだ。そのウキルヘルミが自分と同じ感想を有つたかと思ふと實に嬉しかつた。

少時して彼女は又たブルツセルに就て語つた。征服されて釋放の時を待つブルツセルに就て語つた。さうして彼女は又たゲーテを引用した。

『いつの頃よりかエグモントは、斯く孤獨とはなれる——廣き世界に、斯くまで淋しき孤獨とはなれる。爾が感情の鈍れるは、得意の爲にはあらずして、疑惑の爲め。爾が深く賴める國王の正義は、今如何。さながら相思の情に似たる、攝政の友誼は今如何。兩つながら夜の流星の如く、消えて去れるか。兩つながら去つて、爾獨り死の旅に上れるか。オレンジは如何せしぞ。味方を率ひ、應援のなさゞるや。人民は如何せしぞ。潮の寄する勢を以て、義人の急に赴かざるや。

『我を圍める此墻壁、數多ある勇士の眞心を隔つるな！我が眼光の一閃が日頃傳へし武勇の靈感彼等の猛き心より發して我に反り來よ！おゝ！我勇士が集ひ來るわ！來るわ！來るわ！我傍に！眞心澄るゝ彼等が祈禱、天に通じて奇蹟もやあらん。まつた神靈天降りて此我を救はずば、勇士の手には玉散る劍、無明の闇を破る槍！戸を蹴り、閂を拂ひ、一擊の下墻壁頽れ、エグモントは再び自由の身。たち出でて、東雲の空を仰がばや。』

イレネの頰がほてつた。エグモントの獨白の朗誦が熱誠を以て彼女を充した。

『先生、ブルツセルを滅びさす譯にはいきません。どうあつてもブルツセルは自由を取戻さなければなりません。ゲーテに依つて聖別された土地で御座いますから。』

ウキルヘルミは淋しげに頭を振つた。

『私は生理學者です、又た唯物論者です。』彼は少時呻吟してから言つた。『それでも私には世界の歴史が破壞の道程を辿るといふことが解ります。ブルツセルの將來は何うなりますか。古代の民族は皆立派に滅びました。ねえ奥さん、これが運命です。トロイは滅びました。カルセージも羅馬もビザンチュムも。』

『羅馬は不滅です！』

『さう、或る意味に於ては。「とこしへに詩に生くるものも吾人の代には死せざるべからず」、これは大詩人が吾々を慰撫した言葉です。』

ウキルヘルミは一寸默つて立つて居た。

『ピラタスは「眞理とは何ぞ」と叫びました。私は貴女に訊ねませう、世界の歴史に於て果して何が不滅でありますか？』

第四章　悲しみに沈める都

ブルッセルに着くまでは、ウキルヘルミの救護班を載せてフランダースの戰場に向ふ急行列車は滯りなく走つたが、其處へ着いてから手間取つた。東部から西部へ輸送する莫大の軍需品が病院列車の進行を妨げた。塹壕線へ軍需品を供給する必要上、負傷者の手當を後廻しにしなければならぬ。瀕死の重傷者も救ひの手の來るのを暫く待つて居なければならぬ。

ウキルヘルミは獨逸の總督を訪れて、成るべく早く行けるやうにして呉れと歎願したけれども、救護班の列車は僅かに數哩走つたばかりで又た停車した。其處で新規の兵士を滿載した車輛の通過するまで待たされた。大西洋や北海の波に呑ませる爲めに、英國戰鬪艦の巨砲や佛國野砲の餌食にする爲めに此等の兵士を送るのだ。イレネ看護婦は此苦惱だけは免れるだらうと思つて居たのだが、汽車の中で始終考へて來た事は一々實現して、彼女の眼に映じ耳に入るのであつた。

曾つてデイールの靜かな流れに近く一つの都が榮えた。彼女はブラバント州の何れのものにも勝れて美しい都であつた。彼女の頭の上を通り越す『時代』の行列も彼女を滅ぼすことが能きなかつた。さうして文化を以て名高い彼女は史上の神聖な都となつた。彼女は南ブラバント州の飾であつたのだ。デイールとルーベルを結びつける運河、楡やポプラの蔭で夢みて居るやうな運河の水が破風造りの屋根を映して、古への榮華を語つた。貂の毛皮をつけた天鵞絨の長衣を着流して、町の奉行等は壯麗な廳舍に歩を運んだであらう。さうしてルーヴーンの市政を議したことであらう。靜かな朝、聖ペテル寺院の彌撒に參ずる町の美女は、鏡なす綠の水に己れの姿をうつして、或は結ひたての髪の美しきを誇り、或は新衣の袖の輕きを喜んだことであらう。

此處で著名な學者達が心ゆくまで世界の始めと終りの問題を論究したのであつた。何故ならルーヴーンの大學はボーローニヤ、パドウアの二大學と肩を比べた位で、路易十四世の戰爭が獨逸を荒した頃には和蘭で最も有名な學府であつた。ルーテルの時代には恐らく世界で最も有名な學府であつたらう。イレネの傷ましい追想の種となつた此都は今は永久に破壞されて居るが、その歴史は千年の昔に溯つた。『歴史』の書物が繙かれない以前に於てすら、ルーワンは偉大なる都であつた。此地方が一帶に大森林であつた時分、ウエンド種族の漁師小舍が將來の伯林の位置に立つて居た時分、それは既に偉大な都であつた。

第十四世紀に於てルーヴーンはブラバントの殿樣と謳はれた豪商連の搖籃であつた。其頃商社の

活動によつてルーヴーンは白耳義に於ける、歐羅巴に於ける、又た世界に於ける重要な地位を造つた。さうして何百年間此地位を保つて來た。寶の盒にも類ふべきルーヴーン。窈窕たる淑女にも類ふべきルーヴーン。特殊の藝術の象徴たるルーヴーン。其處には大洋の光線が渺茫たる綠野の光線と融合する——ルーベンスとレンブラントとヴンダイクとジエームス・マリスの色覺を創造した光線それは決して他の土地に見ることの能きない光線である。

イレネ 看護婦は唯一人市街の廢墟の中を歩いた。彼女は心を傷ましむる光景を豫期しては居たが、斯程までに戰慄すべき光景であらうとは思はなかつた。何といふ怖ろしさ！何處を見ても眞黑になつたよろ〳〵の壁、何處を見ても荒跡と灰！

最後の瞬間に彼等が過を知つて、市廳の建築物を——ゴシツク建築の傑作を——砲火から救つたにしても何の役に立つか？中世時代の精神を象徴した此傑作は曾てあの廣場に、種々の建築物の間に王者の如く聳えたのではないか？それが今は堆き廢墟の中央に立つではないか？今となつては血に汚れた地面から全く姿を沒したよりも、却てあのやうに天に訴へる姿が悲慘ではないか？ルーヴーンの大學校と圖書館は破壞されたではないか？聖ベテル寺院の外壁に獨逸軍の擲彈が打開けた裂孔は神に向て號泣して居るではないか？一時衝動的に恥を感じた彼等が聲を大にして事實を否定したにも拘はらず、ルーヴーンは今や一の空名に過ぎないではないか？過去の榮

華の痕跡に過ぎないではないか？

燃えるやうな眼を以てイレネ看護婦は市廳の前の廣場を眺めた。その大建築は今まで如何なる惡魔が地上を横行して居たかも知らない大きな初々しい眼で——恐怖の餘り涙も出ない眼で——賴りなささうに彼女の顏を見守るやうに思へた。

荒跡と灰、何處を見ても荒跡と灰の外に何もなかつた。彼女は狂氣と誤解が意外の大事件を出來した恐ろしい夜、兵士や市民が同士打して其結果遂に火焰の海が世界無比のルーヴーンを呑んで了ひ、獨逸軍の擲彈が數世紀前の敬虔なフランダース藝術の產物を僅々數時間に悉く煙と化して了つた夜、その夜の光景を目擊しなかつたことを如何に感謝したであらう。

平和が特殊の記標を印した街、勤勉にして善良なる市民が崇高い邸第を建て連ねた街、その街は悉く破壞されて了つた。それ〴〵繁榮と快適の象徴であり、泰平無事の表號であつた邸第が悉く破壞されて了つた。而かも此等の廢墟は凶の最も凶なるものであらうか？

イレネ 看護婦は身顫ひした。今年の夏の末にフアルケンスタインに居た頃ルーヴーンに就て讀んだ事柄を想ひ出して彼女は身顫ひした。廢墟の石材にはまだ市民の血がついて居た。恐怖の念に充ちた彼女は女の泣く聲を聞くことが能きた。子供の哀れな祈禱や獻歌泣きを聞くことが能きた。つい半年前には此町も此國も盤石の如くに安泰と思はれた。その頃誰が今日の事をルーヴーンの

市民に豫言し得たであらうか？

此等の市民に何の罪がある？曾て遠い海の果までも勢力を及ぼした學者、商業家、工匠、製造家、その後裔たる市民に何の罪がある？**ブラバント**から世界各國の市場へ物貨を送り出した商業家、その後裔たる市民に何の罪がある？此等の商業家は何百年の間**フランクフヲルト・アン・マイン**の定期市——歐羅巴の人口の一半を引付けた定期市——に出て來たのであつた。其一人に罪があつたにもせよ、その爲めに彼等の都を灰燼と化するのが至當であらうか？

イレネ 看護婦は判決を下さうとはしなかつた。戰爭は戰爭である。さうして戰爭に於ては總ての者が正當である。總ての者が？いや、詮する所正當なのは强者のみだ、侵略者のみだ、弱者を虐げる權利を僭取する人のみだ。さうして若し弱者が其權利を擁護しやうとしたら何うなる？所詮戰爭と權利は絶對に相容れない二つの觀念ではあるまいか？伯林の當局者が説明した如く、强力が權利を蹂躙する場合には、畢竟其處には何等の權利がないのではあるまいか？果して然らば誰が正當で誰が不當であるか？**イレネ**看護婦は之を斷定しやうとはしなかつた。彼女は斷定することを好まなかつた。彼女は惱めるものを救はんが爲めに來た一婦人に過ぎない、それだから彼女は美しい都の破壞の跡を見て泣いた。

今度の戰爭は惡が魔之を呼び起して其責任を他に轉稼したのである。さうして戰爭の公報は常に矛盾して居る。**ルーヴーン**に關するものも亦矛盾を免れない。敵は攻擊を企畫したが抑壓されたと一方では言ふ。兵士が間違つて味方を射擊したのだと他方では言ふ。絶望と恐怖の裡に起つた暗夜の出來事を、何週間も經つてから誰が判定することが能きやうぞ。**ルーヴーン**の全滅を至當とし、幾千の住民を有罪と斷ずるだけの勇氣が誰にあるか。さういふ事をするだけの氣力が誰にあるか。誰が斯くの如き告發を敢てするか。それは彼女ではない。彼女の任務は他にある。敵味方の別なく自分の癒し得るものを癒し、自分の助け得るものを助けるのが彼女の任務である。此處で彼女が正否を議することが能きやうか？『人を議すること勿れ、恐くは爾曹も亦た議せられん。』此一句が**ルーヴーン**の大きな辻に響き亘つた。彼女の心の中に響き亘つた。

彼女は無情の天を眺めて其涙を乾かさうとした。それでも彼女は色々の感想を以て自身を苦めた。**リエージュ**や**ブルツセル**の沿道で目擊した慘狀も此町の禍災に比べたら何であるか？**ルーヴーン**は罪なくして殺戮の被害者となつたのだ。何物かゞ累を成したとすれば、それは美と藝術とに外ならぬ。剪毛者の前に立つて物言へぬ子羊、何事も知らずに屠所に曳かれた犢、彼女には**ルーヴーン**が斯くの如く思はれた。

ルーヴーン！ルーヴーン！ルーヴーン！ 拷問を受ける人の叫聲のやうに此名はいつまでも忘れることが能きない。それは**トロイ**と同じく不朽である。棘の冕を戴ける愛らしき**ルーヴーン**、曾つて

白耳義の都市の中で最も美しい冕を戴いて居たルーヴーン！……

神に呪はれた魔王は一夜兵士を狂狼に化した。此等の狼は怒り狂つて同士打ちを行つた。あげくの果には寺院からも會館からも赤い焔が燃え上り、神聖な柱も古代の文書も跡方なく破壞されて了つた。さうして到る處に『ルーヴン滅ぶ』の悼歌が響いた。曾てウブサラの銀礼本、もしくはハイデルベルヒ城に珍藏せられた繪入歌集の美しい一頁のやうであつたルーヴーン、それが今は『歴史』の書冊に記されたる一の名に過ぎない。

ルーヴーンとハイデルベルヒ　城。ルーヴーンが獨逸軍に依つて全滅せしめられたからは、獨逸人は再び涙を揮ひ拳を握つてオテンワルドの阪を指す權利があるか。古城の址を指す權利があるか。イレネ　看護婦は再び天を仰いだ。彼女は今や斷定を下したのである。否。斯くの如き權利は最早存在しない——愛すべきルーヴーンが亡びて了つた以上は。

第五章　廢路に沿ふて

ウキルヘルミの野戰病院が設けられた。其位置は戰線から幾らも離れて居らぬ。運河の縱横に通ずるフランダースの綠野が黃色い沙山に連なる處が戰線である。此沙山はイーブル町とイーゼルの川口を擁して懷しげに鋼青色の海の方へ腕を伸して居る。戰ひは酣であつた。一人の鐵の如き意志が其處に兵士の長壁を築いた。不可能事を可能ならしめて其鐵腕をカレイから海峽の對岸に伸さうといふ決心である。しかし如何に强固なる意志も、如何に嚴酷な命令も、海そのものが敵に與して居る以上は何の役にも立たない。

イレネ　看護婦はまだ負傷者を待つて居た野戰病院にぽつねんとして幾時間かを過した。病院は生子鐵板で造つた長い一階建のバラックで、沙山の上に立つて居た。北海から烈しい秋の風が吹いて來ると、弱い建物が今にも壞れさうにめり〳〵いつた。

負傷者の到着するまでにイレネ看護婦は充分暇があつたので、白耳義の旅日記を書き續けること

とが能きた。此日記の中に彼女は罪に汚れた澆季の世を心ゆくまで罵倒しやうとしたのだ。既に多くの頁が彼女の美しい筆蹟で埋められてあつた。さうして其しつかりした字並びには少しも筆者の深い感慨の痕が見えなかつた。又た彼女のペンが巨砲の鳴動を伴奏として紙面を走つた。

アントウエルプに警告す、

『逃げよフランダース とブラバントの士女！歡樂と蓄財に耽りたる爾曹の過去を神が想起し給ふ日は來れり。見よ、爾曹が堆き黄金の上に眠れる間に、神は騷亂の翼に乘りて來り、惡魔を呼び起して兇器を組立てしめたり。此等の兇器は地獄の火を以て巨彈を空中に發するなり。フランダースの士女よ、都城を圍める鐵壁を誇り、「復讐」が平和の褥に埋伏せるを知らざりし爾曹よ、之に意を用ひよ。饗宴の席に薔薇と百合の花を撒けるは僞善なりき、怨恨を心に包めるもの〻所爲なりき。警戒せよ、フランダース の士女！ 爾曹の鐵壁は崩壞せん。神の日は近けり。神の業は恐るべし。「驕慢」と「虚榮」は爾曹の耳に「難攻不落」を呼きたるも、怒りの魔は焔の劍を持し、電光の眼を輝かせ、雷の如く怒號しつ〻敵の先登に立つべし。

『フランダース とブラバントの士女よ、之を警戒せよ。怒りの魔は翼ある咨を穿ち、虚言と言へる兩刃の劍を汚れたる手に拔き持ちて、正午の陽に向つて南の方より來らん。彼は北極の風の如くに

爾曹を凋殺し、眠れる羊群を襲ふ狼の如くに爾曹の都邑を襲はん。

『フランダース とブラバントの士女よ、爾曹の耳は聽かざるか。瀝青と硫黄と火と疫毒とを體内に含める怖るべき猛禽は、翼を搏ちつ〻奈落の底より起りて無月無星の天を翔るにあらずや。

『闇夜に眩光生じ、爾曹が邸宅の柱に火の噴く聲あり。鐵よりも堅き猛禽の爪より雷電の如くに落つる火の塊りを見よ！

『地獄の禽は爾曹の頭上の天にあり。爾曹フランダース の士女に神助あらん事を！ 爾曹の國は荒廢して……』

イレネ 看護婦の日記は此處で中絶して居る。此日記は軍隊が北海の汎濫から逃れ去つた後、病院に發見せられたが、水の爲めに臺なしになつてゐた。彼女が此文章を書いてゐた時に、イープル町とイーゼル運河の方面から負傷者を搬ぶ自動車が始めてウキルヘルミ の野戰病院に到着したに違ひない。

第六章　然らば先導せよ

イーブルの巨砲の音が沙山の脊に傳つて來た。もう何ケ月にもなるが此轟音は止まない。フランダースの戰はいつまで續くか解らぬ。二頭の狂犬のやうに兩軍は互に對手を摑まえて放さない。どちらも負けない、どちらも後へ一歩も引かない。胸と胸を突き合せて彼等は戰鬪を續けて居る。國土は血に浸され、幾千の死傷者が綠の野を蔽ふた。堀の中に死骸が積重なつて、鮮紅の水が岸から溢れるまでになつた。しかし退却は行はれなかつた。死傷者の數は刻々に殖えて行つたが、「一人」が鬪場に於ける虎の如くに彼等を驅つて戰を繼續せしめた。『カレイ とダンカークを占領せざるべからず……』しかしそれは無益であつた。

「一人」をして其鐵腕を海峽の對岸に伸ばさしめんが爲めに、カレイとダンカークを占領しなければならないのである。獨逸の國力は將に盡きんとして居る。それが何だ！ カレイとダンカークを是非とも陷落せしめなければならぬ。リースとイーゼルの兩河に挾まれるイーブルが史上に類例のない此大激戰の中心であつた。此無謀の擧を遂行する爲めに獨逸は既に參謀總長に命を捨てさせた。

攻擊は三度企てられて三度失敗した。さうして十一月の或日曜にイーブルの周圍の巨砲が再び轟々と鳴り出した。砲聲を耳にする毎にイレネ看護婦は驚愕した。大砲の音が耳に慣れたと言ふものもあつたが、彼女は少しも之に慣れなかつた。彼女は顫えながら轟音を聽いた。さうして恐怖の念が刻々に募つて行つた。

イーブルが敵の砲火を受けるのは之で四回目であつた。如何なる犧牲を拂つてもイーゼルを越えなければならぬと言ふのが獨逸軍の決心である。憐むべきイーブルよ！ 爾は何故に世界の放火王の進路に横はるのか？ 彼はフランダースとブラバントの村落や都市を踏みにじつたと同じやうに爾をも踏みにじるのではなからうか？ 自分の邪魔になるものを悉く踏みにじるのが彼の決心であるから。

イーブルの周圍には、塹壕が土龍の通つた道のやうにフランダースの綠野を貫いて、海邊の黃色い沙山の方へ何哩も續いて居た。此等の塹壕は既にディーズミユードとニーウポールトに達して居た。その中に根據を構えた士卒は、大洋の水が今にもあたりを泡立つ冷たい墓と化して、自分等を永劫の沈默の裡に葬らうとして居るとは感付かなかつた。フランダースの平野を人間の體に譬へれば、此等の塹壕は宛かも癌腫のやうであつた。又たフランダースを永久に繁茂すべき木に譬

へれば、此等の塹壕は宛かも其木の堅い心に食ひ入る虫のやうであつた。

しかし海洋の波濤は誰も抑制することが能きぬ。幾百人の命を抛たしめる權利ありと自信する人も之を如何ともすることが能きない。海洋の波濤は『永劫不可測』の命ずる所にのみ從ふのだ。**イスラエル**人を紅海に導いて埃及人を覆沒した『彼』の命ずる所にのみ從ふのだ。**フランダース**の內部に工兵が築いた此等の塹壕は一種の住居であつた。家屋であつた。此癌腫は荒療治を加へないと、人體の癌腫のやうに益々內部を侵して行く。故に神は大洋に命じて此鄕土を綠の腕に抱擁せしめやうと待ち構へて居た……北海の波濤は天の最後の救ひである……制服を着た無帽の**イレネ**看護婦は病院を出、沙山の脊に立つて市街の方を眺めた。彼女は人家や尖塔を明かに視ることが能きた。市街の上に砲煙が掛かつて居た。

天空には大雷雨が荒れ狂つた。無情な頭腦を有つた或一人が野心に驅られて破廉恥にも此大雷雨を惹起したのだ。誤れる智慮と人類に對する憎惡心から此大雷雨が生れたのだ。それは夏の穩かな西風が濕りを待つ**フランダース**の綠野に送る雷雨ではなく、『地獄の王』が自分の傀儡たる腹心の家來を集めて目論んだ雷雨である。

西の海から風が起つた。それが**イレネ**看護婦の髮を亂し、彼女の眼に砂を入れて眼を視えなくした。之に吹きつけられる焰と煙は狂へる流星が一緒になつて惡魔のダンスをやつて居るやうに

見えた。彼等は冥土の花野に遊ぶ小禽の如くに翔り廻つた。城の鐘が巨砲の音に和して鳴り出した。**イレネ**看護婦は砲兵が一寸沈默した時に其不吉な響をはつきり聽くことが能きた……**イープル**の町が四回目の火災を起した。

初秋の夕闇が徐々と沙山の脊に上つて、遙か彼方には海岸を打つ波の音が、『今行つてお前を抱えてやるぞ……待つて居ろ……待つて居ろ……今行くぞ、今行くぞ……辛抱しろ……辛抱しろ！』と言ふかの如くに聞えた。

紫の陰影が段々と地平線を蔽ふて、天空が次第に暗くなつた。月も星も見えなかつた、唯だ破壞の焰ばかりが見えた。**イープル**は破壞された。

イレネ看護婦は西の方を凝視た、其處には水蒸氣と砲煙の海、火と焰の海が、最終審判の光景を描く默示錄の一章に取材した繪を見るやうに渦まき昇つて居た。

彼女は叫聲を洩した。幾百年を經た城の塔が爆破された。中世時代には**イープル**市民の出陣を促し、自由と平和の時代には間暇と勤勞の時刻を報じた塔の鐘、鋼の舌を以て幾代の人民に寄語した塔の鐘が今落ちて鎔けて流れた。今まで塔のあつた位置に當つて、無數の火花が空中に飛散した、恰かも**ジユース**神が**オリンパス**の山上から人類滅亡の合圖を與へるかのやうに。

イレネ看護婦は絕望した人のやうに兩手を握り締めた。雷雨に鞭たれた沙煙の柱が彼女の前に

動いて行つた。怒りの神が斯くの如き形に現じて選民に沙漠の路を示すのか。怒りの神が再びイーブルの前面を進みつゝあるのであらうか？……憂愁と恐怖に我を忘れながら幾分狂喜を感じて彼女は歌ひ始めた。巨砲の雷鳴を伴奏樂として狂へるデボラーの如くに彼女は歌つた。

『心安くあれ、イーブルの金髪の女達よ。切妻屋根高く市場に沿へる家々の戸口の際に、或は細き硝子欽めたる窓の背後に座せる女達よ。軟かき天鵞絨の臺に俯向きてレースを織れるイーブルの女達よ。爾曹の織き手はフランダースの國中にて誰よりも巧みにレースを織り得しか……

『破風造りの古風の家に、平和の町の心長閑けく、幾時も休まず倦まず働ける爾曹が、蜘蛛の絲の如く纖美なる花嫁着に何をか織込める？

『爾曹が花嫁のヴェールと綱襠に織込めるは、信と愛の情緒にはあらざりしか、淨き望と堅き契にはあらざりしか。』

『イーブルの女達よ。爾曹は吾眼より消え失せたり。爾曹の家の壁は硝煙に焦げ、彈雨に裂け、夜の風小窓に吹き入り、天の星破れたる屋根より窺ふ。

『さはれイーブルの女達よ。爾曹の榮譽は存す、爾曹の産業は存す、爾曹の信仰は存す。互の胸が同情を以て鼓動し得る限りは。』

黑い雲がイレネ看護婦の頭上に集つた。其雲が開いて冬の白い棺衣を落した。雪片が――白い

軟かな大きな冷い雪片が落ちて來た。纏てフランダースの綠の野は雪に蔽はれて了つた。

第七章　絶望の士卒

『進め！速歩！驅歩！突貫！』中隊長が聲を嗄して叫ぶ。イーゼルの岸には同一の狂暴な號令を掛けて居る者が幾人あるか分らぬ。彼は其一人である。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

猛獸の如き彼の血走つた眼は眼窩から飛び出るかと思はれる。彼の胸には二週間程以前に授けられた鐵十字章が光つてゐる。彼は右手に指揮刀を振り、左手にピストルを掴んで居る。部下の兵士の中に臆病の擧動を示すものがあつたら一擊に射殺さうといふのだ。指揮者は感覺を失つた痴人であるが、部下は之と異つて、動もすれば敵彈の雨の中に突擊することを躊躇する。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

どうしもてもイーゼルの渡河を今一度試みなければぬなら、六個聯隊が前進を始める。軍旗は飜り、喇叭は響き、太鼓はとゞろと鳴り、蠻人の喉から出るやうな叫聲と喚聲が響き亘る。丁度

文明人の一團が突如として狂鬼の群と化したやうだ。一人が躓き又一人が倒れ、遂に數人が地面の上でもがく。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

軍樂が銃聲と砲聲を壓して聞えないやうにすれば可いのだ。しかしそれは能きない。それを試みるのは狂である。向ふの岸にはづらりと大砲が並んで居る。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

一人は餘り叫んで啞のやうになつて了つた。他の者も聲が出なくなつた。少尉が中尉に代り、軍曹が少尉に代つて無謀な號令を傳へる。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

冷たさに感覺を失つて何週間も水に浸つて居た兵士が塹壕の中から出て來る。彼等は殆ど動くことも能きない。それでも何とかして驅け出さうとする。

『速歩！驅歩！突貫！』

彼等の頭の上から火の雨が降つて來る。背後には眼の血走つた將校がピストルを握り、胸に鐵十字を光らせて居る。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

兵隊は野を驅けて行く。數百門の大砲が兵士の集團に向つて死を振り撒く。幾千人が砲彈の爲めに薙ぎ倒される。眼の血走つた指揮官はピストルを手に握つたまゝ倒れる。彼は死骸の山の中に他の無名氏に交つて横はる。又た一人の指揮官が狂氣の如くに怒號する。

『進め！速歩！驅歩！突貫！』

『フラー！フラー！フラー！』

『神の爲め！國王の爲め！祖國の爲め！』

『神と共に！神と共に！』

幾千の聲が木靈の如くに之を繰返す。

『神と共に！神と共に！』

フランダースの野に轟く砲聲が不敬の叫聲を聞えなくする。

『死』は前進する兵士の列から大なる收獲を收める……肉のない頭顱と骨ばかりの腕を有つた刈手は、新たに研いだ鎌を力強い手に握つて、刈つて刈つて刈り倒す。

『伏せ！伏せ！伏せ！』

此號令が口から口に傳はつて、一時安堵を齎すやうに見える。生殘者は倒れた戰友の死骸の傍

にがつくりと横はる……

敵の砲擊が休む。彼等は再び『驅歩！突貫！』の號令の下るまで彈藥を節約して居るのだ。號令が掛ると、運河に向つて再び狂暴な突貫が始まる。敵の砲兵は沙山に遮蔽された絶好の陣地に據つて居る。しかし觀測將校は小さな鏡を用ひて敵の行動を一々觀測することが能きる。

『驅歩！突貫！』

再び縱隊の兵士が息をもつかずに前進する。

『驅歩！突貫！』

ピストルを握つた指揮官が彼等の背後に立つて居る。

榴霰彈が唸る。運河の對岸に据えられた大臼砲が猛獸のやうに咆哮する。海風に飄られる鷗のやうに、時ならぬ春の霰のやうに、彈丸が闇黑の空を横切つてひゅう〳〵と飛ぶ。

『驅歩！突貫！』

『フラア！フラア！フラア！』

兵士は怖ろしい死のコーラスを歌ふ。『萊因の見張』それは亡び行く者の最後の歌曲だ。

擲彈の旋風に逆つて第六回の突貫が始まる。

『伏せ！……伏せ！……』

今突貫を始めた兵士の中で此號令に從ひ得るものは僅かに三分の二しかない。荒原を過ぎる蝗の群のやうに、彼等は疲勞して地上に倒れ、殆ど呼吸し得ない胸から低い唸聲と嘆息を洩す。彼等は最早背嚢や銃劍の重みを感ずることさへも能きない。彼等は死者と傷者の間に挾まつて困難な呼吸を續けながら横はる。彼等は偶然に倒れた場所に死人の如く横はる。しかし何とかして再び起き上がらなければならない。

『驅歩！突貫！』鋼鐵のやうに無情な拷問者の聲が叫ぶ。

喇叭の響と太鼓の音が空氣を顫はせる。

『橋梁の方面に突貫！』

橋が一つ殘つて居る。敵が遁げる時に慌てゝ破壞することを忘れたのだ。

兵士等は幾週間も前から此橋を望んで居た。

『突貫！』

射擊線の兵士は狂激して突貫する。敵の砲兵は沈默したまゝである。

何うしたのだ……敵の彈藥は既に盡きたのであらうか？

ぼろ〳〵に裂けた軍旗が彼等の前で風に飜へつて居る。

『あの橋！……あの橋！……あの川！……あの川！……』

誰が先登第一に向ふ岸に着くであらう？誰が最先に敵と一騎打を始めるであらう？

『突貫！』

すると地獄の總ての惡魔に驅られたかのやうに疲れた兵士が前進する。彼等は泥と埃で固まつて最早人間とは思へない位だ。

『突貫！』名譽！……名譽！……名譽！……

狂氣の言葉！之が彼等を刺戟して前進させる。敵砲兵の沈默が彼等を招くやうに見える。彼等は戰友の死骸を越え、草地の處々に點在する小丘を越え、敵の拋棄した塹壕を越えて、無暗に驅けて行く……彼等は周圍を見廻さない。前方へ！唯だ前方へ

敵の砲はまだ沈默して居る。

『吾軍の勝利だ！』『あれに川が見えるぞ！』『橋があるぞ！』

『神と祖國の勝利！……』『神と共に！……神と共に！……』

『フラア！……フラア！……フラア！……』

『戰機は熟せり遠雷の』

幾百千の喉が一齊に軍歌を歌ふ。先登の中隊が橋に着いた！……

『フラア！』

イーゼルの渡河は成功である！『勝利は吾軍のものだ。』

兵士は橋に押寄せる。數分間經つと橋の上には兵士が蟻のやうにたかる。

『フラア！……フラア！……フラア！……』

『寄するが如き鬨の聲。』

幾百人が橋の上に群集し、その後方から幾千人が詰めかけて居る。

『フラア！……フラア！……フラア！……』

敵の砲が凄じく鳴り出す。

やはり沈默せしめられたのではなかつた。彈藥が盡きたのではなかつた……

『死』が刈り始めた！橋の上で刈り始めた！……將校の乘馬が苦み悶える兵士の體の間で暴れる、

それでも集團は前方に推進んで行く。すると突如、凄い眩光が發して地震のやうな音響が聞えた。

何であらう？天が破れたのか？地が裂けたのか？

對岸の幾千人の喉から一齊に歡呼の聲が起る……計略が成功したのだ。數週前から地雷を仕掛けてあつた橋が爆破された。黄ばんだ蒸汽が入道雲のやうに流れを横切つて擴がる。敵の伏兵が起る。何が出來したか知らない後方の兵士は、壞れた橋の拱門目蒐けて引續き押して行く。

幾千人が冷い洪水の中で藻掻いて居る。疲勞の爲めに今にも死にさうな幾千人が、生命の危險を虞れる念慮に依つて再び元氣を鼓舞される。敵砲が前進する兵士の集團に向つて照準される。

その砲擊の爲めに横隊や縱隊が續々と倒れる。

『勝利！勝利！』對岸の幾千人から叫聲が起る。『勝利！勝利！』

狂亂した腕が岸を摑まうとして居る。負傷者は呻いたり喚いたりする、喚けば命が助かりでもするかのやうに！銃劍と銃の臺尻が死者狂の腕や顏を目蒐けて襲ひ掛る。物を摑まうとする手は突き透され、擧げた頭はたゝき付けられる。岸も水の中も怖るべき修羅場である。臺尻と銃劍を以て人と人と相擊つ。

運河全體が血の川となつた。それでも後から後から聯隊が押寄せる。武器は血にねばり、暖かい肉がへばり付いて重くなる。

『勝利！……勝利！……勝利！……』と佛軍側が叫ぶ。

『退却！……退却！……退却！』の聲が終に五六人の口から出る。それから更に大勢の口が之を

繰返す。終ひには幾千人が一齊にこの絶望の叫びを發する。

『退却！……退却！……退却！……』戰友の死骸を越えて、戰友の悶え苦む體を越えて。

『退却！……退却！……退却！……あの山の向ふだ！……』

『勝利！……勝利！——勝利！……』

敵の巨砲が退却軍の縱隊に向つて死の雨を注ぐ。

兵士の血だらけの體がごた〳〵に塊つて、悶え苦しみながら綠の野をのたくり廻る。

イーゼル川の突貫戰は失敗した——六度失敗した。

『勝利！……勝利！……勝利！……』

戰死者と溺死者の死體で堰き止められた川が眞赤に兩岸に溢れて死骸の山を後から〳〵草地に流し出す。

『勝利！……勝利！……勝利！……』

第八章　悲痛の叫び

野戰衞生隊が戰場に出動した。

イレネ看護婦は知覺を失つた一人の男の上に體を屈めて居た。彼は二十五になつたかならないかの年輩で、白耳義中尉の制服を身に着けて居た。その怖ろしい傷を見て彼女は同情の血の涙を流した。擲彈が彼の傍で破裂したと見えて、彼は兩脚をもぎ取られて了つた。幸にして彼は何事をも知覺せずに、熟睡せるもの〻如く其處に横はつた。さうして沒せんとする日の光が氣品の高い彼の顏に射した。彼は恐ろしく蒼ざめて、その大理石のやうな唇を堅く閉ぢて居た。頭髮と鬚は何週間、否な何ケ月間手を入れないと見えて、ぼう〳〵と延びて肩や胸に被さつて居た。その痛々しい顏を見た最初の瞬間からイレネ看護婦は之に注意を引付けられた。どうして其顏が妙に見慣れたやうに思へるのであらうか？

突然彼女は想ひ出した。それはガイドの『基督の頭像』であつた。

彼女は此負傷者の前に跪いた。負傷して周圍に横はつて居る人々が彼女の眼に入らなかつた。その助けを呼ぶ聲が彼女の耳に入らなかつた。彼女の感覺と想念は此の不思議な顏、フランダースの戰場に於ける救世主の顏に司配されて了つた。

此負傷者の體は或生墻の下に横はつて居た。擲彈の破裂する前に彼は此處に隱れやうとしたのであらう。イレネ看護婦は戰場の光景も過ぎし日の怖ろしい出來事も悉く忘れて、身動きもせずに此不思議な人物の顏を見守つた。

終に彼女は看護婦としての役目を想出し、藥箱を開けて彼の正氣を回復せしめやうとした。しかし如何に努めても其効が見えなかつた。もう息が絶えたのであらうか？彼女は負傷者の呼吸を樂にする爲めに、その軍服のボタンを外した。內懷のポケットから紙入が轉げ落ちた。それを開けて見ると、

文學博士　ジョシュア・ド・クルイズ

と記した一葉の名刺が入つて居た。

彼女は吃驚した。彼女は以前に此名を耳にしたことがあつたが、それが今始めて彼女の心を妙

に感動させた。

ジョシュア、名が既に異常である、それに姓がド・クルイズだ。

ジョシュア。それはイエスと同じである。さうしてド・クルイズは「十字架」を意味するフランダース語である。十字架上の耶蘇！さうして彼女は、イレネは、平和の天使！

彼女は白耳義で最も有名な此人物の名を曾て讀んだことがあつた。それを彼女は急に想ひ起した。自分は精神的價値に於て白耳義第一の詩人たる人物に最後の手當をするのだと考へ付いた。

ジョシュア・ド・クルイズはブラバントとフランダースを讃美する一派の青年詩人の頭梁であつた。獨逸軍が殆んど無防禦な彼の祖國に侵入するのを見て、彼は琴を捨てゝ劍を執つた。さうして危險の矢面に國旗を翻した。曾て詩を以て國家を讃美した彼は、殘忍なる敵が其虛を衝くに及んで、國家の爲めに自己の血を捧げたのである。

これが其詩人ジョシュア・ド・クルイズだ。

『手傳ひませうか。』

看護卒のトマスが驅け付けたのである。彼は負傷者の瀕死の呻聲が洩れる赤十字運搬車から跳下りて生墻に近付いた。

『えゝ、トマスさん、手傳つて下さい。そうつとですよ、そうつとですよ。此方は知覺がないんです。

もう助かるまいかと思はれる位ですの。』

イレネ は深い悲哀を包むものゝやうに語つた。既に怖ろしい光景に慣れて了つた看護卒は——重傷者の誰れ彼れに區別を認めない看護卒は、驚愕に充ちて彼女を眺めた。しかし彼も亦この白耳義の中尉を見て心を動かされた。彼も亦奇異な感覺を經驗した。此中尉が普通の負傷者ではないかのやうに、戰場を蔽ふ幾千の無名氏の一人ではなく、他とは全く掛け離れた人物であるかのやうに彼は感じた。

イレネ 看護婦に手傳はせて、彼は**ジョシュア・ド・クルイズ** を殆ど餘席のない運搬車へ載せた。運搬車は**ウヰルヘルミ** の病院へ行かなければならない。各負傷者に對する處置は**ウヰルヘルミ** が決定するのである。

彼等は**ジョシュア・ド・クルイズ** を一人の印度兵の側に置いた。印度兵の軍服は血に浸しやうになつて居た。榴霰彈の爲めに右腕を粉碎されたのだが、彼は知覺を失はなかつた。英國の威力が**フランダース** の野に驅り出した**ヒマラヤ**の子は、苦痛に充ちた眼を光らせて擔架の上に横はつた。しかし其唇からは一つの音も洩れなかつた。無始無終の**ヴヰシヌヌ**神の律法は怨言を發することを禁ずるのだ。

イレネ 看護婦は印度兵を見守つた。彼女は其人の精神的價値を測ることが能きなかつた。彼女

は怖ろしい話に聞いて居る土耳其人や**スパヒ** 兵や**グールカ**族や**コザック**と同じやうな半野蠻人として彼を觀た。しかし此印度兵は此等と同じではなかつた。

ジョシュア・ド・クルイズ の傍に横はる彼は此人物を知つて居るであらうか？貪婪な英國に依つて死地に驅り出されたと獨逸側から評される此等の印度人を、**ジョシュア・ド・クルイズ** は詠じたことがあるのであらうか？しかし彼の唇は一語をも發しない。彼の感覺は「死」の翼に蔽はれ、「無」の黑衣に包まれて眠つて居る。**ウヰルヘルミ** の手術が効を奏すれば、彼は死の眠りから醒めるかも知れない。**イレネ** 看護婦は衷心から之を希望した。祈禱の時のやうに手を合せて、彼女は復た印度兵から蒼白な基督的顏面に視線を移した。

運搬車は本道に沿ふて徐々に進んだ。さうして終に困難な坂を登つて沙山の頂に達した。其處に**ウヰルヘルミ** が居た。しかし既に忙がしく仕事に取掛つて居た。**ジョシュア・ド・クルイズ** と例の印度兵を載せた運搬車は先着ではなかつた。さうして後からも、まだ他の運搬車が來るのであつた。

一同の眼は嘆願するやうに彼の方に向けられた。若し自由に動けたら幾千の腕が彼の救助を乞ふ爲めに伸ばされたことであらう。しかし昨日までは健全であつた壯丁が、今は不具者となつて腕を動かすことさへ能きない。それも皆戰爭の爲めである——此戰爭は到底避けることが能きな

かつたのだと誰かゞ言つた、あきれた言草だ！

運搬車は病院の入口に止つた。白い腕章を附けた二人の兵卒が手傳つて負傷者を下した。手術室の扉が開いた。イレネ看護婦は血だらけの手術着を纏つてメスを手にして居るウヰルヘルミを見た。屠獸者が仕事をして居るやうだと彼女は身顫ひしながら考へた。

しつかりして最後まで我慢するのだぞと彼女は聲を出さないばかりに我と吾心に命じた。

『エリカ看護婦、コロロホルム！』それはウヰルヘルミの聲であつた。

『コロロホルムはもう皆になりました。』

イレネ看護婦は朋輩の答を聞いて恐怖を感じた。彼女はウヰルヘルミが伯林の邸で自分に言つた言葉を想ひ起した。『時によると麻醉劑を使はずに手術する場合がないとも限りません。奥さん、貴方は之に堪えることが能きますか？』さうして彼女は『我慢いたします』と答へたのであつた。

彼女はジョシュア・ド・クルイズの兩脚のない體が手術を加へられる際に自分の言葉を守らうと決心した。彼女は心を取り直した。寢臺や椅子や床や卓子の上にごろ〳〵横はつて居る在院者の叫聲が彼女の耳朶に徹した。號叫、哀哭、呻吟。呪詛と祈禱の聲。發狂した動物の唸るやうな聲。聽者の神經を寸斷する絶叫。此地獄——（一個人が文明世界に宣戰した爲めに生じた）——の苦みから免れやうとして死を求める叫聲。

彼女は手術室の中を見廻した。それは慘禍と涙の海であつた。その中に激浪に圍まれた巖のやうにウヰルヘルミが立つて居た。彼は躊躇しなかつた、戰慄しなかつた、感動しなかつた。助手と看護婦が手術臺に運んで來る負傷者を、彼は次々に手術して行つた。彼は手術着の袖をまくつて、額に汗をかいて居た。その腕からは血がぽた〳〵と滴つた。傍には消毒劑の溶液を入れた桶が置いてあつたが、それはウヰルヘルミが盛んに切斷した手や足の指で最早一杯になつて居た。

『その次！』『その次！』『その次！』彼の口が引きりなしに『その次！』を繰返した。

手術室も負傷者も手術臺もイレネ看護婦の眼の前でくる〳〵と廻轉した。エイクス・ラ・シャペル出身の加特利克宗の同僚が壁に貼り付けた大きな耶蘇磔畫像が動き出すやうに見えた。彼女は大きな涙が救世主の眼から血に浸つた床へ落ちるかと思つた。

其次、それから又た其次。

今ウヰルヘルミが手術に掛らうとしたのは十七歳の少年であつた。此少年は兩親の許を逃げ出して志願兵として軍隊に入つた。彼は戰爭に出たくつて、じつとして居ることが能きなかつた。

さうして終に學業を捨てゝフランダースの戰場に立つたのだ。

銃丸が彼の鎖骨を碎いたのである。彼はウヰルヘルミが未だメスを刺し込まない前から、痛みの爲めにしく〳〵泣いた。ウヰルヘルミは探針を入れ、鉗子で挾み、メヌで截りながら、碎けた骨

を一片づゝ拔き取らなければならない。而かもそれを麻醉劑なしにやるのだ。彼は慰藉、激勵若しくは說諭の言葉を一言も口に出さうとはしないで、其まゝ苦み悶える生きた體を料理する怖ろしい仕事に着手した。

傷いた牡牛の咆哮のやうな叫聲が室內に響き亘つた。ウキルヘルミは心を動かされなかつた。

エリカ 看護婦と二名の看護卒が苦悶する少年を手術臺に抑え付けた。

イレネ 看護婦は殆ど氣絕しさうになつたが、氣力のありたけを出して自分を制した。永遠のやうに思はれた二十分が經つと、ウキルヘルミのメスは怖ろしい仕事を了へた。**イレネ**は目をそむけた。繃帶が濟んだ。ウキルヘルミは訊ね顏に彼女の傍へ來た。

『**イレネ**さん、貴方は誰を連れて來ました?』

彼女は例の印度兵と白耳義の青年將校のところへ彼を導いた。

『**ウエルテル**君、その印度兵を運んで來て呉れ。』とウキルヘルミが言つた。

『あの——もし。』**イレネ**が口吃りながら言つた。

『今やります、しかし何うも——』

手術臺に向つた彼は、印度人の肩のつけねに殘つて居た筋肉を悉く解した。**イレネ**看護婦は身顫ひした。ウキルヘルミは他の一人の容體を絕望と考へたに相違ない、さもなければ印度人から

先に手術を始める筈はない。

彼女は彼に近く寄つて、傷を縫つて居る彼に囁いた。

『先生、お願ひで御座いますから、もう一人の方を助けて下さいまし。』

『今やつて見ませう、しかし何うも——』

『どうぞ助けて下さい。』

『今やります——』

彼女は言葉を返す譯には行かなかつた。彼女はウキルヘルミが印度人の肩下の創口を縫ひ了るまで待たなければならなかつた。

その中にウキルヘルミはジョシュア・ド・クルイズの前に立つた。彼は脈を診て頭を振つた。

『**イレネ**さん、これは何うも——』

『先生、どうぞお願ひ致します!』

『手傳つて呉れますか?』

『はい。お手傳ひ致します。』

『それでは手術臺にお載せなさい。』

二人の助手がジョシュア・ド・クルイズを持上げた。

第九章　死人と共に

『着衣を脱つて呉れ給へ。』とウキルヘルミが言つた。

トマスは小刀を執つて、手術臺に死人の如く横はるジョシュア・ド・クルイズの洋袴を切り離した。

イレネ看護婦は顫える手先で上衣のボタンを外した。下着は埃と血を混合した粘々の塊に過ぎなかつた。しかしイレネは動もすれば氣絶しさうな自分を制し、對ひ合つた壁の磔像を凝視ながら、しつかりと立つて居なければならなかつたのだ。

『患者の書類をしまつて置きなさい。』

遠方からのやうに彼女はウキルヘルミの聲を聞いた。さうして紐で大事に括つた書類の小さい束を無意識に手に取つた。これは負傷者が内側のポケットに入れて居たのだ。着衣は床に投げ出された。

『エリカ看護婦、脈を取つて下さい。』

エリカ看護婦はジョシュア・ド・クルイズの右の手頸を持上げた。

『脈がちつとも解りません。』

『解るまでさうやつておいでなさい。』

此時ウキルヘルミは上腿の血管を縛り始めて居た。擲彈が上腿の一部分をむしり取つたのである。そこで出血する脚を取除け、骨を鋸り離し、創の表面を消毒して繃帯を施さなければならない。着衣や埃や火藥の微分子がちぎれた肉に附着して居た。

イレネ看護婦は此怖ろしい人間の脚の殘物を見て居ることは殆ど堪へられなかつたが、意志の力で自分を制して、書類を戸棚に納つてから、再び手術臺に戻つて來た。ウキルヘルミはメスを突入れて素早く筋肉を切り離した。患者は體を動かさなかつた。出血の爲めに全く知覺を失つたのが寧ろ彼に取つて幸福であつた。

ウキルヘルミは頭を振つた。その顏をイレネは讀むことが能きた。『手術の必要がない。決して助かりはしない。』しかしイレネの眼に表はれた嘆願に應じて、彼は骨鋸を手に執つた。

『イレネさん。貴方が抑えて居なければ可けません。最初は左の脚です。』

心意の猛烈なる努力を以て、イレネ看護婦はジョシュア・ド・クルイズの左脚を摑んだ。此人は昨日まで赤の他人であつたのだが、今彼女は彼の回復を心から望んで居るのだ。

戰慄が室内に傳はつた。他の負傷者は一時自分等の痛みを忘れて沈默した、さうして ウヰルヘルミ から目をそむけた。氣丈な看護婦や助手でさへ息を殺して頭を横へ向けた。

ウヰルヘルミ の鋸がぎり〳〵と生きた骨に食入つた。

ジヨシユア・ド・クルイズ は身動きもしなかつた。

『あゝ神様よ。どうぞ神様。』イレネは心に念じた。

鐵石の決意を以て彼女の手は患者の脚を摑んで居た。彼女の眼は壁の畫像に向ひ、彼女の唇は絶望的に十字架上の基督の言葉を呟いた、『吾神、吾神、なんぞ我を遺てたまふ乎。』

鋸はぎり〳〵と切り續けて終に其仕事を了へた。ウヰルヘルミ は創の表面に防腐劑をつけた。

二三分後に彼は次の仕事にかゝる用意が出來た。

『さあ今度は右の脚を抑えて居て下さい。』と彼はイレネ 看護婦に言つた。

殆ど氣絶するばかりになつて、彼女は二度目の怖ろしい仕事を引受けた。室内の人々は皆啞者のやうであつた。瀕死の重傷者もジヨシユア・ド・クルイズ の恐るべき身の上を案じて自分の運命を忘れた。

半時間の後ウヰルヘルミ は手術を了へた。イレネ看護婦は一人の看護卒の手を借りて兩脚を失つた體を室の隅の一寸馬槽のやうな寢臺にねかせた。これは他の寢臺が何れも久しい前から使用

されて居たからだ。

『「彼等はそれを馬槽に臥せたり」』と彼女は心の中で思つた。

その時一人の軍醫が入つて來た。

『ウヰルヘルミ 先生は貴方で？』

『さうですが？』

軍醫は高級將校の一人に手術を施す必要のあることを説明した。極めて困難な手術であるから、ウヰルヘルミ 教授以外の人に任す譯には行かない、銃丸を腹部から拔取らなければならぬが、腸の穿孔に因つて腸膜炎を惹起す虞れがあると言ふのだ。

『今すぐ行きます。』

『自動車が戸口に待つて居ります。閣下はミユーデルホーフトの校舍に居られます。あの校舍が病院になつたのであります。』

『よろしい、解りました。』

『いや、之から直ぐお伴をしなければならんのです。』

『それでは出掛けませう。』

斯う言つてウヰルヘルミ は、ジヨシユア・ド・クルイズ や他の負傷者の血で硬ばつて居る手術着を

着たまゝ、自動車に飛乘つてミューデルホーフトに急行した。

屋外では日が徐々に暮れて行つた。今迄名狀すべからざる慘狀を照して居た太陽は沙山の後の海の浪に沈んで、黑い夜が綠の野から匐ひ上つて來た。さうして遙かイーブルの後方に當つて巨砲の轟音が新たに起つた。

もう病院に灯が點つた。數個の蠟燭と石油燈の不景氣な明りだ。そのちら〳〵する焰が寢臺の奇異な影を床や天井に投げ、壁に貼つた磔像を大きく見せた。

深い疲勞の感が石炭酸と沃度とエーテルの臭に充ちた室に滲み亘つた。唯だ處々に低い唸り聲や溜息が聞えるのみだ。「眠」と「死」が音のしない足で室中の寢臺を一つ一つ窺つて歩いた。

トマス助手と二人で寢ずの番をして居たイレネ看護婦は興奮した眼で傍のジョシュア・ド・クルイズの蒼ざめた顏を凝視した。それから壁の磔像に視線を轉じたが、終に彼女の眼は此負傷者のポケットから發見された文書に留つた。彼女はそれを眞夜中に戶棚から取出したのである。紙を縛つてあつた紐を解いて、彼女は一頁づゝ讀み始めた。

此等の頁に於て彼女は眞のジョシュア・ド・クルイズを發見したやうに思へた。彼女は彼に逢つたのは今日が始めてではあるけれども、過去に於て彼は爾く彼女に接近して居たのである。今まで彼女は離魂病者のやうに闇夜に自分の路を搜さうとして、それが能きなかつたが、遂に彼女の人に對する良人の背信の所行が彼女を先づウヰルヘルミの家と戰地に導き、それから此大詩人の枕邊に導いた。

彼女が讀んだのは何であつたか。

『史詩。白耳義の最期の歌。』と題して左の詩句が書いてあつた。人をしてイリアッドを聯想せしむる作である。

『寄語す吾父祖の國！旭日太洋の浪に駕して搖光淡き明星と會する處。九體の神とアテナの寵を受くる國。工匠の母。「自由」の額を飾る夜光の球。何れの邦か能く爾に敵するものぞ。嗚呼吾父祖が聖別せる鄕土よ。幼少の我を守り育める鄕土よ。吾歡喜の大潮を祝し、成人の憂患を慰むる鄕土よ。我は爾の美の如く崇高なる韵格を以て爾を謳はまほし。嗚呼吾愛慕の情を抒ぶる詩句もがな。イリオンの沒落を歌ひつゝ巨匠が彈ぜる琴の我にあらば、律呂妙なるヴージリウスの笛我にあらば、我は母國の命運を詠じて後世に傳へん。南風に乘じて來りて爾を襲へるものは誰ぞ。恐るべき兇器を持して毒風の如くに爾を衝けるものは誰ぞ。詛はれたる掠奪の鬼、信義をなみし、言を食み、神人を蔑ろにす……咄、屹々たる吾言語、爾な贊するにだも吃る吾舌、母國よ、我は言ふことを休めて吾劍を佩かん。今より後劍光を以

て爾を讃美せん。』

イレネ 看護婦は我に復つた。義憤を以て胸を波うたせながら彼女は**ジョシュア・ド・クルイズ**の最期の詩を朗誦したのであつた。何か動いた。彼が體を動かしたのであらうか？

彼の手が掛蒲團の上で力なく動いた。自分の詩の韵律が彼の正氣を回復したかのやうに見えた。

『貴方は私の聲が聞えますか、お氣が付きましたか？』彼女は勝ち誇る心を抑えて穩かに訊ねた。

憐むべき不具者は幽靈をでも見るやうにぼんやりと彼女を眺めた。彼は自分が何處に居るか、自分が如何なる目に逢つたかを少しも知らないのだ。二人の眼が會つた。**イレネ**の熱情に輝く眼と、既に一切の俗を離れた大詩人の遠方を望むが如き眼と。

『もつと、もつと。』**ジョシュア・ド・クルイズ**が喘ぎながら言つた。

イレネは理解した。彼女は膝に載つて居た紙片に再び視線を向けたが、讀むことが能きなかつた。死せんとする微風の囁きのやうに低い彼の聲が再び彼女の耳に入つた。しかし悲哀と憂慮とで鋭敏になつた彼女の耳はその一言一句をも逸しなかつた。詩人は葦間を吹く夜風の呻きのやうな弱い聲で辭世の歌を吟じた。それは哀悼の海から打上げられたかと思はれるやうな歌であつた。

『聖き女神は爾なるか。若き心に爾を祈願し、闇中日の光を欣求せる時、吾夢想に靈感せる女神は爾をるか。菫の冠戴けるアゼンスもイリオンもスパルタも、功業不朽の英雄に命じて爾は祭り爾を拜せり。女神よ。榮譽の施與者よ。爾の光明を求めたる吾祈願を爾は叶はせたり。爾が翼に送られて美しき岸邊を撫づる微風、馥郁として吾面を吹けば、我は氣力を得て、立く大なる海原に爾を視たり。秋の霧天の帳の如く垂れて萬波の淙々を鎭め、聞ゆるものは唯だ海鷗の魚を漁る聲。神秘なる靜寂の裡に彷徨ひ、わが得たる天福こそは爾の賜なれ。其時哀歌長く引き、一聲霹靂鳴り、風雨烈しく起りて、荒涼たる冬は我を襲へり。聖きものよ。風雨騷げども我は近く爾の聲を聞けり。風雨憩ひて夜黑く冷やかなれば爾の聲更に近かりき。嗚呼我を激勵し、我を鼓舞する女神として、而かも吾が常に欣慕する女神として、將た心優しき母及び姉として、爾は今吾傍にあるか。酷烈の晝、陰暗の夜、吾心の切に求めしは爾なるか。』

ジョシュア・ド・クルイズの聲が段々と消えた……

彼はフランダースと彼の女神とを擁するかの如くに兩腕をひろげた。伸した彼の手が**イレネ**看護婦の肩に觸つた。激昂の爲めに夢中になつて彼はしつかりと彼女を摑んだ。彼女は自分の體を引

放さうとする意志も氣力もなかつた。再び知覺を失つて枕に戻る前に、彼の唇が動いた。『うむ、さうだ！これが女神だ！これが女神だ！』彼は恍惚として訥りながら言つた。

『とう〳〵やツつけた。』

塹壕から塹壕へ、兵士の口から口へ、此言葉が充分意味も解らずに傳へられた。しかし『とう〳〵やツつけた』の一語を耳にして、白耳義軍と佛蘭西軍と英國軍の士卒の顏には、何となく安堵したやうな、張りつめた心の弛んだやうな色が現はれた。

第十章　洪水の來襲

始めはフランダース海岸の人夫であつたが其後堤防工事の際に看守人となつた或る白耳義人が、自分の國の參謀本部に策を献じて殆ど絶望した人々の胸に希望の光を點じた。海岸の堤防に穴を穿つて北海の水を附近の沙山や野原に注ぐべき方法があつた。人爲的に洪水を起す設備が出來て居た譯ではないが、求めればその方法がないでもなかつた。此緊急の際には極端の方法を講じても支がない、否な講ずべきである。結果が何うなるかは其時誰にも解らなかつた、しかし何事此最後の一策に依つて決するのであつた。

昔白耳義が和蘭と一緒に**ネザーランド**と稱された頃は四方に敵を受けて、國家の自由が斷えず其侵略の爲めに危くせられた、さうして場合によつては、水門を開いて北海の水を引入れることが唯一の國防手段であつた。常に**フランダース**と**ブラバント**を保護すべく待つて居る北海は、全土に流れ込んでそれを不可抗の腕に擁するのであつた。しかし國内の川に堤防工事を施した爲めに此應急策は久しい以前から行はれなくなつた。けれども今日でもこれが不可能ではない。唯だ此最後手段は非常なる勇氣と決心とを要する。太洋の水は入つて來るが、急ではない、徐々に不可抗の勢を以て流れ込むのであるから、太洋が仕事を完了するまでは塹壕を維持する必要がある。

白耳義の國土は全體が孔だらけである。大小幾千の運河、沙山の間や草地の導水渠、多くは人目に立たない無數の細い水流、此等が水國を東西南北に走つて居る。さうして此平野から僅かの距離に位する北海の潮が此國に大水害を加へたことは一度や二度ではない。太洋の水を急に恐ろしい勢で氾濫せしめ、同時に遁げる機會を設けやうとしても、それは最早不可能である。故に他の方法を以て水を引入れやうといふのだ。

それには此多孔狀の國土を充分に海水に浸さなければならぬ。沙山の水が長蛇の如くに全土を流れるまで、又た運河が水を以て充され、沙山の間の導水渠と草地の中の細い流れが膨んだ海綿のやうになるまで、水氣を吐出しながら絶えずそれを補充する海綿のやうになるまで、充分に國

土を海水に浸さなければならぬ。さうすれば地面の裂け目から源の分らない不思議な水が湧き上つて敵の塹壕に注ぐ。水嵩は段々と增して塹壕内の兵士の胸や肩を越え、遂には塹壕や沙山を蔽ひ、浸水した地方は一面に泥の海と化し、人も馬も砲も砲車も永久に此中に沈んで了ふのである。

かうなるまでには何時間かゝるか解らぬ。太洋が破壞と救濟の大事業を完了するまで根氣よく待たなければならぬ。堤防工事の看守人が深い絶望の闇を照す光明として此策を獻じたのである。そこで此朴訥な男、否な此救主は、工兵の一隊と共に敵の砲火の下に横はる危險な道路を進んで海岸に出た。曾て幾百萬の巨費を投じて築造された大堤防に出た。さうして彼等は夜間に國難救濟の仕事を了へた。大堤防に孔があいて海水が流れ込んだ。

次に來たのは懸念と期待の幾時間であつた。一時間又一時間、一夜、一日、それから又た一夜。此策は成功するであらうか？看守人の豫言は的中するであらうか？彼は幼少から此土地と此海に親んで來たから之を熟知すると言ふ、果して其言の如くであらうか？それとも彼の考へは間違つたであらうか？

戰鬪は一の塹壕から次の塹壕へと引續き行はれた。又た長い夜が明けて晝になつた、それから又た長い晝が夜になつた。土龍のやうな地面掘りの戰爭が繼續した。一寸退いては守り、守つては

又た一寸退く、かうして次策に白耳義の土地が征服されて行く。それでも太洋の水は來なかつた。祖國の爲めに最後の奉公として此策を献じた人物は結局考へを誤つたのであらうか？

歩兵が戰を交へた。向ふ所敵なしと考へられた砲兵も出た。しかし如何なる努力も侵略軍を撃退することが能きなかつた。彼等は優勢に其陣地を維持した、さうして力と頼む海水は來なかつた。

堤防看守人が參謀本部に献じた策は一の夢であつたらうか？希望の夢であつたらうか？

兵士等は任務を盡しながら、其胸を敵彈の的としながち、其列伍の刻々に疎らになつて行くのを目撃しながら、心耳を出血する祖國の胸に當てゝ頻りに聽いて居た。來るだらうか？來ないだらうか？さわ〳〵と流れる音がするやうだ、ぶく〳〵と湧く音がするやうだ。あれがさうか？あれが敵を溺れしめる水か？あれが神秘の底から湧いて來る水か？

水は遂に來ないのであらうか？

兵士等の想像は沙山に浪の打寄せる海岸に飛んだ。英國の大戰艦が射距離内に碇泊して居るダンカークの沿岸に飛んだ。今尚ほ防禦軍に屬するのは不幸なる彼等の鄕土の一角に過ぎない。此一角の海に沈む瞬間を十五萬の士卒が待つて居た。

あれは不思議の深みから湧く水が人間の舌のやうに、ぺちゃ〳〵と救助に來たことを語るのであらうか？『さあ來たぞ、さあ來たぞ、昔からお前の味方であつた太洋がお前を助けに來たぞ、お前の敵を溺らしてやるぞ。』と囁く積りなのであらうか？穴だらけの土地をのたり廻つた賢い蛇が終に頭を擡げて、水晶の珠のやうな光を以て救助の合圖をするのであらうか？

不明な一時の感情に刺戟されたかのやうに、塹壕内の兵士等は互に〻と近く寄つて行つた

これが本當かしら、それとも彼等は自らを欺いて居るのであらうか。一時間二時間と經つに從つて彼等の足が段々と冷たくなるやうに思へた。地面が少しづゝ頽れ落ちるやうに思へた。彼等は水の上に、水の中に立ちつゝあつた。

『やつて來たぞ……』『やつて來たぞ……』『やつて來たぞ……』

兵士等は互に恁う言ひ始めた。軈て幾千人の口が之を囁きつゝあつた。

飛んで來る擲彈に體を露出する危險をも忘れて、兵士等は靴を脱ぎ濡れた足を擧げて、段〻が增して來る證據を見せ合つた。

獨逸軍は相變らず砲撃を續けた。今や非常な大敵が起つて彼等を全滅の運命に陷れやうとして居る。その爲めに彼等はフランダースの一角を抛棄して遁走しなければならないのだ。しかし彼等は此大敵を少しも知らないやうであつた。

敵軍はまだ何も感付かないのであらうか？

塹壕内の水は刻々に嵩を増した。目立つて嵩を増した。すると歡喜が總ての人の心に漲つた。國土には大洋の水がすつかり滲み込んだ。さうして其奥底から泉の如く塹壕へ洪水を注ぎ込んだ。

手は氷のやうに冷たくなつて最早銃を握つて居ることが能きないやうに思はれ、脚は殆ど感覺を失つて立つて居られない位であつた。しかし兵士等は戰鬪を續けた。敵は白耳義の土地の奥底に水がざわ〳〵と流れひた〳〵と擴がつて行くのを未だ知らないで居るのだらうか？

水の深さは腰に達した。塹壕は半ば充たされた。終に敵は浸水の勢がいつまでも猛烈なのを見て、意外の或物が、不可解の或物が自分等を襲つて來たことを理解したやうであつた。

彼等はフランダースへ來てから怖ろしい幾週の間に寒さと濕氣とに慣れた——しかし之は何であらう？幾日幾夜降り續いた雨も此樣な結果を來たさなかつた。單に半ば水と見るべき此奇怪な國土から水が滲み出て來るのみではなかつた。それ以上の何事かゞ起つたのだ。別の何事かゞ起つたのだ。水嵩は段々に增して行くばかりである。

腰や腕の周圍に粘土と泥を交へた怖ろしい濃褐色の水がぴちや〳〵と取卷いて、その氷のやうな冷たさが死の宣告の如く胸を顫へさせ、川に投り込まれた狂犬のやうに今にも其犧牲を溺死させようとする。

水は刻々に殖えた。益々深くなつて行つた。それでも彼等は理解しなかつた。大洋が自己の愛

する國を、自己の所有する國を、他人の手に渡すまいと決心した國を解放する爲めに、フランダースの大小の水脈を通つて流れ出したのであらうとは、彼等は夢にも想はなかつた。

尤も斯くの如き事柄の可能性を想像したものはあるが、眞面目にそれを信ずるものは一人もなかつた。さうした想像はいつも荒唐無稽として斥けられた。

水嵩は益々殖えた……今や水は胸に屆いて銃身を舐りつゝあつた。愈々北海が活動を始めたのだ。

塹壕の後方では、砲彈が霰の如く注いで幾百人の戰死者を出して居るにも拘らず、兵士等は將校の命令を受けて、藁だの木のきれ端だのバラックから引抜いた板だの、何でも手當り次第に束にして後から〳〵と運び込んで居た。それでも彼等は地面の中から湧いた水とばかり思つた。塹壕を乾かして引續きそれを領有することが能きると考へた。

しかし彼等こそ感付かないが北海が活動を始めたのであつた。

水は益々殖えて肩に達した、さうして抗すべからざる勢を示して來た。木も藁も板も浮きあがつて運び去られた。暗褐色の潮が今は破滅の運命に陷つた兵士等の唇まで達して、何もかもそれに流された。彼等はもう射撃することが能きなかつた。

洪水は歩兵の兜帽が殆ど見えなくなるまでに水嵩を增して、銃は其中に沈んで了つた。

白耳義軍の戰線からは射擊が歇んだ。塹壕は空虛になつて居た。フランダースの防禦者は退却して了つたのだ。敵は隊伍を正して集合し始めた。液化し行く平野に夜が下りた。

綠の野が水銀のやうに潑溂たる生氣を帶びた。街も道路も牧場も運河も溝も小川も一面の水となつて、それが昇つたばかりの月の光にきらめいた。

フランダースの神聖な國土が海の女神の膝下に歸つた。

敗走が始まつた。月の冷やかに見下す水の中を、聯隊が續々一生懸命に逃げて行つた。見渡す限り路が一つもなく、唯だ處々に人家や工場や高い木がぎら〳〵した黑い水面を秡いてぽつ、ねんと立つて居るのみだ。幾多の川や堀が洪水に蔽はれて見境がつかなくなつた。フランダースの敵を目的とする幾多の陷穽が巧みに蔽はれて了つた。

敗走が全軍に亘つて行はれるやうになつた。それでも水嵩は段々々々と殖えて行つた。

第十一章　哀しき臨終の聲

浸水は野戰病院の設けてある低い沙山の脊に達した。さうして冬の朝の蒼白い光線が窓から射し込む頃には、建築物の入口を水がひた〳〵と打つて居た。

ウキルヘルミは歸つて來なかつた。漸く危險の迫つたことに氣が付いた看護卒と看護婦は大急ぎで病院を逃げる準備をしたり、負傷者を有り合せの車に載せたりし始めた。多分浸水の中を通る路があるであらう、東を指して逃げれば何處かで何とかして水のない地面に出ることが能きやうと彼等は考へた。

彼等は困難な仕事に取掛つた。彼等の手は人間以上の力を以て働いた。此騷を外に見て超然として居るものが唯一人あつた——それはイレネ看護婦だ。彼女は病院の一番隅に跪いて壁間の磔像を見詰めながら、瀕死のジョシュア・ド・クルイズの譫語に耳を澄して居た。

彼の譫妄狀態は絕頂に達し、回復は最早不可能となつた。フランダースとブラバントが產んだ大

詩人は死期に迫つて居た。その彷徨ふ心が抒情詩的の言葉となつて表白された。此等の臨終の言葉に彼の全生涯の感想が集中されるやうに思はれた。**イレネ** 看護婦は何處までも耳を傾けた。病院の戸が開け放たれて負傷者が後から後から戸外の運搬車へ運び込まれるところだのに、彼女は彼の口から出る言葉を熱心に待ち設けた。

イレネ は最早外界の存在を意識しなかつた。強い秋風に連立つて生子鐵板の外圍ひに段々と上つて來る洪水が彼女の眼には入らなかつた。始めは小さな水流であつたのが段々と勢を增して病院に流れ込み、**ジョシュア・ド・クルイズ** が不具の體を横へる馬槽の所まで上つて來た、それが彼女の眼には入らなかつた。彼女は片力の手に詩人の右手を握り、他方の手に彼の詩を書いた紙を摑んで居た。さうして他の人々が立退の仕事に忙しいのに、彼女は**ジョショア・ド・クルイズ** の聲に耳を傾けた。それは彼女の外何人も氣が付かない低い呟きであつた。

ジョシュア・ド・クルイズ は詩句を繰返しつゝあつた。大洋に沒した**ヴネタ**の遠い鐘の響のやうに、彼の聲が鳴りひゞいた。**イレネ** には彼の言葉が自ら白耳義の運命を概括するやうに思はれた。

『吾國よ、爾は曾て若き獅子の如く强かりき。爾の腰は鋼鐵の如く、爾の四肢はセダー材の如く、爾の爪は火にて鍛錬せられたる爪なりき。然るに敵は夜に乘じて來り、爾の腰の力を挫き、爾の

爪を折りて樵夫が枯枝に遺れたる錆鋸の齒の如く鈍くせり。

『吾國よ、爾の野は花環なりき。爾の都邑は貴重なる寶玉なりき。爾の村落は「夏」の晴着の緣に繰り込まるゝ薔薇の如くなりき。

『然るに敵は來れり。彼は爾の野に爾の子の血を撒きて、綠の草原を熟せる蒲萄より搾れる酒の如くに赤くし、爾の都邑を燒きて**ニネヴ** と**バベル** の廢墟の如く黑くし、爾の村落を破壞して、堆たる石を一つだも留むることなく、木枯に葉の落ち盡せる灌木の如くになせり。

『吾鄕土よ、爾の母と處女は武裝せる塔の如かりき。彼等は美と溫雅とに充てり。母の乳房は豐なる乳を、營養を、生氣を、爾の嬰兒に與へたりき。

『然るに敵は來れり。彼は爾の母と處女の乳房を削ぎて槍尖に突刺し、之を高く揭げて嘲笑へり。而して爾の將來の希望たりし嬰兒は飢と渴の爲めに憐れにも衰えて死せり。

『吾國よ。爾は寺院と殿堂とを有せり。爾の熟練なる工人は美しき趣向を以て彩飾せる布面に新しき世界を創造し、爾の公館は過去幾世紀の奇蹟を以て充滿せり。

『然るに敵は來れり。彼は爾の塔と寺院と殿堂とを毀ち、美しき趣向を以て彩飾せる錦を裂けり。

『吾國よ。爾は壯丁を奪はれ、地上の諸邦の中にて虛弱なるものとなれり。噫吾國よ、吾血の涙は爾に向つて下る、そは我爾を愛すればなり。

『我は恥辱の衣を着たる爾を愛す。棘の冕を戴き、頭髪に灰をかけたる爾を愛す。

『我は爾の惱みと苦みとの故に、如何なる他の國の被れるよりも大なる爾の慘禍の故に、爾を以前に倍して愛するなり。

『爾は小なりしが、小なるものゝ中にて最も大なるものとなれり。爾は吾儕が祖先の神の右に擧げられ、爾と爾の敵の審判を神に求むるを得ん。

『吾國よ。吾少年の新婦よ。吾心に秘し希望の妻よ。爾が姿の如何に麗しかりしよ！

『爾の士女は青春の花冠を戴き、不朽の名譽の冕を冠りて、海邊の都の街區を逍遙せり。

『爾の船は東方の海岸より金糸にて縫へる衣裳を、印度の山川より眞珠と綠玉を、東洋の果てより琥珀と軟膏を爾に齎せり。爾の船の海を進むことは三人の博士達が星に導かれて進めるが如し。

噫吾國よ。爾は歡喜に充てる不死の兒にあらざりしか。音樂の如き笑聲は曾て花の如き爾が胸より發せり。我は爾の笑聲を聞きて之を吾心に保ちたりき。

『日輪よ、汝の爲めに姿を飾る乙女の如く、爾は日光を受けてまばゆき爾の額に、幸福と爽快とを齎す青き海の紐を卷きたりき。

『爾は幾千の異邦人に健康と氣力を與へ、彼等は爾の腕に擁せられて休安と和平を得たりき。

『噫吾愛する國よ。爾は信義をなみする敵の手によりて續けさまに打擲せられたり。不信と叛逆

と虛僞とを、敵は爾の額に烙印の如く印せんことを欲せり。

『然れども爾が戴ける棘の冕と爾の額より滴る血は其烙痕を抹消す。

『汚辱の烙印は却て爾の敵の額に殘り、彼等は永久に地上の諸邦の間に汚名を留むべし。

『エホバ神言ひたまひけるは「是れ彼等の受くる罰報なり。我爾等にカインの印記を附け、諸人彼等を知りて避ぐる如くせん。彼等は地上の何處に行くも異人たるべし。世の人皆な彼等の通れる路を避け、又た之を呪はん」と。』

此處まで來るとジョシュア・ド・クルイズの聲は今までよりも明晰になつた。彼は奮發して起き上らうとした。馬槽の中に嬰兒のやうに横へて居た自分の體をその中から出さうと努めた。

イレネ 看護婦は彼を支へやうとしたが、氣力も知覺もなくなつた彼はがつくりと倒れた。

彼女が力の竭き果てた彼の頭を擧げると、彼の聲が今一度鳴り亘つた。白耳義を救はうとする海の水が彼の横はる馬槽の周圍に漣を立てゝ居た。

『吾が愛する國よ。我は爾の大と美を歌はんと欲す。我は爾の苦惱を、痛苦を、爾の滅亡を、歌はんと欲す。

『然れども爾の旗を持ちて我が起てば、電雷吾頭上に裂け、西方の雲吾眼界を暗まし、敵槍吾體に入りて水と血と創口より迸れり、是可なり。』